
黄金の魂に導かれし靈魂

ドナルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄金の魂に導かれし靈魂

【Nコード】

N1337N

【作者名】

ドナルド

【あらすじ】

ナイフで刺されて死亡した青年は、気付くと英雄王に憑依してしまった。アンリ・マユの復活を阻止する為にも、自分が生き残る為にも、新たなマスターにバゼットを迎え聖杯戦争に参加する。果たして彼の未来は――――

TURN 1

―――ナイフで刺された！

その事実を、脳が理解するのに数秒の時を使った。

自身の心臓に、まるで杭のように突き刺さったナイフ……

血が溢れる、霞み行く意識の中で、恐らく自分が助からないであろうという事を、直感的に悟ってしまう。

特に不審な点はなかった。

今日も会社で嫌味な上司に耐え、少し俯き加減で帰宅していたのが不味かったのか、気付いた時には、胸にはナイフ。こんな事なら、しっかり前を向いて歩いておけば良かったと思うが、もう遅い。

「ぐおぐ……」

喋ろうとしても、上手く声が出ない。

熱い……血が……全身が沸騰しているような奇妙な感覚。

見上げると、男が立っていた。

こいつが、最近世間を騒がしている通り魔なのだろう。

（何だよ………何で俺なんだ……）

こういう理不尽な不幸にあった時の、人間の思考というのは、大抵が俺が感じている『何故自分が……』というものだ。

自分以外にも碌でもない人間はいる……

未だに親のすねをかじって生きるニートもいるし、その辺りには不良やチンピラだっている……！

自分は真面目に生きてきた……就職して直ぐに、最後の肉親であっ

た母が死に、上司に愚痴を言われ、そろそろ結婚でもしようかと考えた矢先に、襲ってきた不幸……！

だが文句を言っても意味はない。……何故ならこれから数秒、または数十秒後に己は死ぬ。

それは如何合っても抗うことの出来ない確定事項。

分かっている……

世界なんて理不尽だ……

自分は今不幸だと思っているが、世界には自分より不幸な人間なんて大勢いる。

だから、これは世の中に有り触れた慣れ親しんだ悲劇に過ぎない。

精々がお茶の間のTVに流しただけ流れ、視聴者が「可哀想、可哀想、酷い事件だ」と言っただけ三日後くらいには、忘れ去られるような小さな事件。

だが、そんな事はどうでもいい……

俺は、世界が理不尽だろうと知ったことじゃない。

「……生き……た……い」

そんな呟きを残すと、

ゆっくりと、最後の命の灯火は消えていった。

黄金の魂に導かれし靈魂

第1話

「ここは……！」

明るい視界が見えた事に気付くと、慌てて飛び起きた。

起きてから、もしかしたらナイフで刺された痛みが来ると思い、身構えたがなんともない。

もしや傷は既に完治したとでも言うのだろうか？

「何を言っている、ここが”我”の部屋だというのは明確であろう」

気付けばそう口に出していた、だが違う。ここは俺の部屋じゃないし、部屋の豪華さからして病院という可能性はないだろう。

壁には第6感を刺激する絵画や年代物のワインがズラリと並んでいる。

まるで大富豪の部屋だ、同時に俺には全く覚えのない場所でもある。なら此処は何処だ？

少なくとも自分は、こんな豪華な部屋に入れるような人間では……

「うう…」

そう思った瞬間に襲う、強い拒否反応。

記憶の奥深くから溢れる感情が、ここが自分の部屋であると認識させた。

「なんだこれは……？」

記憶が滅茶苦茶だ……」

二つの別々の記憶が流れ出し混乱する。

だが本当に驚いたのは、部屋にあった鏡を何気なく見た時だった。

「なんだ！…こっ、これはーーーーーッ！」

鏡に映った姿。

それは自分の姿ではない。

インゴットのような金の髪、ルビーのような深紅の瞳。彼には、この容姿に見覚えがあった。

「何故、”我”がギルガメッシュになっているウ！」

頭が混乱する。

余りにも予想外の事態に陥り正常な反応が出来ない。そんな時、部屋のドアが開いた。

「どうした”ギルガメッシュ”
騒がしいぞ」

「……………」

現れたのは一人の神父。

彼は無理矢理、自身の頭を冷静にさせる。

「別到大した事ではない。

そんな事より”言峰”王たる私の部屋に無断で入るとは、どういう見だ。

さっさと失せるがよい」

何とかギルガメッシュらしい口調で、言峰を追い払った。

「まさか、こんな阿呆な事態になるとは……………」

あれから教会内や街中を歩き回って分かった事だが、この街の名前は『冬木市』そしてこの教会の名前は『言峰教会』…………つまり信じ難い事だが、自分はFateの世界に憑依したらしい…………

しかも憑依先がギルガメッシュ……

正直に言う『Fate／stay night』というゲームはやった事があるが、それほど詳しいわけじゃない。

一応FateルートとUBWルートはクリアして、ホロウなんたらとかいうのもやったが、HFルートはやってないのだ。

（くっ！桜は余りタイプのヒロインじゃないからといって、後回しにしたのが、失敗だった……！）

今からプレイしたくても、既にゲームは手の届かぬ場所にある。

おまけにFateの世界は、友人が言うのは、設定がかなり緻密らしく、同社の出している他のゲームや小説と世界観が繋がっているそうだ。

「というよりギルガメッシュの居なくなったFateってどんなストーリーになるんだ？」

軽く想像してみる。

まずは手始めにFateルート。

Fateルートでは、確かギルガメッシュは本当の最後の最後まで物語に関わってこなかった。

初登場は確か、キャスターをぶっ殺していた……

つまりギルの居ない世界では、主人公勢はそのままキャスターと戦うという事だ。

流石にその後は予測不能……

次はUBWルート

Fateルートと違って、ギルガメッシュは物語の中盤ぐらいから既に関わってきていた。

具体的にはワカメのサーヴァントになったり、ロリっ子の心臓を抜き取ったり……

ギルの居ない場合は……士郎達はそのまろりっ子と同盟を組んでキャスター討伐となるのだろうか。

最後にHFルート

未プレイ

・
・
・

やばい…このルートが一番洒落にならんツ！

どうなるんだ！HFルート！……

「こんな危険な世界で我は生きていけるのか……？」

ゲームは面白かった、それは認めよう。

だが、自分がゲームの登場人物になるのは勘弁願いたい。

呼び出されるサーヴァントはどれもいつも一癖も二癖もありそうな者ばかり……

ん？……待てよ！こういう時はあれだ、逆に考えるんだ！

冬木市は危険だからどうやって生き延びようじゃない！冬木市が危

ないんなら居なくなればいいと考えるんだ！

都合の良い事にギルガメッシュは受肉した英霊……それに幸運Aや黄金律もある。

これなら多分生きていける……

そんな思考をしていると、この作戦の穴を見つけた。

「確か言峰の目的はアンリ・マユの誕生だったな……」

アンリ・マユが実際に復活するとどうなるのだろうか……

この世全ての悪か……UBWルートではギルが、アンリ・マユ未成年バージョンを世に解き放とうとして、最後は聖杯に取り込まれたんだ……

「まさか、アンリ・マユが復活したら我も不味いのでは!？」

有り得る話だ。

例えば日本から遠く離れた……そうブラジルに逃げたとして

← 冬木市にてアンリ・マユ誕生

← 世界を滅ぼす

← ギルガメッシュ吸収

なんていう事になる可能性があるッ！

不味いぞ、これはアンリ・マユを復活させたら不味すぎる事態になる。

（未だに憑依なんて信じたくもないが、仮にも生きているのは確かだ。

折角拾った命……こんな事でもう一回死んでたまるか！)

取り合えず聖杯を破壊する。

確か第五次以降は聖杯戦争は起きない筈だから、今回さえ乗り越えれば何とかなる。

先ず状況を整理しなければならない。

アンリ・マユ誕生を阻止する為には、まず言峰を何とかしなければならぬ。

だが言峰の腕には令呪がある、幾ら俺が言峰を襲ったとしても、唯の一言：「死ぬ」と言われれば死ぬしかない。暗殺という手段もあるが、言峰は確か代行者とか言っていたし、ギルガメッシュの記憶から言峰が只ならぬ使い手だというのは、分かる。

素人に暗殺出来るような男じゃない。

「他の奴をどうするかがネックだ。

キャスターの目的は葛木と暮らすために受肉する事だったか？

聖杯の使用方法も知ってるようだったし、手を組むのも一つの手段かもしれないな……」

となると、警戒するべきは……：セイバーだ。

セイバーは俺の言う事なんか、余程の事がない限り信じないだろうし、士郎が成長すれば自分の天敵となりうる。

「……待てよ、いつそのことアーチャーを唆して、士郎を殺させるか？

いや……そうなるセイバーが凜のサーヴァントになるフラグが出来る。もし間違って士郎の体にアヴァロンがある事が知られてば、素で負け兼ねないな」

俺の脳裏にエクスカリバーで吹っ飛ばされるギルガメッシュが浮か

ぶ。

「やっぱり主人公勢とは手を組むのが得策か？……いや選択肢によつては、あっさり主人公退場もある。

最初は様子見をしといて、士郎が順調にストーリーを進めてたら介入するか？」

それにだ。注意すべきなのは、セイバーだけじゃない。第五次聖杯戦争で召喚されたサーヴァントは強者揃いだ。

危険度レベルだと

アーチャー↓セイバー↓バーサーカー↓ライダー↓キャスター↓ランサー↓アサシンだろうか。

セイバーとアーチャーは置いといて、バーサーカーは近付かれれば最悪だ。絶対に近付いたら駄目だ。

ライダーには石化の魔眼にペガサスがいるからな……。キャスターは姦計には気をつけよう、だが直接戦闘なら多分勝てる！…アサシンは山門に縛られているから、遠距離から波状攻撃すればOK。

「やっぱり最初に倒すべきなのはランサーだな」

既にバゼットはランサーを言峰に奪われており、ランサーは今や言峰のサーヴァントだ。

それに早々に言峰を排除出来れば今後の展開を、上手い具合に持っていける確率がグンと上がる。

どうするのがいいだろうか……。いっそのこと『天地乖離す開闢の星』で教会ごとぶっ飛ばすという手段が………

「あっ…！」

そこまで考えて気付いた。

先ず前提条件として、俺はギルガメッシュの宝具使えるのか？

どうする、確かめるにしても、いきなり教会内で事をやらかせば言峰が不振に思うかもしれない。

出来れば誰にも見られない場所で行いたい……。

「そうと決まれば早い……」

近くに置いてあった財布。

見るからにブランド物で札束がドツサリ入っている。恐らくはギルガメッシュの物だろう。

別に能力を確認するのに、冬木市で行う必要はない。

「ギルガメッシュ、何処に行く？」

教会を出る時に、言峰に呼び止められた。

「フン！何故我が外出するのに、お前に言う必要がある。

私の庭をどう散策しようと私の勝手であろう」

ピシヤリと言い放って、さっさと教会から出る。

こういう時、ギルガメッシュの唯我独尊な性格は便利だ。

相手も話も祿に聞かず行動する事が出来る。これがセイバーだったらそうもいかない。

タクシーに乗って二時間。

某県某所にある森に到着した。

ここなら他のサーヴァントが来る事も、魔術師が来る事もないだろう。

「ええと…あった、あった」

鍵のような剣を取り出すと、どうするか悩む。

そうだ、王の財宝が展開される時の描写、それが一番強いアニメのシーンを思い出す。

「確か————ゲート・オブ・バビロン——王の財宝」

空間が裂ける。

いや開いていく！

そして繋がった！あらゆる宝具の原典が収められる場所、黄金の都へと…

「良しッ！……次は、そうだな。

あそこにある岩でも攻撃してみるか」

使い方はある程度理解出来た。

今度は岩に向かって攻撃してみる事に…が…。

「……………」

無音、王の財宝はうんとも言わない。

「……………あれ？」

その後、色々と口に出して命令してみるが、王の財宝は何の反応も示さない。

どうやら生き残りへのゴールは思ったよりも遠そうだった。

TURN 2

その後、森で数時間ほど色々と試して分かったことがある。

どうやら王の財宝から物を取り出すには、取り出すものを正確に、ゲート・オフ・パベロン認識出来なければ駄目のようだ。

実際に近くの小石を入れてみて、取り出そうと思ったら容易く取り出せた事からも、この推測が真実だろうと分かる。

「つと、エアは……無理か。」

ゲームで詳しい内容を知っている宝具なら、もしかしたらとも思っただが……不可能だったな……」

やはり自分の記憶じゃなく、ギルガメッシュの記憶でなければ、幾ら認識していたとしても取り出すことは不可能のようだ……。

「今の我は……ギルガメッシュの記憶を焼いているDISKみたいな物か……」

俺というハードディスクにギルガメッシュの記憶を上書きしているような、そんな感じなのだろう、今の状況は。

しかしギルガメッシュの記憶というのは膨大だ。現代での生活の事は勿論、世界を支配していた時の記憶………その中で上書きされる宝具の知識は、極一部でしかない。

今取り出せる武装は、Bランク程度の剣二つにDランクとCランクの宝具が幾つか……

これでは戦いにならない。

世の中、そう都合良くはいかないのだな、と少しだけ溜息が出た。

黄金の魂に導かれし靈魂 第2話

彼がギルガメッシュに憑依して三日の時間が流れた。
その間、彼が何をしていたかと言うと……

「おおおっ！ 我のシャイニングガンダムがああ！」

何故かガンダムVSガンダムをしていた。

よく使う機体はシャイニングガンダム。というよりそれしか使っていない。

「流星に一機だけしか使わないと飽きるな……」

まあいい、そう言ってPSPをベッドの上に放り投げて、ワインをグラスに注ぐ。

彼は元々は極普通の庶民だったのだが、ギルガメッシュに憑依してからは、どうも金銭感覚が変わってきた。これも黄金律Aの影響かもしれない。

「さて、言峰はつい先程セイバーのマスターが来たと言っていた。
つまり主人公は最初の選択肢を間違わなかった訳だ。と、なんと今頃はバーサーカーと戦っている頃か」

バーサーカーの戦いの決着には色々種類がある。

士郎が助かるには、多くの選択肢の中から正しい解答をしなければならぬ。

ギルガメッシュとしては、士郎と凜が両方とも死亡するルートであ

って欲しいが……余り過度な期待はかけていなかった。

これは戦争、少しでも選択をミスれば即座に死亡が確定する厳しい世界。

事態は常に最悪の方向に考えるべき、というのが彼の考えたのだ。

「三日たって少しは他の宝具も使えるようになったが、依然としてエアは沈黙したまま、宝具を大量射出するには、量がまだまだ足りない。やはりCプランでいくか……」

ちなみにCプランというのは、ギルガメッシュの考えた、聖杯戦争を生き抜くための三つのプランである。

ちなみに

Aプランが形振り構わず冬木から逃げる

Bプランが士郎や凜やセイバーに土下座して協力を仰ぐというものだ。

彼としては、Bプランも選択肢としては、考えたのだが、何故か凄まじい重圧が掛かったのでお流れとなった。

ギルガメッシュは嘗てこの世全てを支配していて王。

それに英霊エミヤと衛宮士郎の能力は、宝具の贋作を造ること。

全ての宝具の原典を持ち、また贋作嫌いのギルガメッシュにとって、吐き気のする能力である。

ついでに言えば、他の誰かに頭を下げるという事自体が、頂点に君臨する王にとっては有り得ない事なのだ。

「頭を下げる」というのは「相手を目上だと認める」というのと同じ義。

「目上の者など存在しない」という英雄王の魂は、彼に「頭を下げる」という行為を断じて許す事はない。

だが実を言うと、これはギルガメッシュだけの考えじゃない。

英雄王に憑依した彼自身の「王」の在り方に対する考えでもあるのだ。

つまり英雄王と彼自身の価値観が一致する事に限っては、破ることの出来ない絶対法則として、彼を縛るのである。

幸いなのは彼自身が「勝つ為には過程は問題じゃない」という思想の持ち主であるため、「油断慢心」は完全に捨て去れたことだろう。こんな最弱状態で油断などしていたら、命が幾つあっても足りない。

そして最後のCプランとは……

「さてと、何時までも此処に居ても仕方がない」

ギルガメッシュは座っていたソファから立つと、外出の準備をした。幸いな事に言峰は、礼拝堂を留守にしているようで、簡単に抜け出れた。

歩いて数十分。

目的の場所に辿り着いた。

「此処か……中々に良い造りをしている…」

そう言うときルガメッシュは、その古びた洋館の中に入った。

その中で一人の腕から夥しい血を流した女性を見つけると、ニヤリと笑う。

女性の名はバゼット・フラガ・マクレミッツ。

歴代最強とされる封印指定の執行者である。

実際その戦闘力は高く、相手によってはサーヴァントとでも戦えて、

勝利する事も不可能ではない規格外。

同時に聖杯戦争における、敗北者でもある。

「まあいい、先ずはこれが成功してからだ…」

ゲート・オブ・バビロン

王の財宝から一振りの剣を取り出す。

この剣こそ、原初の「裏切りの概念」を秘めし短剣。

ルールブレイカー

よく似た宝具として、キャスターの持つ破戒すべき全ての符などがあるが、もしかしたら、この宝具の派製品なのかもしれない。

「我はこの宝具の所有者ではあっても使い手ではない。さて我にサーヴァントの契約を破戒できるか……それとも不可能か…」

緊張する。

リストカットなどの自傷行為をした事のない彼にとって、自らを刃物で突き刺すのは始めての事だ。

少し深呼吸して息を整える、そして短剣を…思いっきり突き刺した！

「ぐうう……これは…ッ！」

苦痛、焼けるような焦がされるような痛みが、ギルガメッシュを襲う。

UBWルートのセイバーはそれほど苦痛を感じていたような描写はされていなかったが、これは段違いの痛みだ。

複雑に絡まった魔術契約を、宝具により強引に破戒していく……まるで骨の中でダイナマイトが炸裂しているような痛みだ。

やがて雲散していた魔力が止むと、ギルガメッシュは己の身を確認する。

「…ど、どうやら成功のようだ……」

凄い疲労感が彼を襲う。

しかし此処で倒れる訳にも行かない。

もしかしたら今の行いを嗅ぎ付けたサーヴァントが、自身を襲わないとも限らないのだ。

「さて、後は……」

ゲート・オブ・バビロン

王の財宝から一つの瓶のような物を取り出す。

つい二日前に彼が記憶した、今のところ唯一ある回復手段だ。

そして、これの効能も詳しく知っている。

ギルガメッシュは大きく振りかぶると、容赦なくバゼットの体に浴びせた。

「うう……う……」

効果は直ぐに現れた。

先程まで重体であった体が癒えていく。まるでビデオの巻き戻しを見ているかのように……

それだけじゃない。

失われた筈の左腕までもが、戻っていく。

「ここは……私是一体……」

やがてバゼットが身を起こす。

意識の朦朧としていたバゼットだったが、戦闘を職業としている者としての経験値が、一瞬で状況判断を行わせた。

（そうだ、私は言峰に左腕の令呪ごとランサーを奪われて……そし

て…)

「失礼ですが、貴方は何者ですか？」

恐らくは自分を助けたものだろう。

失われた左腕を見れば、物の見事に復元している。

つまり、失われた肉体を復元されるほど、高い能力を持つ魔術師だと、彼女は推察した。

「おいおい、お前も元はマスターであろう。」

いや、そうか…：我が受肉しているから気付かないのか」

「受肉だと!？」

まさかお前はサーヴァントだとも言うのか!」

「然り。我は第四次聖杯戦争において呼び出されたサーヴァント。そして元言峰のサーヴァントでもある」

「な、言峰のサーヴァントだと…?」

バゼットは男に対する警戒心を強めた。

様子を伺い、何時でも襲いかかれるように準備する。

「そう警戒するな…：と行っても無駄か。

まあいい、一から説明してやる。

そもそもお前の求めていた聖杯というのはだな…：」

ギルガメッシュから全ての説明を聞かされたバゼットは、呆然と洋

館の天井を見上げた。

何でも男の真名はギルガメッシュ。即ち人類最古の英雄王。

ギルガメッシュが言うには、聖杯はこの世全ての悪に汚染されて使い物どころか害悪にしかないそう。冬木市で発生した未曾有の大災害は、汚染された聖杯の影響らしい。

流石にそんな危険な物を協会に持ち帰る訳にもいかないだろう。

もう一つ驚いたのは、ギルガメッシュあの男の提案。

曰く、自分のマスターとなり共に戦えだそう。

どうやら本調子ではないらしく、元々の戦闘力の半分すら発揮出来ないらしい。

優秀なマスターを得て能力を上昇させる意味でも、同時に戦闘力としてもギルガメッシュは、バゼットを欲していた。

「私は…何をしているのだろう…」

思い出す。自分の召喚した蒼い槍兵を。

実物を見て彼女の英雄幻想は木っ端微塵になった。

だが同時に、ランサーに対し親しみを感じ、彼の気性も心の中では好ましく思うようになっていた。

だがそれは、自分の不注意であっけなく終わる。

監督役である言峰からの急な呼び出し、ランサーの忠告も聞かず、そして…敗退した。

しかもだ、そこまでの事をされたのに、言峰を憎みきれない自分が一番腹が立つ。

「はあ、どうするかなど決まっている…」

ギルガメッシュがバゼットに出した選択肢は二つ。

？大人しく魔術協会へ戻る

？ギルガメッシュのマスターとなり再び聖杯戦争に挑む

負け犬としての生を選ぶか

それともギルガメッシュと共に戦い、勝者となり聖杯を破壊するかの二択。

既に答えは出ていた。

バゼットは、覚悟を決めた目で立ち上がる。

「ほう、答えは出たのか、魔術師？」

「ええ、勿論です」

「そうか、なら答えを聞こうか」

封印指定の執行者としてではない。

バゼット・フラガ・マクレミッツのケジメとして、ここで逃げるのは許されない。

逃げれば、それは一生負け犬として生きる事となるだろう。

「————私は戦う、貴方と共に」

それで十分だった。

ギルガメッシュが頷くと、バゼットが詠唱を始める

「汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に。聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら——」

「誓おう。汝の供物を我が血肉と成す。バゼット・フラガ・マクレ

ミッツ、新たなマスターよ」

エーテルが収束し、二人をラインが結ぶ。

令呪はない。元々マスターに振分けられる令呪は限られている。
既に令呪を奪われたバゼットに、浮かぶ令呪はない。

「そう言えば貴方の事を何と呼べばいいのですか？
流石に真名で呼ぶ訳にもいきません」

「そうだな…我の事は『ギル』と…そう呼べばいい」

此処に契約は完了した。

^{主人}マスターとサーヴァント^{奴隸}

その関係は二人には当てはまらない。

何故ならマスターにサーヴァントを抑えるのに必要な首輪^{令呪}はなく、
その関係はどちらかというと同盟に近い……それもギルガメッシュ
が上位の……

冬木の地のマスターとサーヴァント達は気付かなかった。

こんな古い洋館で、ある意味最も恐ろしいペアが生まれてしまった
事を……

誰も気付く事はなかった。

TURN 2 (後書き)

という訳でダメットさんと契約する話でした。
ちなみにギルガメッシュのステータスはFate／stay nightのものではなくFate／zeroを元としています。理由は勿論、魔術師として優秀なダメットさんがマスターになったからです。一応そのステータスを以下に参照。

【クラス】アーチャー

【マスター】バゼット・フラガ・マクレミッツ

【真名】ギルガメッシュ

【性別】男性

【身長・体重】182cm 68kg

【属性】混沌・善

【能力】筋力B 耐久B 敏捷B 魔力A 幸運A 宝具EX

【クラス別能力】

対魔力…C

二節以下の詠唱による魔術を無効化する。大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

単独行動…A+

マスター不在でも行動できる。

【保有スキル】

黄金律…A

人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。

カリスマ…A+

大軍団を指揮・統率する才能。

ここまでくると人望でなく魔力、呪いの類である。

神性…B

最大の神霊適正を持つのだが

ギルガメッシュ本人が神を嫌っているためランクダウンしている。

【宝具】

王の財宝

ランク…E→A++

種別…対人宝具

黄金の都に繋がる鍵剣。

空間を繋げ宝物庫の中にある道具を自由に取り出せるようになる。

使用者の財があればあるほど強力な宝具になるのは言うまでもない。

天地乖離す開闢の星

リンク…EX

種別…対界宝具

現在は使用不能。

ただ原作では、手加減してセイバーのエクスカリバーの出力を上回ったり、一撃でイスカンダルの王の軍勢を粉碎したりと、色々といトンデモ宝具。

恐らくFateという作品の中で？1の破壊力を誇ると思われる。

TURN 3

既に聖杯戦争は始まっている。

衛宮士郎は、どうやら生き残っているらしい。

朝に登校して来た者の中に、士郎と思わしき人物がいたので間違いない。

つまり未だに七騎のサーヴァント全員が健在。

H F ルートを知らない以上……いや例え知っていても油断は出来ない。

既に俺という存在が、ギルガメッシュに憑依している時点で、ストリーは捻じ曲がっている。

ゲームの知識は、余り信頼しない方が無難だろう。

「幸い、こちらにはバゼットという戦力がいる……
それに慌てる必要はない。時が来れば我の宝具も段々と使用可能と
なっていく……」

先ずは時の経過を待ち、力を回復する。

現状ではそれが一番賢い選択だ。

今の自分ではサーヴァント相手に分が悪い。

だがこうも考える。

これは聖杯戦争である前に Fate / stay night という
ゲームの世界だ。

そして俺は H F ルートを未プレイ……

推測だが、U B W ルートまでで、あの登場人物達の粗方の物語は終わっているのかもしれない。

重要なのはこれから……そうホロウで存在が描写されていた、慎二と桜の祖父である男。

祖父の描写はF a t eルートとU B Wルートでは、全く描写されていない。

つまり祖父が関わるのは、未知のH Fルートである確率が限りなく高いのだ。

「老人は侮るべきじゃあない。

特に魔術師は年月を重ねれば重ねるほど厄介になる人種だ。

死徒27祖はその典型だ」

それに言峰も既に、俺が裏切ったという事を、ラインの消失により悟っただろう。

この場所がばれるのも時間の問題かもしれない。

言峰は優秀な代行者……それにバゼットの手の内も完全に知られている。

一応、言峰の方は俺が全力を出せない状態であるとは知らないから、そう短絡的な手段には出ないだろうが、それでも奴が油断ならない相手であるという事実が変わらない。

「籠城という消極的な策じゃなく、もっと攻撃的な戦術をとるか…」

バゼットの方は特に問題ない。

最初は少しダルそうだったが、今では完全に元の力を取り戻している。

あれならサーヴァント相手でも、そう引けを取らないだろう。

「……先ずは腹ごしらえだな…」

何時までも此処に居ても仕方がない。

軽い昼食でも摂取しようと思ひ、ソファから立ち上がった。

黄金の魂に導かれし靈魂

第3話

間桐邸の地下。

そこは外界と隔絶された一種の異界となっている。

工房、魔術師なら誰でも持つそれだが、間桐の工房は、他の魔術師達の工房と比べても、実に不気味だ。

理由は簡単。地下室の壁、天井と至る所に潜む蟲、刻印蟲。

もし、何も知らない一般人が入り込めば数十秒の内に蟲の餌となるだろう。

工房に生息する蟲は十や二十ではない。

百や二百、正確にはもっといるだろう。

そんな場所に一人の小柄な人影が降りてきた。

普通なら蟲の餌となる筈だが、その人物相手には、蟲達も大人しく鳴りを潜めている。

当然だ、この齡100はあるのではないかとも思う老人こそ、この間桐家の真の支配者にして、蟲達の主である間桐臓硯。

蟲達が老人の体へと入り込んでいる。

喰われているのじゃあない。逆だ。

蟲が老人に吸収されているのだ。

数百年の妄執と腐敗。

その象徴こそが間桐臓硯とも言える。

老人が、蟲を取り込むのを終えると、蟲倉の中心へと歩いていく。そこには、この地下室には相応しくない少女がいた。

「カッカッカ、調子はどうかの？」

「……………」

蟲倉の中心にいる少女は何も答えない。ただ静かに黙すだけだ。

「そうそう、これは老婆心だかの…
お前の思い人と遠坂の倅が、二人揃って教会へ向かったようだぞ」

ビクンッ、と少女の肩が震えた。

どんなに苦痛を与えても無反応だった少女が、その一言に反応した。

（……やはり、ここが賭け時かの…？）

今回の聖杯戦争は不安定だ。

第三次にアインツベルンの呼び出した、この世全ての悪により聖杯は汚染され、結果的に第四次では、本来なら選ばれない筈の殺人鬼がマスターとなり、本来なら英霊ですらない存在のキャスターが呼び出された。

だが今回の第五次はそれにも増して歪んでいる。

監督役は前回のアーチャーを現界させ続け、そのアーチャーは既に神父を裏切り敗退した封印指定の執行者と契約を結んだ。

（しかし、それも奇妙な事に—————）

器だけは完璧だ。

埋め込んだ聖杯の欠片は、○の体と完全に馴染み、理想的な聖杯となっている。

これなら『への道も開けるだろう。

それに臓硯の懸念はそれだけじゃない。

予想では、順当に行けば最後に勝利するのは、ほぼ間違いなく前回ギルガメッシュのアーチャーだ

何といったって元々の力からしてギルガメッシュは、規格外のサーヴァントであり、マスターである女は歴代最強と謳われる封印指定の執行者だ。

その二人が最終的に勝ち抜いた場合はどうなるか……

恐らく封印指定の執行者は、聖杯の正体を魔術協会に忠実に報告するだろう。

そうなれば、神秘の秘匿を第一とする協会のことだ。

ほぼ間違いなく聖杯戦争そのものの解体を行うだろう。

そうなれば臓硯の夢は終わる。

それを防ぐ意味でも臓硯自身が、参戦して勝利する必要があるのだ。

「まずは駒を用意せねばならぬか……」

????????????????

ギルガメッシュとバゼットは、冬木市にある廃ビルに来ていた。

理由は単純明快。

ここ最近、冬木市中で発生しているガス漏れ事故。
一般人なら兎も角として、バゼットにそんな嘘は通じない。

十中八九、他のサーヴァントの仕業だと悟ったバゼットは、早急なる捜査を開始したのだ。

ギルガメッシュは、柳洞寺に居城を構えたキャスターの仕業だと教えたのだが、バゼットは譲らなかった。

最初は渋っていたギルガメッシュだったが、最悪の場合、呼び出されたキャスターのサーヴァントが、裏切りの魔女メディアではない可能性も少なからずある。

それに現場の形跡から、詳しい事が分かるかもしれないという弁もあつて、結局は来る事にした。

なんといったってギルガメッシュは魔術に関して、それほど詳しい訳じゃない。

前世は勿論として、ギルガメッシュの記憶にも基本的な知識はあるが、流石に詳しい知識はないのだ。

「どうだ、バゼット。
何か分かったか」

「いえ……やはりギルの言った通り、この魔力の流れは柳洞寺へと向かっている…」

それに僅かに残る痕跡も、現代の魔術では見ないタイプです。
キャスターのサーヴァントで間違いないでしょう、流石に本当に『メディア』かどうかは分かりませんが」

「そうか……」

少なくとも無駄ではなかった。
ガス漏れ事件を起こしているのがキャスターのサーヴァントの仕業だと確認出来て、キャスターがメディアである可能性は、ほぼ確実となった。

「そろそろ帰るぞ、バゼット。
余り無用心に出歩けば……………」

—————他のサーヴァントに出会ってしまう。

そう続けようとした時だった。

バゼットが獣のような動きで、跳躍する。

それを見たギルガメッシュは……

瞬時にバゼットが敵を察知したのだと理解した。

左に跳躍した瞬間。

先程までギルガメッシュの立って居た場所に、五つの矢が突き刺さる。

「この矢……………まさかッ!？」

最悪の予想が脳を霞めた。

そしてそれは現実となる。

矢の飛んできた方向を見ると、いた。

大弓を構えた、赤い弓兵と魔術師達が。

「此処に居るって事は、あんた達が最近のガス漏れ事件の犯人ってわけ？」

サーヴァントと同じ色の赤い服を着た魔術師が、口を開いた。
隣に待機しているサーヴァントは、鷹の如き眼光で、ギルガメッシュとバゼットの挙動を監視している。

「フン、戯けた雑種だ。

我をあの魔女と間違えるとは、その罪は万死に値するぞ」

冷静に状況を判断する。

状況は正直に言って非常に不味い。

唯でさえ能力的に相性の悪いアーチャーを相手に、今の不完全な状態では勝ち目は限りなく薄い。

勝機といえば、バゼットの存在ぐらいだろう。

出来れば逃げたいが、この相手はそう簡単に逃がしてくれる相手じゃない。

「それより、あんたは一体………ナニ？」

「………何のことだ。この身は貴様等も良く知るサーヴァントであろう」

「それは可笑しいわね。

普通のサーヴァントはあんたのように”受肉”していないわ」

（チッ！…気付いたか。

しかし、ここまで早く凜とアーチャーと遭遇したのは、完全に計画外だ。

どうする………どうする………）

「クックククッ、貴様は阿呆か、雑種？

何処の世界に、戦争で自分の情報を暴露する馬鹿がいる」

そう言いながら、彼は第四次聖杯戦争で、ランサーとセイバーに初っ端から真名を暴露したイスカンドルを思い出したが、戦闘には関係ない事だと、頭の片隅へと追いやった。

同時に相手の様子を伺い理解する。

遠坂凜は戦う気だ。

元より敵サーヴァントを探して夜中の街を巡回するほど、積極的に生命力に溢れた魔術師だ。

退くという選択肢は存在しないだろう。

（戦うしかない………戦闘で使える宝具は二十。

これだけでは到底、英霊エミヤを倒す事は、不可能だ。）

今使える武具と駒を瞬時に確認して戦術を練る。

二十ある宝具の中で最も対人戦に適した物を選び、抜いた！

引き抜いたのは、一本の槍。

視覚からでも、槍から発する魔力と瘴気は、認識出来る。

「アーチャー、任せたわよ」

「了解した、マスター。

下がっている」

アーチャーもまた双剣を手を持った。

だがギルガメッシュが展開した宝具は一つじゃなかった。

どんどんギルガメッシュを覆っていく、黄金の鎧。

これこそ彼の愛用する最高峰の鎧である。

「バゼット！あれの準備をしておけ！
このサーヴァントは手強いぞ！」

—————あれの準備

つまりバゼットが持つ切り札、数少ない現存する宝具「斬り決る戦
神の剣」を準備しろという事だ。

これで少なくとも無限の剣製は封じられた。
アンリミテッド・ブレイドワークス

先手はギルガメッシュ。

一切の躊躇も捨て、アーチャーへ槍を突く。

無論、そんな単調な攻撃が通用するアーチャーではない。

双剣で巧みに受け流すと、ギルガメッシュの体に、双剣を喰らわせた。

「！……………これはッ！」

驚愕はアーチャーのもの。

アーチャーの持つ双剣の名は、干将・獬耶。

ランクはCーと低い部類だが、それでも宝具であるのに変わりはない。

その宝具の一撃を、黄金の鎧はまるで何ともないというように弾いたのだ。

アーチャーに出来た僅かな戸惑い。

その隙について、槍を繰り出す。

熟練した戦士としての経験が、アーチャーを即座に冷静にした。

確かに黄金の鎧は、凄まじく頑丈だ。

干将・獬耶である鎧を突破するのは不可能だろう。

なら方法は単純、鎧に覆われていない部分、つまり頭を潰せばいいのだ。

「フン！やはり頭を狙ってきたか…
読んでいたぞ、雑種！」

そのような事はギルガメッシュが一番良く知っている。
鎧に覆われた腕で、双剣による攻撃を防いだ。

（やはり強い…）

アーチャーの剣技は、通常の英霊達の技とは違う。
天賦の才ではなく、愚直に積み重ねられた経験と努力によって裏打ちされた業。

これこそが英霊エミヤの強味！

そしてギルガメッシュと打ち合うアーチャーも、表情にこそ出さないが困惑していた。

（こいつは……こんな戦い方をする奴だったのか！？）

磨耗した記憶、その奥深くに残る聖杯戦争の記録。

バラバラになった記憶のピースを見渡しても、この男の戦い方は物量に任せた殲滅戦だった筈だ。

こんな、少ない手札を有効的に使おうとするような英霊ではなかった。

（いや理由は分からないが、私のやるべき事は変わらない）

そう思いなおすと再び双剣を振るう。

既に鎧に双剣を当てた数は、二十にも届くが、一向に鎧には凹み一つ出来ない。

「どうした、どうやら既に息が上がっているようだが？」

「戯けが！自分の心配をするのだな、フエイカー贋作者！」

別に息が上がっているわけじゃない。

一応はギルガメッシュの経験があるので、ある程度の戦闘は出来るし、彼自身が前世である程度の武術の心得があるので、最低限は戦えるが、それでもこれが初実戦なのだ。

その心理的プレッシャーは生半可なものじゃない。

（まだだ……まだチャンスはあるッ！）

ギルガメッシュは周囲を確認する。

廢ビル状況、そして構造。

フィールドの情報詳しく把握するだけでも、勝率は上がる。

そして……チャンスは訪れた。

「アーチャー！……戻って！」

凜が大声で命令した。

アーチャーが確認すると、凜に高速で接近する人影が一つ。彼女の判断は正しい。

凜は言峰からある程度の格闘技を叩き込まれているので、その辺のチンピラには魔術無しでも負けない。

同時に、言峰という良き師を得たお陰で、相手の力量を正しく判断する能力も、備わっていたのだ。

バゼットの戦闘者としての技能が、自分を確実に上回っていると直感した凜は、即座にアーチャーを呼び戻したのだ。

そしてアーチャーは見事に主の期待に答える。

「なにッ！」

再びの驚愕！…いや先程よりも驚いた。

バゼットはあろう事か双剣を、強化されている拳で払い、そのままアーチャーに反撃して来たのだ。

純粋な接近戦ではギルガメッシュより上だと、アーチャーは判断する。

「驚いたな。サーヴァント相手に生身で挑む小僧にも呆れたが、サーヴァントと互角に戦えるマスターが参加してるとは、規格外にも程がある」

「英霊に誉められるとは光栄です。
ですが、貴方達にはここで敗退して貰います」

アーチャーの軽口に全く反応せず、攻撃を止めないバゼット。

だが彼が抑えなければならぬのは、バゼットだけじゃない、ギルガメッシュもいる。

凜を守りながらの接近戦は不利だと感じた彼は、凜を抱えて一時後退した。

「どうする、アーチャー。」

あのマスターは規格外よ……まさかサーヴァントと肉弾戦が出来る魔術師が参加してただなんて、完璧に予想外だわ、それにあの魔術

礼装も気になるし…」

バゼットの側に浮かぶ鉄の玉のような物を見て言う。

「魔術礼装？……確かにそうかもしれないが、あれはそんな生易しいものじゃない」

「？…アーチャー、あれが何だか分かるの？」

「ああ、あれは恐らく斬り決る戦神の剣だ」
フラガ・ラック

「はあ！？斬り決る戦神の剣って神代の魔剣じゃない。
フラガ・ラック
何で魔術師が…」

「そんな事を私に言われても困る。

だが、あれは迎撃に関しては一級品の宝具だ。

私が切り札を使ったとしても、あの宝具は因果を歪め「先に攻撃したという事実」を「相手より先に攻撃した」という事実に変えてしまう。

つまりこの時点で私は、切り札を封印してしまった訳だ」

とんでもない事を、さらっと言うアーチャー。

ピンチの筈なのに、全く危機感を感じさせない言い方をする。

「それで、切り札の封印された貴方はどうするのかしら？
まさか尻尾巻いて逃げ出すとか言わないわよね」

「それこそ冗談だ。

この身には唯の一度の敗走もない。

それに、私は元来取り柄のない男でね。

一つを極めるより、多くを修める道を選んだのさ。
言っただろう、君の呼び出したサーヴァントは『最強』だ」と

アーチャーの握っていた双剣が消える。

変わりに現れたのは、通常よりは大きな弓。

「I am the bone of my ^{我が} ^{骨子は} sword」

弓に装填されたのは、矢ではなかった。

それは剣！だが剣というのは余りのも奇妙な形をしている。

刀身はドリルのように捻り曲がり、切る事より突く事を目的とした
剣。

「―――“偽・螺旋剣”」
カラド・ボルク

「危ない、バゼット！」

アーチャーが矢を放ったのとギルガメッシュが、反応したのは同時
だった。

バゼットは、アーチャーが宝具を使うと悟ると、
斬り決る戦神の剣 フラガ・ラック
を何時でも放てるように準備した。

カウンターにおいて斬り決る戦神の剣は最上の宝具。バゼットは半
ば勝利を確信したが、それは裏切られる。
フラガ・ラック

斬り決る戦神の剣は相手の切り札に反応するが、何の反応も示さな
かったのだ。

これの意図する事は一つ。

信じ難い事だが、見るからにAランク相当はある宝具だが、あれは
アーチャーの切り札ではないのだ。

「チィィ!…間に合うか…」

ゲート・オブ・バビロン

王の財宝から盾を取り出し自身の身を守る。

だがアーチャーの放った矢は、あっさりと盾を吹っ飛ばすと、そのまま突き進んできた。

「まだだ! まだ手はあるッ!」

「悪いがこれで終わりだ。
ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想」

アーチャーが短く呟いた瞬間、
廃ビルの中に
光が、爆ぜた。

廃ビルの中は、炎に包まれていた。

酷い惨状だ。まるで中で手榴弾が炸裂したような……いやもつと
酷い。

これ程の破壊はアーチャー一人で成し遂げられたのだ。
そしてこんな状態になっても……黄金の王は死んではいなかった。

酷い状態だ。

鎧に覆われた体は兎も角として、頭からは夥しい程の血が流れている。

無傷で気絶しているマスターから推測すると、恐らく庇ったのだろう。

「ハアハアハア……フェイカー贋作者……よくも……よくもこの私の顔に傷を……」

「次は顔だけじゃない。頭を潰させてもらうぞ」

アーチャーは一切の油断もない。

血を流すギルガメッシュの姿を、鋭い眼光で睨みつけている。

「クッククツ、アーチャー。」

これで勝ったとも思っているのか…だとしたら滑稽だぞ」

「…何がいいたいのかね」

「何がいいたいだど？」

こういう事だッ！

弾ける！」

アーチャーが悟った時には、遅かった。

恐らくは偽・螺旋剣カアド・ボルクを放った時の爆炎に隠れてやったのだろう。

廃ビルの柱には宝具と思わしき剣や槍が突き刺さっていた。

「これは…！
ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想！」

アーチャーの得意技である壊れた幻想だが、別に彼の専売特許というわけじゃない。

だが自身の宝具の中にある魔力を爆弾として炸裂させる、口に出して言うのは単純だが、それは自身の攻撃手段を失うと同義なのだ。爆発した宝具は、そう短時間では回復しない。

だからこそ、壊れた幻想は最終手段であるし、英霊とは多くが高い誇りを持つ者だ。好んで自分の獲物を爆発させようとは思わないだろう。

その最終手段をギルガメッシュは使った。
普通なら有り得ない量の宝具を所持する、ギルガメッシュだからこそ出来たとも言える。

既にアーチャーの攻撃によりダメージを負っていた廢ビルは、柱の半数が破壊された事により容易く倒壊していった。

ギルガメッシュは既にバゼットを抱えて脱出している。

アーチャー一人なら霊体化すれば問題ないが、生憎とここにはマスターである凜がいる。

アーチャーは凜を抱えると急いで廢ビルから脱出した。

直ぐに千里眼を使い辺りを見渡すが、ギルガメッシュの姿はない。

「…逃げられたか…」

溜息を付くと、

アーチャーが珍しく悔しそうな口調で呟いた。

TURN 4

目が覚めると、そこは拠点である洋館だった。

思い出す、私は廃ビルで敵サーヴァントの攻撃を受けて……それで…

「目覚めたか、バゼット」

男がいる。

戦闘時に着ていた黄金の鎧ではなく、ライダースーツを纏っていた。頭からは夥しい血、包帯のような物で止血している。

「ギル！……それは戦闘の時に！」

「そうだ、我は他のサーヴァントと違い表面だけでも傷を隠すなどという、器用な真似は出来んからな。

意識が戻ったなら早々に治癒しろ。

包帯というのは好かん」

言われるまでもない。

直ぐに治癒魔術を掛けると、みるみる内にギルの怪我は回復していった。

負傷していたギルとは違い、私は外傷らしい物は見当たらない。

そういえば、意識を失う前に何かが覆いかぶさった事を思い出す。

恐らくあれはギルが私を庇ったのだろう。

「ほら、早く腹ごしらえしろ」

そう言うとき、ギルが、袋を放り投げる。

中には……ハンバーガーとポテト、そしてドリンクが入っていた。

「体には悪いだろうが腹は膨れる。

空腹では戦は出来ないであろう。

全く怪我のせいでハンバーガーをかうだけに、手間がかかったぞ」

———まあ少し凄んだら大人しくなったがな。

そう物騒な事を呟くギルは置いておく。

それはそうだ。どっかの内戦地帯じゃあるまいし、いきなり店に頭から血を流して、包帯を巻いた男が入ってくれば、驚くのは至極当然だ。

まあ、ギルも馬鹿じゃない。

それ程目立つ事はしなかっただろう……たぶん。

「ありがとうございます。

頂くとします」

ギルの言う事は最もだ。

面倒な事に、人間は食料を摂取しなければ生命活動を行えない。

今後の展開次第では、丸一週間何も摂取不能になるかもしれない、

私は素直にハンバーガーを受け取った

「しかし、あの英霊は何者なのでしょう。

マスターの方はアーチャーと言っていたので弓兵のクラスなのは間違いないでしょうが

開放した宝具は偽・螺旋剣……
カアド・ボルグ

普通ならフェルグスが真名だと思いたいのですが、双剣を使いカアドボルグを矢として放つフェルグスなど伝承にはない…。

それに本当にフェルグスなら私のフラガラックが反応しないのは奇妙です」

幼い頃よりクー・フリーンに憧れていた私にとって、フェルグスは馴染みの深い英雄だ。

光の御子の親友にして彼が殺してしまった友……。

だからそんな英霊が中華風の双剣を使う筈がないと断言出来る。

「それはそうだ。

あれは正確には宝具であって宝具ではない。

単なる贋作だ」

「贋作……それなら説明が付きますが、宝具であって宝具ではないとは？」

私には、そうは思えませんでした……」

「お前達のような魔術師がそう感じるのも無理はない……か。あれは魔術師共もよく知る魔術によって生み出された物だ」

「魔術？…馬鹿を言わないで下さい。

何処に宝具を生み出すような魔術がある「投影魔術だ」……なッ！」

—————投影魔術、グラデーション・エア

その魔術は勿論知っている。

術者のイメージにより鏡像を物質化する高等魔術。

だが人間のイメージなんて不確かなものだ。おまけに魔力だけで造られた物は外界に触れると、短時間で消滅してしまう。

だからただ難しいだけで、使う物など殆どいない。

ましてやそれを戦闘に活用するなど論外だ。

「お前が驚くのも無理はない。

それに便宜上は投影魔術と言ったが、正確にはあの魔術は投影では

なく、もっと上位の魔術が劣化しただけに過ぎん。

まあそのお陰で、アーチャーの投影魔術は他の者が使うのと同じ、投影した物質は破壊されない限りは、半永久的に存在し続ける」

無茶苦茶だ……

規格外にも程があるが……無理矢理、英霊なのだから規格外で当然だと納得させる。

だが宝具ですら投影するサーヴァント……
どうやら思ったよりも厄介な敵のようだ。

「それで、もっと上位の魔術とは何ですか？
もしや私のフラガラックが反応しなかった事と関係が……」

「フラガラックが反応しないのは当然だ。

アーチャーの真の切り札は、あんなものじゃあない。

奴の真の宝具……それは『固有結界』だ」

「……………は？」

今度こそ絶句する。

投影の比じゃあない。

固有結界、リアリティ・マープル。

術者の心象世界で現実世界を塗りつぶす、魔術師にとって一つの到達点。

確かに、それ程の魔術が奥の手ならばフラガラックが反応しなかったのも頷ける。

「それより、だ。

食料を補給したならば早々にここを出るぞ」

「どうしてです？」

この洋館には、元々エーデルフェルトが造っただけあって、それなりの霊脈もあり、私自身の掛けた魔術により防衛性能も高いのです
が…」

「甘いぞ、バゼット。」

少なくとも言峰達は、この場所を特定しているだろうし、恐らくキヤスターの奴もこの存在を感じ取っているだろう。

国と国とが戦う大戦なら兎も角として、聖杯戦争は小規模なゲリラ戦に近い。

重要なのは防御力ではなく、誰にも見付からない場所に拠点を構えるという事だ」

言われてみれば最もかもしれない。

サーヴァントは規格外、特にあのアーチャーのカラドボルグなら、私の張った結界など容易く突破するだろう。

ここはギルの提案に従った方がいい。

「分かりました、ではどこに隠れましょう」

どうやら既にギルは目星を付けていたようだった。

私は大人しく、それに従い洋館を出た。

黄金の魂に導かれし靈魂

第4話

「えっ！昨日サーヴァントに遭遇したのか！」

素っ頓狂な声を出したのは、この家の主である衛宮士郎。
見習い魔術師であり、同時にセイバーのマスターである。
本来なら聖杯戦争に参加する程のレベルではない彼が、何故聖杯戦争に参加しているかについては、長くなるので省略する。

聖杯戦争の事情を全く知らずマスターとなった彼は、学校の同級生であり魔術師だった遠坂凛に、戦争の監督役のいる教会へと連れて行かれ、マスター登録をした。

その帰り道にバーサーカーを引き連れた少女、イリヤと戦闘になり結果的には見逃してもらったが、半死半生の重症を負ってしまう。
だが、それは士郎も他の者も知らない事だが、体内に埋め込まれたエクスカリバーの鞘『全て遠き理想郷』により回復して今に至る。

「そうよ、だけど妙な事にそのサーヴァント『受肉』していたわ」

「なんでさ？…受肉するには聖杯を手に入れないといけないんじゃないのか？」

「私だって分かんないわよ！

だからわざわざ衛宮君に聞きに来たんじゃない！

それで、そいつの事で何か知ってる事はある？」

知っていることと言われても、士郎は困る。

何といったって、そのサーヴァントの事を何も知らないのだ。

答えようがない。

「あ、あのさあ遠坂。

そいつの容姿とか特徴を覚えてくれないか？

流石に受肉してるってだけじゃ……」

「ああ、言い忘れてたわね。

髪は金髪、瞳の色は赤だったわ。

金ピカの鎧を着てたわね……」

「それは本当ですか、凜！」

凜がサーヴァントの容貌を言うと、何か驚いた様子のセイバーが口を挟んだ。

士郎も凜も少し面食らう。

戦闘中なら兎も角、平時にここまで焦った様子のセイバーは見た事がない。

「もしかして貴女、そいつに心当たりがあるの？」

「その前に確認したい事があります。

宜しければそのサーヴァントの口調や戦闘方法などを教えてください」

口調に戦闘方法……凜は思い出す。

前日の戦闘を……

「随分と偉そうな口調だったわね、ああいうの王様口調っていうのかしら。

私の事だって雑種呼ばわりしてたし……

戦闘方法は槍を使っていたわ。

それに纏っていた鎧はアーチャーの双剣を受けてもビクともしなかった。

おまけに最後には……」

そこまで言おうとして凜はある事を思い出す。

あの金色のサーヴァントは、最後の逃げる時に、通常では有り得ない数の宝具を、柱へ放ち爆発させた。

通常、サーヴァントの持つ宝具は一つか二つ、どんなに多くても三つだ。

あんな大量の宝具を所有しているサーヴァントなんて聞いた事がない。

「思い出したわ……あいつ最後には、軽く数えただけで八つぐらいの宝具を飛ばしていたわ……」

「やはり、そうでしたか……」

セイバーは確信したのでろう。

納得の言ったような口調で言った。

金色の髪、深紅の瞳。

そして偉そうな口調に大量の宝具。

全ての証言はセイバーに一つの解答を示す。

「間違いありません。

そのサーヴァントは前回の聖杯戦争に参加していたアーチャーです」

「な」

「ん」

「だ」

「「……ッ！」」

衛宮邸に大絶叫が響き渡る。

これがマンションだったら間違いなく、お隣さんから苦情が来ただろう。

一軒家でよかったなあ、と少しだけ士郎は現実逃避してしまった。

「それ、間違いないの、セイバー」

「はい、私は前回の聖杯戦争最後の一日に彼と戦いました」

「それで貴女はそいつを倒せたの？」

セイバーは俯いたまま答えない。

それはつまり……倒せなかったという意味表示に他ならなかった。

「つまり貴女はそいつに勝てなかった、いえ逆に負かされた。

その後そいつが、聖杯を手に入れた受肉したって事なら、一応は辻褄が通るわね」

納得した。

成る程それなら辻褄が合う。

セイバーが負かされたというのは、少し信じられないが、それだけ危険な相手という事だ。

「ですが、それでは可笑しいのです。
何故なら前回の聖杯戦争で彼は、聖杯を手に入れられる筈がないのですから」

しかしセイバーは遠坂の言ったことを否定した。
彼が聖杯を手に入れたのは有り得ないと…

「どういう事？」

貴女はその金ピカに負かされたんじゃないの？」

「違います。確かに私は、アーチャーと戦う前に、既に戦闘で消耗していた窮地に立たされていましたが、負けてはいなかった。
それに不愉快な事に、奴は私に対し求婚して来たので、早々に私を殺しに来ませんでしたし…」

再び場が静まる。

俺は耳を疑った。

求婚…：球根ではない。

いや球根は名詞だ動詞じゃない。

「求婚ってあの求婚か…：結婚してくださいってあれ？」

「はい、不本意ながら…：」

「へえ、ロマンチックじゃない。

敵である男との禁断の愛だなんて、それでセイバーは受けたの？」

「無論、断りました。

彼が並大抵の英雄ではない事は認めますが、彼の思想は私には合わない。

いえ、それ以前に私には聖杯を手に入れるという使命がある」

「そう、案外付き合ってみたら良い奴かもしれないわよ」

「おい遠坂、話がずれてるぞ。
聖杯の事じゃなかったのか？」

「つと、そうだったわね。
それでセイバー、そいつが聖杯を手に入れたという事は絶対にない、
ってどういうこと？」

俺がそう言くと、再び空気を引き締め遠坂が口を開いた。
そうそれが疑問なのだ。

セイバーの話では、そのサーヴァントに苦戦していたが負けてはい
なかったらしい。

ならその時点では双方とも聖杯を手に入れていないというのは当然
だが、セイバーの絶対に手に入れられないという自信が、妙に氣に
なる。

「実は、前回の聖杯戦争で聖杯が現れた際に、私は聖杯を破壊した
のです」

「ちょっと待ってくれ、セイバー。
聖杯って他のサーヴァント全てを倒さなくても出現するのか？」

「はい、少なくとも前回はそうでした。

聖杯を目にした私は、前回のマスターに令呪により『聖杯を破壊し
ろ』という命令を受けたのです。

思えば、あれほど令呪の存在を憎んだ事はありません。

流石の私も令呪には抗えず、結局……」

つまり理由は不明だが、聖杯を見た前回のセイバーのマスターは、
何故か令呪でセイバーに、聖杯の破壊を命じたらしい。

不明な点は多々あるが、確かにそれなら前回のアーチャーが残っているのは可笑しい。
それも受肉して……

「それで聖杯を破壊した後、貴女はどうなったの？」

「もし私に少しでも魔力が残っていたなら、まだ少しの間は現界していたかもしれませんが、聖杯を破壊するのに全ての魔力を使っていて、既に体内に魔力は残っていませんでした。

聖杯のバックアップを失った私は、宝具を使って直ぐに消えたので、その後の事は不明です。

ですが聖杯は跡形もなく破壊した、それは間違いありません」

再び遠坂は考え込む。

もしも聖杯の破壊が完全ではなかったのなら、という推測は脆くも崩れ去る。

分かっている事は、セイバーの相手していたサーヴァントは、方法は不明だが受肉し、その後10年間を現界し続けていた事ぐらい。

「でも妙じゃないか。

つまり理由は分からないけど、そいつは受肉したんだろう。

なら何で今回もわざわざ命を賭けてまで、聖杯戦争に参加するんだ」

「さあ、そこまでは……」

「案外、セイバーの為じゃない。

聖杯を使つて、セイバーを受肉させて自分の妻にするとか？」

セイバーは少し渋い顔をしたが、案外有り得るかもしれない。
実際、そのサーヴァントがセイバーに求婚したのは事実な訳だし、

聖杯を使えば英霊の受肉も可能だ。

問題はやはり、そのサーヴァントが受肉した方法なのだが、流石にそこまでは分らない。

「まだ重要な事を聞いていないわ。

セイバー、そいつの真名はなに？」

「それが――――分らないのです。

私には彼の真名が全く検討が付かなかった」

「そんな筈はないでしょう。

貴女を追い詰めるのに、丸腰って事はないだろうし、真名が分からなくても使ってる宝具から、ある程度の出身くらいは分かる筈よ」

「では逆に聞きますが、リンは彼の宝具に心当たりがありましたか？」

「ええ勿論よ……ちょっと待って！」

何かに気付いたのか、遠坂は慌てて記憶を穿り返して、ぶつぶつと言いつ出す。

失礼かもしれないけど、その様子は少し不気味だ。

「あれはたぶん北欧の剣だし……中華風の戟も……日本刀みたいなものもあったわね……

ああもうッ！どうということ！？」

「分かりましたか。

彼の使う宝具には、何の共通点もない。

敢えて共通点を挙げるなら宝具だという事だけです」

「ちょっと待ってくれ。
宝具って一人のサーヴァントに一つじゃないのか？」

「通常ならそうです。
ですがアーチャーは違う。

まるで宝具を湯水の如く持ち、それを豪雨のように使い殲滅する。
それが彼の戦術です」

驚いて何も言えない。

湯水の如く宝具を持ち、それを雨のように降らすサーヴァント。
そんなの……反則じゃないか。

「そこでだけど衛宮君。
私と組まない？」

「へっ？」

呆然とする。

何とあったって、前回バーサーカーとの戦いの後に、同盟を持ち掛けられたが、余りに多くの事がありすぎて、断ったばかりなのだ。

「あの規格外のバーサーカー^{ヘラクレス}だけじゃない。

そんな宝具を大量に持つてるサーヴァントだなんて、かなり不味いわ。

学校には性質の悪い結界も張られているし、ここは手を組んだ方が得策だと思うのだけど？」

特に断る理由もない。

何とあったって自分は、魔術師としてもマスターとしても未熟なの

だ。

遠坂の助けがあれば心強いし、何よりも俺自身が遠坂と戦いたくはない。

「ああ俺には依存はないぞ。

セイバーはどうだ？」

「私も賛成です。

リンは信用に値する人間だ」

良かった、セイバーを賛成してくれたなら問題ない。
だが次の瞬間、遠坂はとんでもない事を言い放った。

「それじゃあ、今日から私も此処に住むから、荷物を運ぶの手伝ってね」

「なんでさ！」

「当然じゃない。

同盟を組む以上、別々の場所で暮らすのは、情報交換や共闘にも不便よ。

なら一緒に住んだ方が効率的でしょ」

「それはそうだけど……

女の子と一つ屋根の下っていうのは……

その、色々と問題があるだろ！」

「士郎、もしかして照れてるの？」

遠坂が、悪魔のような笑顔で言ってくる。

そりゃあ俺だって男だ！

おまけに遠坂には、密かに憧れていたわけで……
色々と心臓に悪い。

「つてあれ？———今士郎って…」

「そうよ、同盟を組んだんだもの。

私はね、対等な相手には名前で呼ぶ事にしてるのよ」

頭が痛くなってきた。

思えば聖杯戦争が起きてからは、驚愕の連発だ。

セイバーと一緒に暮らすっていう時点でもそうだし、今度は袁坂……
一週間前には考えもしていない事だよ。

そこまで考えたことで藤ねえにどうやって言い訳しようかと思い。
また余計に頭が痛くなってきた……

TURN 4 (後書き)

という訳で今回は、殆ど士郎のターン。
ギルガメッシュとバゼットの新しい拠点については次回。

TURN 5

「ここが新たな拠点……ですか？」

「そうだ」

「……………」

今の私はどんな顔をしているだろう？

鏡を持っていないので確認出来ないが、たぶん酷い顔をしているに違いない。

少し頭が痛くなってきたが、なんとか持ち直す。

私には、この事をギルに言わなければならない。

「一つ訊ねます。

貴方は拠点と言いますが、どこで一軒家なんて用意したんです。

それに門の横に『松田』と書いてありますが？」

「用意だと？」

これからお前が家主である『松田』に暗示を掛けるのに決まっているであろう」

とんでもない事をさらっと言う男だ……

「ギルは知らないかもしれませんが、魔術師は魔術を研究の為だけに用いるのであって、一般人に使うものではないのですよ。

そもそも魔術は万能のように思われますが、魔術という異端によって、常識から外れた事象は、多少なりとも世界に矛盾を与える事になります」

「そんな事は言われずとも知っている。

だがどうせ聖杯戦争などと言ってお祭り騒ぎしているのだ。
暗示の一つや二つ問題じゃあない」

「それはそうですが……」

「それに、だ。

まさか言峰やその他のサーヴァント達も、まさか何の変哲もない一般家庭にマスターが潜伏しているとは考えんだろうし、ついでに此処の家主である『松田』は警察官。

もしかすれば面白い情報が入ってくる可能性もあるぞ」

人としてはどうかと思う案だったが、自分の中にある冷酷な魔術師としての面が、ギルの提案が合理的であり有効な策であると囁いている。

封印指定の執行者といえど外来の魔術師であるのには変わらない。
外来である分、冬木市に元々根付いている魔術師。

遠坂、マキリ、アインツベルンには地の利と工房において負ける。
アインツベルンなどは本国から城まで持ってきたというのだから笑えない。

正に城壁という訳だ。

やり方は魔術師離れしているが、それは戦闘を主とする自分にとっては、大した問題じゃあない。

前回の聖杯戦争においても魔術師として将来を、渴望されたロード・エルメロイも、この地で婚約者と共に命を落としているし、第三次においてはエーデルフェルトが同じように敗北している。

聖杯戦争は決して魔術師同士が行うような決闘ではない。

魔術師の決闘とは、謂わば己の秘術を使い戦う、言ってしまうえば騎士同士の戦いと似ている。

しかし聖杯戦争の主役は魔術師ではなくサーヴァント。

サーヴァントにも魔術師はいるが、殆どは戦場を駆け抜けてきた歴史の戦士。

戦士が主役である以上、魔術師同士の決闘のような伝統と格式あるものに、なる筈がない。

そして私は記憶している。

第四次聖杯戦争の勝者、その名を。

『衛宮切嗣』

既に忘れ去られて久しいが、10年前には、協会でも色々と騒がれていた有名人だ。

彼に付けられた渾名は『魔術師殺し』

その名に違わず、彼はあらゆる手段を使って魔術師を抹殺してきた。

狙撃、毒殺、人質を使った自殺の強要、裏切り、公衆の面前での爆破、建物ごとの破壊、航空機の墜落、挙げればキリがないほどだ。その彼が聖杯戦争に参加し、やはり勝者となったのは、魔術師という枠組みに囚われない柔軟な思考が、大きく作用したのかもしれない。

「納得したか？
では入るぞ」

「あっ！待ちなさい！」

ギルは鍵の掛かったドアを無理矢理、開くと中に入っていく。

「長くなてならないわよ。」

今日から私は衛宮君の家に、下宿する事になったのよ。
家主である衛宮君も了承しているし問題ないわ」

先輩が了承した？

信じたくない、それは……また私の…

「先輩、本当なんですか？」

「ああ本当だ。色々あって今日から、遠坂は家に泊まる事になったんだよ。」

昨日のうちに連絡しておけばよかったんだけど、悪かったよ、桜。ちよつと昨日は忙しくて」

知っている。

先輩は私の事を知らないけれど、私は先輩の秘密を知っている。

そう先輩は唯の人間じゃない。

魔術師と、そう呼ばれる存在だ。

そして遠坂先輩も。

御三家の頭首である遠坂先輩は勿論、先輩もこの冬木市で開かれて
いる戦い、聖杯戦争の参加者だ。

その二人が一緒の家に住む。

たぶん同盟か何かをしたのだろう、私にもそれ位は分かる。

「そう、ですか————」。

先輩も了承………」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

可笑しい、私は痛いのは慣れているのに。
どうしてこんなにも「痛い」のだろう。

「それで、分かるでしょ、間桐さん？」

「何が、ですか————」

分かりたくない、認めたくない。

痛い

何で遠坂先輩は

痛い

私の居場所を

痛い

奪おうとするんだろう？

痛い

「貴女はこの家に、よく来てるみたいだけど、当分はいらないって
事よ。」

来ても迷惑だし、貴女も困るでしょ」

嫌だ、絶対に嫌だ。

ここに来れない、なら。

私はずっと冷たい蟲倉で、一人で

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

ずっと一人で————

「嫌です」

私が口に出したのは、自分でも驚くほど冷たい拒絶だった。本当に、この声色を自分で出したのか？

「嫌ってどういうこと？」

「嫌です、と言ったんです。

私には遠坂先輩の言っていることが理解出来ません」

そうだ、ここで何もしなければ奪われる。

ずるい、遠坂先輩だけ何でも持っているのは、ずるい。

「それじゃあ、先輩。

お台所かりますね」

「ちょっとあんた————」

遠坂先輩を無視する。

少し失礼かもしれないけど、私にも譲れないもの、いや違う。この場所を失ってしまえば、私は私を維持できない。

たぶんコワレテシマウ。

「それじゃあ、先輩。

朝ごはんは何がいいですか？」

うん、良かった。

たぶん、今度は明るい表情を出来たと思う。

????????????????

「柳洞寺、だと————」

思わずギルガメッシュは聞き返してしまう。

バゼットの言っている事が信じられないのか、信じたくないのか、またはその両方か。

「そうです。柳洞寺にいるキャスターは街中の人間から魔力を集めています。

死亡という事態にこそ至っていませんが、死者がでるのも時間の問題でしょう。

なにせキャスターは裏切りの魔女メディアのようすし」

「……………断る。

それに、だ。死者の出る方なら学校にある結界はどうする？

キャスターとは違い、あっちは発動すれば確実に死者の出る代物だぞ」

「そちらの結界は確かに危険ですが、貴方自身も言っていたでしょう？

遠坂家の頭首が調査中だと。

仮に、そんな場所に私が行けば、最悪出会った瞬間に戦闘になります。

前に見た時の様子から、好戦的な魔術師のようでしたし。

なら学校の方は一先ず置いておいて、先に柳洞寺の魔女をどうにかするのが得策です」

そうバゼットは言い終えた。

ギルガメッシュとしては、このまま力の回復に努めたいところだが、バゼットの言う事にも一理ある。

（柳洞寺にいる二人のサーヴァント。

アサシンは問題ない。

奴の『燕返し』は凄まじい剣技、それは認めよう。

だが、逆に言えば奴にはそれだけしかない。

筋力も確かCかDだったし、俺の黄金の鎧の防御を、突破するなんて事は、コーラを飲んでゲップをしないって事ぐらい不可能！

必然的に奴もアーチャーと同じように、首を狙ってくるだろうが、そこは簡単。

幸い盾は二つほどある、こいつで首を全て隠し突撃すればいい。

アサシンの剣ではサーヴァントの肉体は切れても、鎧や盾は切れん。何といったって『燕返し』は多重次元屈折現象を引き起こし、三つの剣筋を全くの同時に叩き込む大技ではある、がしかしだ。

逆に言えば、ただ剣が三つに増えるだけで、剣の威力自体が跳ね上がるわけじゃあない。

つまり！体全体を防御し、そのまま突貫すれば、門は突破出来るッ！突破してしまえば、こちらのもの……。

アサシンは山門を離れられないから、その時点で戦線離脱！残りはキャスター！

バゼットと俺の二人なら……勝機は十分、か？

それに、ずっとキャスターを放置しておけば最悪、セイバー、アーチャー、キャスターVS俺とバゼットなんていう事も有り得るッ！ああいう奸智に長けた女は、さっさと殺しておくに限るかもしれん）

「いいだろう、バゼット。

それで、いつ向かう？」

「今日の夜からです」

「……………」

バゼットは気合満々といった様子でシャドーボクシングをしている。よくダメット呼ばわりされていたが、確かに戦士としてじゃなく、女としては駄目だと、ギルガメッシュは心の中で思っておいた。

????????????????

深夜の山門には、紅の華が咲いていた。

いや、その例えは間違い、正確には咲いているのではなく、咲き誇っているだ。

門の前に立つ男は、口元から血を流し、手に持つ長刀を、石段へと零す。

その刀は、もう二度と主の絶技を奏でる事はない。

既にその刀、いやその持ち主も、役目を終えようとしているのだから。

「——————カッ」

雅やかな陣羽織に身を包んだ侍が、再び血を吐き出す。薄紫の着物は、既に血で汚れていたが、その男の美しさもあって、まるでそれ自体が一種の装飾のようにも、感じさせる。

「よもや、化生の者であつたか……」

奇怪な場所へ呼び出されたと思つたが、最期はまた奇怪であつた――」

彼の、佐々木小次郎の内臓中身は既に別物となっている。

まるで胎児が生れ落ちようとするように、小次郎の腸を食い破ろうとしていた。

「これこれ、男の腹から生まれる赤子など、また奇怪ではあるが……」

小次郎は、動けない筈の体を動かす。

そして拾われない筈の長刀を拾う。

「奇妙な縁ゆかりだが、折角だ。

折角この現世へと呼び戻されたのだ、せめてこの最期の一夜、舞わせてもらおう、か――」

壮絶だ。陣羽織を血の紋様で飾り、顔には血の紅をさす。

夥しい紅の華は、全て小次郎のもの――」。

彼はまるで演舞でもしているかのように舞い。

そして三つの剣が同時に、近くにあつた木を切断した。

現れた老人の首を、切断しようとした所で、

小次郎は終わった。

実に……実に奇怪だつた。

侍の腸を食い破り、突き出される腕。

いや、腕と表すには、長すぎる。余りにも長い腕が、夜の月に向かって飛び出す。

「よかろう、好きにするがいい。

この体、お前にくれてやろう。まあこんな物から生まれる者だ。どうせ碌な性根ではあるまいが……」

そう言って壮絶に笑う。

壮絶と言うなら、全てが壮絶だった。

自決すら許されず、辺りに血の華を咲かせてなお、壮絶に笑う姿。佐々木小次郎と呼ばれた男の最期の演舞。

やがて暗殺者のサーヴァントは消え、変わりに黒い影が現界する。全体的な黒に、面を白い髑髏で覆ったその存在は、佐々木小次郎という偽りの暗殺者の血肉によって生まれた、真の暗殺者のサーヴァント。

「キキ、キキキキキキ、キキキキ」

声にならない呻き声。

余りにも特殊な召喚方法によって呼び出された、暗殺者は喋る事ができない。

そこで漸く

———自分を呼び出した主人を見つけた。

「カッカッカッ、紛い物のサーヴァントにしては、よく持ち応えたと見るが、さてアサシンよ。

これより先ずはキャスターのマスターを……」

言おうとして気付いた。

蟲が、この柳洞寺に何物かが接近していると告げる。

「不味いの、あの執行者か……」

ワシは勿論、アサシンでは正面からあの男ギルガメッシュには勝てん。

些か残念だが、ここは一時退いて状況を伺うことにするかの」

幸い二人は自分の存在には、気付いていない。

ステータスで見た所ではアサシンの俊敏はA。

十分に逃げられるだろう。

間桐臓硯はアサシンに背負われると、一先ず姿を晦ました。

TURN 5 (後書き)

少し桜がヤンデレ過ぎたかも……

ちなみにこの話の序盤は、F a t e ルートやらU B W ルートやらH
F ルートやらをごちゃ混ぜにしておいて、だんだんとオリジナル
ルートに入っていくような感じですよ。

次回はキャスターVSギルガメッシュですね……
では次回に会いましょう。

TURN 6

無音の夜。

昼ならば燦燦と太陽が照らすであろう庭も、今では暗い闇の中で、ひっそりと存在する。

夜空に浮かぶ月は、まるでこの街で起きる異変を知っているかの如く妖しい光を放っていた。

「————風が出ているな」

そんな真夜中に、一人の少女がいる

この闇夜においても、その美しさは微塵も衰えることはない。

見た目は15才ほどだが、少女の持つ凜とした雰囲気、彼女を可憐ではなく凛々しい風に見せていた。

「シロウ、貴方は甘い。

平時であればそれは長所だが、戦場において、その優しさは短所だ」

ガチャっ、という音と共に、身を覆う鎧甲冑。

既に少女は少女ではなかった。

見る者がいたなら、こう答えるだろう。

——騎士と。

成る程、彼女は正に、絵本から出てきたような騎士だった。

「————マスターが戦わないのなら構わない。

変わりに私が戦おう」

彼女こそ聖杯戦争において最優と称えられし剣の英霊。

セイバーの名を冠する彼女は、神業の如き剣技と騎乗能力を持つ。

目指すのは柳洞寺。

彼の地にて街から魔力を吸う魔術師を討伐するため。

マスターの命に背くことにはなるが、セイバーはマスターを裏切ったとは思っていない。

彼女は彼女なりに考え、マスターを勝利に導くように動いているのだ。

些か短絡的に思える決断だが、致し方ないかもしれない。

何故ならば柳洞寺にいるサーヴァントはキャスター。

最高の対魔力を誇るセイバーには、どれほどの魔術であろうと通用しない。

「――――行くか」

何時までも此処にいれば、マスターに発見される可能性もある。

セイバーは塀を飛び越えると、夜の闇に薄れていった。

黄金の魂に導かれし靈魂

第6話

静かだった。

夜の寺というのは、少し不気味な雰囲気を持っている。

肝だめしにはベストな立地条件かもしれない。

尤も、今この地を訪れた二人は、肝だめし何かよりも、よっぽど物騒な事を始めようとしているが。

二人は石段を歩いていくと、やがて山門の前に辿り着いた。
黄金の鎧を身に纏った男が、まるでいる筈の存在を探すように、キョロキョロと見渡す。

「妙だな、アサシンがいない」

「アサシン？————ああキャスターの召喚したというルール違反のサーヴァントですか。

確かに居ないようですが、別の場所に移動したのでは？」

「それはない。ルール違反によって召喚されたアサシンは、この山門を寄り代に現界している。

簡単に言えば、アサシンは山門から動けない筈なのだ」

アサシンは気配遮断スキルを持っているが、本当の暗殺者ではない佐々木小次郎のスキルは、それほど高くはない。探知用の宝具も使っているし、どうやら本当に居ないようだ。

「……………なら、もしかしたら既にアサシンは敗退したのでは？」

「…そうかもしれん。

だが居ないならそれで構わん」

当初はアサシンが門を守っていると思い、色々と対策を練ってきたギルガメッシュは、少し拍子抜けする

Fateルートでは知らない間に、敗退していてアサシンだ。

今回も同じようなものだと思ってしまったのが、彼にとってのミス。

だが無理はない。

例えばギルガメッシュが、天下の大軍師だとしても、サーヴァントを触媒にサーヴァントを召喚するなんて離れ業をしたと、誰が考え付くだろうか。

バゼットとギルガメッシュが、何の妨害もなく山門を抜ける。
呆気ない。

あれほど警戒していたアサシンもキャスターの結界も、全くない。
驚くべきほどの程の無用心さだ。

しかし、こういう状況でこそ最大限の注意を払う必要がある事を、
二人は知っていた。

—————結果的にその警戒が、上空から放たれた魔弾に気
付かせる。

ドゴンツ、という音とともに、地面を抉る魔力。

空を見上げれば、不機嫌な様子を隠そうともしない魔女が一人。

「貴方達？」

アサシンを消したのは……」

「どうしたキャスター。」

自分の飼い犬が殺されて怒ったか？」

キャスターの問いに対し、皮肉を交えて返答する。

だがキャスターの言い方からして、アサシンがやはり他のサーヴァ
ントにより殺されたのだと確信する。

（マスターはサーヴァントと視界を共有する事が出来る。

そのキャスターがアサシンの消滅を認知していないという事は、何
らかの手段によって視覚共有を、妨害されたか、抵抗する間もなく
一瞬で殺されたかの、どちらかだ）

ギルガメツシュはそう考えたが、真実はどちらでもない。

間桐臓硯によって、真のアサシンを呼ぶため触媒とされた小次郎は、既に異変に気付いた時には、佐々木小次郎は別の物へと変異していたのである。

結果的にそれが、キャスターの視覚共有を防ぎ、事態の把握を遅らせる結果となってしまう。

「まあ構いません、どうせ口先アサシンばかりの男など用済みでしたしねえ。貴方の正体に少しは興味があるけれど………」

キャスターはギルガメツシュを見る。

全身から溢れるオーラ、決して人の下に付く様な男ではない。

「—————死になさい、 $\Phi\lambda?$ 火炎 $\gamma\alpha$ 」

たった一言。

それだけで発動する大魔術。

これこそキャスターの保有スキルである、高速神言。

どれほどの魔術であろうとキャスターは、たったの一言で詠唱を完了する。

言葉の意味通り、襲い掛かる業火。

対象を焼き尽くす為に放たれたそれは、唯の人間が受けければ骨しか残らないであろう一撃。

「チッ！」

ギルガメツシュは焦らず宝物庫から武器を取り出す。

最高レベルの魔除けの指輪や、魔術を反射する盾などがあれば、事

は簡単なのだが、生憎彼には、それ等の宝具は未だ使用不能。

ならば今ある物で戦うだけ。

幸いにして、最高に相性が好いというわけではないが、魔術師に有効な宝具はある。

取り出したのは深紅の槍。

これこそ魔力を喰らう槍、その原典。

派製品として有名なものとしては、破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルクがある。

槍を振るい炎を打ち消す。

流石に全ての炎を消すのは、物理的にも無理があるが、自分とバゼットが避けされる最小限度にまで、炎を消すだけでいいのならば、それほど難しい事じゃない。

「————その槍は間違いなく宝具。

可笑しいわね、ランサーのサーヴァントは既に知っている。

なら貴方は、一体何のサーヴァントなのかしらねえ」

「これを言うのは二度目だが、どこに自分の情報を敵に晒す愚昧がいる」

二人の間に、緊張が走る。

キャスターは空を飛んでいるのに対して、ギルガメッシュは地面だ。もし英雄王本来の戦い方が可能ならば、特に意味はないが、生憎と宝具を大量発射出来るほど、彼に余裕はない。

「——————ギル、危ないッ！」

沈黙を破ったのは、バゼットの声だった。

ギルガメッシュが何がだ、と訊ねようとした瞬間に、彼の眉間を狙

う鎖付きの短剣。

かなりのスピードで迫るそれを、バゼットは殴り落とした。

「…………驚きましたね。

私の奇襲を察知…………いえ素手で私の攻撃を弾く魔術師がいるとは…………
貴方、本当に人間ですか？」

「失礼な！

私は立派な人間です！」

（…立派な人間なら、少しは御淑やかになれ…）

「何か言いましたか、ギル？」

「いや、気のせいだろう」

バゼットは、読心術にまで目覚めたのか、と少しだけ冷や汗を流しながら答える。

兎に角だ。

この突然のライダー襲撃、その理由の可能性は三つある。

？セクシーなライダーは、キャスターとギルの両方を倒しに来た

？仲間になりに来た

？キャスターと共闘、現実是非常である

（我が選びたいのは、文句なしに？だが、我を最初に攻撃してきた

時点ではない。

なら？なのがベターだが、最悪の場合は……」

「キャスター、私はマスター命令で一時共闘するゆおに言い付かっています。

私はマスターを殺るので、貴女はその金ピカをお願いしますか？」

（最悪だ……答えは？だったか……）

「目的が分からないわね。

私に協力して貴女にメリットがあるのかしら？」

「それは私の知る事ではありません。

私はただマスターの命令に従うだけです」

「そう、いいわ。今だけは貴女と共闘する事にしましょう。

それに、丁度これで男と女の戦いになった事ですし」

ピクンッ、バゼットの肩が震える。

ワナワナと腕を痙攣させていた。

顔は……きつと怒っている……

「キャスター、一つ尋ねたい事があります」

「なにかしら？」

「男と女の戦い、と貴女は言いましたが如何いことですか？」

「如何いということもないでしょう。」

私とライダーは女。貴方とその金ピカは男。
何か問題があつて？」

キャスターに悪気はない。

だがギルガメッシュは理解してしまう。

バゼットの怒りの原因を……

「私は……私は女だー……ッ！」

「は!?!?…女って…嘘でしょう？」

「嘘じゃありません！」

私は足の爪先から頭の天辺まで完全無欠な女です！」

「嘘おっしゃい！」

貴方のような怪力馬鹿が女である筈がないでしょう」

「……バゼット、そんな事は如何でもいいから…」

「如何でも良くはありませんッ！」

少しはギルも言い返したらどうなんです！」

貴方のマスターが侮辱されたんですよ！」

ヒートアップする二人。

バゼットは自分が女だと叫び、キャスターは頑としてそれを認めない。

流石にイライラしてきたギルガメッシュは、宝物庫から適当な物を選び、キャスターへ投げつけた。

「ッ!—————淑女と野獣の話し合いに割り込んでくるなん

て、貴方には礼儀というものが欠けているようね」

「痴れ者がッ！

魔女に払うべき礼儀などない」

「私の事を『魔女』と、そう呼びましたね。
いいでしょう、貴方は苦しませて殺すわ」

「面白い————！」

それとバゼット、お前はライダーだ」

有無を言わずに決定する。
こういう時、話を終わらせるには、相手に何も言わせないのが肝心だ。

「——————^{抹殺}Eε? λ ε ι ψ η!」

再び一言で放たれる大魔術。

それは魔術でありながら、剣術における居合いに似ている。

街全体から魔力を集めた事による恩恵だろう。

現代の魔術師が見れば、余りの嫉妬心で憎悪すら抱きかねない程の魔術。

その威力はどれもAランク。
だが焦らない。

如何にAランク魔術といえど、深紅の魔槍の前では、食われるべき餌。

その頃、バゼットとライダーの戦いも白熱していた。

「私の攻撃を防いだ時もそうですが……
驚きました。貴方、いえ貴女は本当に魔術師ですか？」

「無論です。同時に赤枝の騎士の末裔でもあるッ！」

ライダーの鎖付き短剣を払い、そのまま踏み込む。

だが、如何にバゼットが最強の執行者で、ライダーがこのような平地での戦いが得意ではないとしても、やはりサーヴァントの身体能力には及ばない。

「無駄です！ そんな単調な攻撃が！」

確かに純粹なる肉体のスペックではバゼットは劣っている。

だが二人の間で決定的に違う物が一つあった。

それは実戦経験の違い。

単純なる経験だけなら、二人の姉を狙ってきた襲撃者を、何人も打ち滅ぼしてきたライダーの方が上だろう。

だが、ライダーの経験というのは、相手の背後や真上から忍び寄り、敵を抹殺するといった、どちらかというと暗殺者としての経験。

対するバゼットは違う。

暗殺の経験も少しはあるが、彼女は真っ向からの戦闘の方が、圧倒的に多かった。

首を切断しようとも襲い掛かってくる死徒、吸血鬼大量の使い魔を用いる魔術師、彼女が戦ってきた相手は、それぞれ多種多様な戦術、能力で襲ってきたのだ。

それに対応する為に、バゼットの業は確実に洗練されてきた。

「遅いですよ」

「なっ！私の鎖を——！」

そう今度は、ライダーの短剣を払ったのではない。
鎖を掴み、そして……

「これで逃がしません！
喰らいなさい！」

まるで瞬間移動したかのような踏み込み。
僅かな時間でバゼットが、ライダーに近付く。

だがライダーとてサーヴァント。
騎乗兵である彼女は三騎士ほど接近戦に優れているわけじゃないが、
それでもそれなりに接近戦もできる
バゼットの腕を払い、蹴りの一撃。

——————失敗。

既にバゼットは避けていた。

「やりますね」

「貴女こそ——！」

二人の戦いは、まだ決着が付く事はなさそうだった。

「その槍、魔力を喰らうようですけど、これなら如何かしら？」

———
Bρ?χo?!
———
岩石

「これはッ！」

恐らくは空間転移の応用。

キャスターの側に現れた岩石達が、ギルガメッシュへと向かっていった。

岩石はキャスターの魔術によって強化されており、通常よりも硬くて威力もある。

確かに、これは魔術によって成された現象だが、攻撃自体は魔術じゃない。

槍で無力化は不可能。

「戯けが！…この程度オ！」

再び宝物庫から一本の剣を取り出す。

込められた魔力からして、それは間違いなく宝具。

それを投げて、壊れた幻想で爆破。

魔力で強化された程度の岩石は、容易く粉々になり、土煙があがった。

同時に、王の財室内にある、とある品を引っ張り出す。

土煙のせいで、キャスターからはギルガメッシュが、何をしているかは分からないだろう。

「……まさか宝具を爆破させて防ぐなんてね。

けど、そんな離れ業、一体全体どこまで続くか———ッ！」

寸前で避けると、目の前にはギルガメッシュの姿。
乗っているのは————絨毯？

「油断大敵だぞ、キャスター！」

ギルガメッシュの背後から飛ぶ四つの魔弾。
同じ魔弾でもキャスターのそれと違う点は唯一つ。
彼の魔弾は全て宝具。
威力も密度も桁違いだ。

「ううう！」

寸前で避けるが————間に合わない。
一振りの剣が、キャスターの足に刺さる。
だが足で疾走する他サーヴァントとは違い、キャスターは飛行中。
それほどの痛手ではない。

しかしキャスターもギリシャ神話にその名を轟かす魔女。
唯でやられる女ではない。

足に剣が突き刺さると同時に、ギルガメッシュを、空気圧で吹っ飛ばしていた。

絨毯から落ちたギルガメッシュはそのまま地面に、叩きつけられる。

「貴様————ッ！」

直ぐに絨毯を呼び戻し、キャスターに迫ろうとする。

「アーチャーッ！」

「なにッ!？」

声が響く。

その名で、ギルガメッシュをアーチャーと呼ぶ者は限られている。
キャスターとギルガメッシュの間に舞い降りた剣の騎士。

翠色の瞳、滑らかな黄金の髪。

身にまとう甲冑は、騎士に更なる威厳を与えている。

「————何故、貴方が此度も現界している」

凜とした声。

それは色あせる事無く、記憶の中にあった・

「セイ、バー」

突如として舞い降りた騎士、セイバーは黄金の王へ剣を向ける。
月光に照らされたセイバーは、この世の何物よりも美しい。
彼はそう思った。

TURN 6 (後書き)

漸くセイバーと接触というか急襲。

少しダメットさんが強すぎる気もしなくもないですが、まあ平地で、しかも慎二がマスターのせいで弱体化しているライダーなら、たぶんあれぐらいは戦えるでしょう。

では次回に会いましょう。

TURN 7

暗闇の中、異変に気付く。

些細な事だった。

今日もうっかり土蔵で寝ていた事に気付く、自分の部屋に戻ろうとして、この家から消えてしまった者に気付く。

「セイバー、……まさかッ！」

心当たりはあった。

今日の昼に話していた内容。

あの時のセイバーの様子からして、キャスターは後回しにするという自分の決定に、不満を持っていたようだった。

急いでセイバーの休んでいる筈の部屋に行き————自分の予想が正しかった事を識る。
布団に人影はない、庭には居なかったという事は、つまりセイバーはこの家には居ないであろう事を悟る

「糞ッ！————まだ怪我が治りきってないんだぞ！」

慌てる自分を押し殺し、急いで襖を開けた。

————それが不味かったのか、どうやら家に住む、もう一人の少女を起こしてしまったようだ。

「どうしたの、士郎。

こんな夜遅くに、そんなに慌てて——まさか敵襲？」

「いやそんな事より、何で遠坂が起きてるんだ？」

もう夜中じゃないか」

「あんなにドタバタ騒がしい音がすれば、誰だって起きるわよ。それで如何したの？」

まさかゴキブリが出た程度じゃないでしょうね」

いや、女の子がゴキブリをその程度扱いは如何なものかと……
っと、そんな場合じゃない。

「セイバーがいないんだ！

もしかしたら柳洞寺に行ったのかもしれない！」

事態の深刻さを悟ったのだろう。

先程までの少しダルそうな様子が消え、如何にも魔術師といった顔になる。

こういう瞬時な切り替えが出来る事も、遠坂が一流の魔術師である
所以かもしれない。

「成る程ね……。

やる気の無いサーヴァントも問題だけど、やる気が有り過ぎても問題だったという事か……。

アーチャー、いる？」

「なんだね、マスター」

何時からそこに居たのか……

遠坂の隣に、赤い弓兵が現れた。

「貴方は先に柳洞寺に行つて。

私達も後から追うわ」

「どういう事だよ！
こいつが先に行くって！」

「分らないの！」

アーチャーと私達じゃ移動速度に差があるわ。
もし私達のペースに合わせてたら、手遅れになってるかもしれない
じゃない！」

「手遅れって……」

「あのね、衛宮君。

キャスターは魔術師。

魔術師じゃセイバーには適わないわ」

「なら———！」

「だけどね、勝てないなら勝てる物を作り出す。
それが魔術師の戦い方よ。

確かに化け物染みた対魔力を持つセイバーなら、キャスター相手に
有利に戦えると思うけど、それでも油断は禁物」

「……………」

言い返せない。

遠坂の言う事は完全なる正論だ。

だけど気に喰わない、よりにもよってこいつが———

アーチャーを見る。

その鉄のような無表情からは、何を考えているかを全く悟らせない。

ただ、どこことなく不満そうに見える。

「リン、悪いが私はその提案に、反対票を投じさせて貰おう」

「アー、チャー？」

「おい、反対ってどういう事だ、アーチャー…」

意図せず低い声が出る。

仕方ない。漸く納得仕掛けてきたのに、こいつは何で否定するのだ。

「言葉通りの意味だ。

別に我々にとってセイバーが消えようと消えまいがデメリットはない。

寧ろ私にとっては、足手まといが消えてくれる分動きやすくなる」

「なんだと————」

拳に力が籠っているのが分かる。

今直ぐこいつの顔面を殴り飛ばしたい衝動を、ギリギリの所で抑えた。

思えば最初から気に喰わなかった。

こいつの存在が————

そして、よりにもよってこいつが、セイバーを見捨てるような発言をした事が、一番許せない。

「バーサーカーとあの黄金のサーヴァントに対抗する為の同盟、だ
がはっきり言おう。

足手まといだ。

セイバーの能力が高いのは認めよう。

だがその小僧がマスターでは、セイバーも全力を出し切れまい」

「なんだよ――」

それじゃあ俺がマスターのせいで、セイバーは弱いとも言うのか」

「当然だろう。」

まさか、お前は自分が一人前のマスターだとも思っていたのか？
それは思い上がりだ。

お前にセイバーは守れないし、セイバーを助けることも出来ない。
全てが中途半端の貴様には、なにも成し得ない」

もう我慢の限界だった。

既に腕からは血が流れている。

力強く握り締めていたせいだろう。

誰かに否定されるのは、まだいい。

だけど、こいつに否定されるのだけは、絶対に許せない。

思いつきり拳に力を込める。

そのまま目の前の男に――――！！

「止めなさいッ！」

殴りかかれなかった。

振るい挙げた腕は、空しく空中で停止する。

「アーチャー、アンタがどう思おうと勝手だけど、私と衛宮君は同盟を結んでいるの。」

これは命令よ。今直ぐセイバーを助けに行きなさい」

有無を言わさぬ口調で遠坂が言った。

アーチャーは少しだけ溜息を付く。

「——————了解した。

君がそこまで言うなら私には拒否権はない。

精々、期待に答えるでしょう」

最後に皮肉気に笑うと、

アーチャーは飛び立っていった。

黄金の魂に導かれし靈魂
第7話

「セイ、バー」

元の人格にもギルガメッシュの記憶にも、その騎士の姿は鮮明に刻まれていた。

見間違えるはずが無い、セイバーは十年前と何一つ変わることなく自分の前に姿を現した。

呆然と、その騎士を眺める。

普通なら最優のサーヴァントであるセイバーに、剣を向けられるという絶体絶命の危機である筈なのに、何故か心は花園にいるかのよ

うに安らいでいる。

困った、これでは危機感がないと言われても仕方が無い。

足が動かないのはビビっているからじゃあない。

ただ不覚にも、見惚れてしまったのかもしれない。

その儚くとも凜々しい二面性に…。

「もう一度聞く。

どうして貴方が此度も現界している。

既にアーチャーのクラスには貴公とは別の者が呼び出された」

——不味い。

どうやらセイバーが話しかけてきた事により、真つ当な危機感が戻ってきたようだ。

厳しい状況。

それが現状を表すのに最も的確だろう。

セイバーが来る、その可能性を全く考慮していなかった辺り、俺も抜けていると思う。

凜の『うっかり』が伝染したのかもしれない。

兎も角だ。

状況は最低、だが最悪じゃあない。

冷静に考えればセイバーは恐らく俺を倒しに来たのではなく、キャスターを討伐に来たのだろう。

なにせ、ここに俺が来たのは、バゼットが提案したからという偶然であり、バゼットが提案しなければ此処には来ていなかった。

そこで、だ。

今はどうだか知らないが、キャスターを討伐しに来た以上、俺には

まだ逆転の可能性があるッ！
セイバーの思考回路を考え、現状を鑑みれば。

交渉において、ギルガメッシュの能力は役に立たない。
ならば俺自身の力で、ここを乗り切ってやる！
大丈夫だ、俺ならできる。

「……セイバー、お前は何をしに来た？」

「質問に答えろ！」

「何をしに来たと聞いているッ！」

「！」

こういう時は、相手のペースにさせられては駄目だ。
強引にでも、自分のペースに巻き込んでやる！

「遊びに来たのか？戦いに来たのか？それとも我に質問しに来たのか？」

——否！違うッ！

お前は救いに来たのだッ！」

「救い……だと？」

よし乗ってきた。

セイバーみたいな見た目は美少女を、口先三寸で誤魔化すのは少し良心が痛まんでも無いが、ここはもう少し良心には眠っていて貰おう。

「然り！——背後に浮かぶキャスターを見ろッ！

その者は私欲の為に聖杯を求め、他者を犠牲にしようとする魔女だ！別に私欲で聖杯を求めるのを駄目とは言わんッ！

だがその為に罪無き人々から魔力を搾取しているのをセイバー！

お前は認めるのか！？」

「そ、それは……

無論、認めません。

ですが貴方は何故現界して————」

不味い、ここでその質問をされたら、再びペースが持っていかれる。ここは力を弱めて諭すように……

「お前が、我が現界している理由が気になるのも無理は無い……。だが今は、罪無き民草を守る為にも、お互いに矛を収め、共に戦うべきではないのか？

無論、無料タダでは言わん。キャスターを討った暁には、我が何故現界しているか、その理由を話そう。∴我の名に掛けて誓おう」

「……………いいでしょう。

その言葉、信じるぞ。

だが裏切った時には————！」

「戯けが。我にも面子がある。一度言った事は破りはせん」

剣を下ろすセイバー。

どうやら上手くいった……。

キャスターだけでも厄介だというのに、セイバーまで加われば万に

一つの勝機もないからな。
だがこれで……………。

「さてキャスター。」

見ての通りだ。

我とセイバーの二人を相手に、果たして勝てるかな？」

「……………確かに二対一では分が悪いわね。

ならこれでどうかしら？」

パチンツ、それが指を鳴らす音だと気付いた時には、既に異変は現れていた。

出現する大量の、骨で構成された兵士。

キャスターの周りには、先程俺に攻撃したのと同じような岩石。

「直接魔術が効かなくても、やりようはあるのよ。

——————やりなさいッ！」

再び戦闘が始まった。

数多の骨兵。

常識的な人間の範疇で考えるなら十分に脅威だが、相手するのは彼の騎士王。

如何に龍の牙を用いて作られた兵士といえど、そこいらの雑兵と変わらない。

不可視の剣を一閃。

骨の兵士の六体が吹き飛ばされる。

それは一瞬の出来事、キャスターは何が起きたかまだ理解し切れていない様子。

それならいい。

何よりも相手が平静を取り戻すのを待ってやるほど、俺はフェアプレイ精神に溢れているわけじゃあない

その隙を付かせて貰う！

キャスターは上空。

先程取り出した絨毯で接近するという手もあるが、さっきとは状況が違う。

接近戦における玄人がいるならば、自分は援護射撃に専念すべきだろう。

ラッキーな事に（これも幸運Aの力か？）使える宝具の中には、丁度いい物がある。

取り出したのは弓。

本来なら弓であるなら弾切れを気にしなければならないが、この弓に関しては、それは不要。

キャスターへと向ける。

それ程力む必要は無い、素早く弦を引き———射る。

解き放たれた矢は、上空に浮かぶ魔術師へと疾走。

それを———

「M^盾ap^盾po^盾xi^盾！」

容易く防ぐ。

だが無駄ではない。

こうやってキャスターを狙い続けていれば、キャスター自身は身動きできない。

「その弓矢は無駄なき^{フェアノート}必中の弓！」

トリスタンの物を何故貴方が持っている!？」

「これで三度目だが、何処の世界に自分の情報を曝け出す愚者がいる!

そんな事を聞く前に、目の前の雑魚を倒したらどうだ!」

「貴方に言われずともやっています!」

「なら口より先に手を動かせ!

口を動かさない分、二倍のスピードで動けッ!」

「貴方に命令される筋合いはないッ!」

だが流石はセイバー。

口では悪態を付きながらも、今また八体の骨の兵を打ち倒した。

「これは……順調だな……」

元より、セイバーと俺の二対一でキャスターに勝ち目なんてある筈が無い。

このまま押し切れる。

「さてよ………」

そこまで考えた所で奇妙だと思った。

そう、キャスターが不利なのは目に見えて当然。

なら、メディア程の女が無策に戦うだろうか?

いやない。

真っ向勝負で勝てないから、策を使う。それがキャスターのクラス

だ。

ならばこの状況は実に奇妙。

策を弄する筈のキャスターは、一見なんの策も使わず戦っている。

という事は可能性は一つ。

よく見れば上空に浮かぶキャスターは、どうにも気配が薄い。

「—————ッ！」

走った。

間に合うか？…いや間に合わせる。

セイバーは相変わらず骨の兵士達を斬っていた。

だが駄目だ。

俺の考えが正しければセイバーは—————！

そう思っていると一体の骨の兵士が、その身に不相応な魔力を持っている事に気付く。

セイバーは気付かない。

アレの擬態は完璧だ、注意深く見なければ気付けない。

「セイバー—————ッ！」

「なっ—————！」

もう間に合わない。

驚くセイバーを問答無用で蹴り飛ばした。

「なっ！」

その声は誰のものか…。

ガキンッ、鈍い鉄と鉄がぶつかる音が響く。

さっきまで骨の兵士の一人だったそれは、今では魔女の形をしていた。

キャスターの持つそれこそ彼女の宝具。

名を『ルールブレイカー破戒すべき全ての符』

サーヴァント契約ですら破戒する最高の対魔術宝具。

だがどんなにランクが低くても宝具には影響が無いという特性が、俺の黄金の鎧を突破する事を拒む。

—————この距離ならば外すことは無い。

冷静な思考が判断した。

宝物庫よりランクの高い剣を取り出し、斬る。

「うぐっ—————そんな……」

最後に、そんな言葉を残し、

裏切りの魔女と呼ばれたキャスターは、呆気なく退場した。

「終わったか…」

脅威の消えた後、ポツリとギルガメッシュが呟く。

些か呆気ないような気もしないでもないが、本当の戦いなどこんな

ものだとな得させた。

「待ちなさい、アーチャー！」

その時、彼を呼び止める声がした。
声色から判断して、セイバーだろう。

「なんだ？」

振り向くと、そこには激怒したセイバーがいた。
立ち上る怒気はまともな人間なら、有無を言わずに平伏させる力
がありそうだ。

「どういう事ですか！」

一時休戦と言っておきながら蹴り飛ばすとは……
見損なったぞ、アーチャー！」

どうやら、セイバーはギルガメッシュが蹴り飛ばした事を怒って
いるらしい。

確かに緊急事態だったが、今思えば事前に警告するなどの方法はあ
った。

それが出来なかったのは、単純に彼自身に経験が足りていないだけ
なのだが、そんなことセイバーは知る由もない。

「戯けが！」

我が手を出さなければ今頃貴様は、キャスターの宝具によりやられ
ていたぞ！」

ギルガメッシュは、少し怒りを含んで言った。

何故なら、彼はセイバーの第一声は感謝であると予想していたから

である。

「それは認めます…が、やり方が乱暴すぎる…。
もう少し方法があつた筈だ！」

「下らんな！」

確かに過程にも価値はあるが、何よりも重要なのは結果だ。
結果を得るためには過程は問題じゃあない」

「違う！…ただ結果だけを求めていたら人は必ず修羅となる！
それをさせない為にも過程は重んじらなければならない」

両方の言う事に一理ある。

確かにギルガメッシュの言う通り結果は重要だ。

だがセイバーの言うように結果だけを求めていけば、人は必ず身を
滅ぼす。

この場に仲裁する人物がいれば良かったのだが、止めるべきバゼツ
トはライダーとの戦闘に熱中していてこちらの様子など、思考の片
隅にも入っていない。

「阿呆がッ！」

大体、そんな戯言をほざく前に、貴様をわざわざ救ってやった我に
対して、少しは土下座でもしたらどうだ？」

「断ります！…大体貴方は前回もそうだった…。

先ず貴方は他者に対する礼儀を身に着けるべきです。

確かに貴方は王です。

ですが王といえど、いや王だからこそ他者への礼儀は怠ってはなら
ない。

王とは民衆の模範となるべきなのですから……。

貴方のように我侭三昧では民衆もまた不満を持ちます。
王道以前に、人としてその性格は直した方がいいですよ」

「知らん！…一人で吼えている！」

「なっ！…その言い方はなんです！？
たった今、礼儀を身につけるべきだと言ったばかりでしょう」

「ええい、貴様は私の母親か！」

「ば、馬鹿な事を言わないで下さい！
例え蛸と貴方のどちらかを育てないといけないとしても、貴方は選
びません！」

「待て、それは可笑しいであろう。
少なくとも我は蛸よりも礼儀正しい自信はあるぞ」

「そうでしょうか？
私の見た限り蛸の方が十倍ほど礼儀というものを知っているように
思います」

「口煩い女だ。」

「そんなのだから騎士王。
お前は円卓の騎士どもに裏切られたのだ」

「なにを！——それとこれとは話が別です！」

「いいや違わん。」

「私の推測では、お前の口煩さに飽き飽きした騎士共が、裏切りを目
論んだのだ、そうに決まっている」

「聞き捨てなりません。

私を侮辱するのはまだいい、だが騎士達を侮辱するのは許さんぞ！」

「フハハハハハハハ！」

その騎士共は知っていたのか、お前が女であるという事を？
まあ気付きはしなかっただろうよ。

お前の貧相な胸では、男と見間違われても仕方ないだろうな」

「む、胸は関係ないでしょう！
話を逸らさないで下さい！」

「黙れナイチチ。

アホなのはアホ毛だけにしろ」

「そういう貴方こそ、その趣味の悪い鎧を何とかしたらどうです？
はっきり言いますが、派手なだけで美しさの欠片もない」

「その感性は可笑しい。

こう見えてもこの鎧の頑丈さは、数ある鎧の中でも随一だぞ」

「頑丈さは随一だとしても、見た目に関しては最低のようです。
これを造った者は、美しさを知らなかったようですね…」

「気に喰わん！

我は帰る！」

「待ちなさい！

まだ貴方が現界している理由を聞いてませんよ！」

「興が削がれた。

もう、貴様には何一つ教えん」

「くっ、そのような横暴な行動だから、貴方には礼儀が足りないというのです」

「黙れナイチチ」

「貴方こそ、そのセンスの悪い鎧を何とかしなさい」

二人は互いに譲らない。

既に言い争いの内容は、最初の話題から遠く離れた低レベルな物になっていた。

「―――――ああ、セイバー。

同じサーヴァントとして忠告させて貰うが、そろそろ止めたらどうかね」

「「へっ?」」

二人は同時に声の方向に振り向いく。

そこには鍊剣の英霊が、

変な物を見るように、頭を抑えて立っていた。

TURN 7 (後書き)

アサシン&キャスターは早々に退場。

まあ無理に全てのキャラクターの見せ場を用意しようとする、話が滅茶苦茶になるので、二人には消えてもらいました。
キャスターファンの皆様申し訳ありません！

アーチャーも乱入して迷走する戦場。

だけど次回には、青い人も……

TURN 8

「よもや、桜がこれ程の器とは…。
予想外、いい方にの」

間桐臓硯は笑う。

目の前に少女の適合性に。

確かに優れた胎盤だとは思っていた。
だがこれは全くの予想外。

臓硯の行った事は一つ。

単に、頭の波長をいじくり、遠坂凜と衛宮士郎が愛し合っている夢
を見せた、ただそれだけ。

たったそれだけの事で間桐桜は、こんなにも染まっていた。

「カッカッカッ、これは妹を貰っておいて正解じゃった。
遠坂の子供ではこうはいかん」

既に黒い聖杯には、一つのサーヴァントが吸収されている。
言うまでもなく先程敗北したキャスターだ。

臓硯としては、ここでギルガメッシュの魂を吸収したかったのだが、
結果は失敗。

慎二に命令してライダーをキャスターの援護に向かわせてはみたも
の、ライダーは執行者に抑えられ、予定外のセイバー乱入により
キャスターは消滅した。

「だが、まだ上手く立ち回ればこの場で、セイバー、アーチャーそ
して黄金のサーヴァントの全てを、喰らう事も出来るやもしれん、

幸い既に腹を空かせているようだしのだし。サ－ヴァント三体となれば、極上の餌になるじゃろうて」

老人は笑う。

望みは唯一つ。

「死にたくない」

身体を蟲と変え数百年の時を生きた妖怪。

しかし、幾ら己が身を改造したとしても、寿命という物は少しずつ臓硯の身体を腐敗させていく。

寿命という名の呪縛から完全に解き放たれる為にも、第三の成就是不可欠。

「ではの桜、今日はゆっくり休むといい」

その身に合わぬ、優しい声色で言うと、臓硯は蟲倉から去っていった。

黄金の魂に導かれし靈魂 第8話

「さて、話は積もるが」

気を取り直してアーチャーが双剣を持つ。

彼の視界に映るのは一人。

先日交戦し、まんまと逃げられた黄金のサ－ヴァント。

「アーチャー、貴方は…」

「マスターからの命令だ。

セイバーに加勢し、敵を殲滅しろ、とな。

見た所、今現在の君の敵はキャスターではなく、そのサーヴァントと見るが、どうかね」

「確かに彼は倒すべき敵です。

ですが彼にはまだ聞きたい事がある」

「残念だが、私はリンのサーヴァントだ。

同盟しているとはいえ、サーヴァント同士は本質的に敵同士。

私は君の言葉より、リンの命令を優先させてもらおう」

「ですが……」

油断なく黄金のサーヴァントを見やる。

その表情は何の色も映してなく、なにも伺うことが出来ない。

状況は二対一と二人に有利だが、セイバーはこのサーヴァントがどれだけ常識外れだが知っている。

微塵の油断もしてはならない相手だ。

そして当の本人はギルガメッシュというと…

（ええい！どうすればいい！！！！！！）

物凄く混乱していた。

（セイバーなら口先三寸で逃れる事も出来たかもしれないが、アーチャーにそんな手を通じるとは思えん！

それにアーチャー相手には、セイバーに共闘をもちかけるなんていう奇策は不可能だ！

そうだ！バゼット！

今こそお前の力を示す時だッ！）

バゼットを見る。

相変わらずライダーと戦闘中……

（おのれ〜！何故このような肝心な局面で貴様はッ！だからダメツトなのだ！…そうだ！）

肝心な事を忘れていた事を思い出す。

サーヴァントの中で最も姦計に秀でたもの。

（キャスター！今こそセイバーを自身のサーヴァントとする時だ！

・

駄目だ。我がさっき殺したばかりだ…。

そうだ！こういう時はあれだ。

ご都合主義ってやつだァア！

現実ならば期待なぞできんが、幸いにしてこの世界はゲーム…。

きっと、今直ぐにでも訳の分からん力が発生して、王の財宝の全てが使用可能になる、かもしれない）

頭を抑えて、記憶が上書きされているか確かめる。

結果は………新しく使用可能となっていた宝具は………一個。

（一個だと！？

いやまだだ！その一個が起死回生の一手となる可能性が…）

急いで、新しく使用可能となった宝具を確かめる。

既に刻まれた記録、直ぐに宝具の内容は理解出来た。

（なになに……『安眠ベッド』か…。

これさえあれば、明日からは不眠症なんて問題な————ッてアホか————ッ！

何が安眠ベッドだ！もうちっとマシな物を入れとけ！

そう例えば時を止める宝具とかだ、あるかどうか知らんが…。

待てよ、時を止めると言えばD I Oとギルガメッシュは容姿も似ているな。

一部は兎も角、三部からは瞳の色も赤だったし、おまけにカリスマ。もしかしたらD I Oを意識してギルガメッシュのキャラを作ったのかも知れんな……。

・
・
・

そうじゃあない！

幾ら危険だからといって現実逃避してどうする！

逃げたって厳しい現実は変わらん！寧ろ時間が経過した分、余計に厳しくなっている！

真っ向から戦うというのは論外だ。

セイバー一人なら5%程度は勝率もあったが、二人同時となると勝率はほぼ0。

ならば、ここは賭けに出るべき時か……）

そうとなれば話は早い。

腹いせに掴んだ安眠ベッドを、バゼットとライダーに向けて放り投

げた。

「ッ！」

「なっ——！」

流石は封印指定の執行者とサーヴァント。

瞬時に身に迫る危険を察知すると、ほぼ同時に飛び退いた。

「……………！」

セイバーにアーチャー……。成る程、流石に分が悪いですね」

ライダーが撤退しようとする。

待っていた……。仕掛けるのは今しかないッ！

「セイバー、聞けッ！」

そのサーヴァント、ライダーが学校に結界を張った犯人だッ！」

「！」

そう、セイバーも勿論アーチャーも学校に、中にいる人間を溶解させるという性質の悪い結界が、張られている事を知っている。

磨耗したアーチャーは分らないが、セイバーの騎士道に乗っ取るならば一般人を大量虐殺する事になる結界を張った者は、決して許せないだろう。

ならばセイバーの反応は予想出来る……。

その結果は……

「アーチャー、貴方はアーチ……。黄金のサーヴァントを頼みます。

私はライダーを」

「任された。何より弓兵が二人もいたら色々と面倒だからな。奴にはここで退場してもらおうとするか」

(そう来たか……)

心の中で呟くギル。

上辺から見れば、上手く戦力を分散出来た、と思うかもしれないが彼はそうは思っていないかった。

恐らくはライダーは逃げ延びる。

今回とよく似た状況で、ライダーは天馬召喚という奥の手で逃走していた。

正確な数字は忘れたが、天馬のスピードは時速数百キロだったはず。幾らサーヴァントといえど追いつく事は不可能。

だが、しかし。

セイバーが相手の能力を既に知っていたならば如何だろうか？

「セイバー、一つ良い事を教えてやる。

ライダーの真名はギリシャの怪物メドゥーサ。

能力は石化の魔眼と天馬の召喚。

天馬は速い！一度出されればお前でも追いつく事は不可能だ！」

「！……貴方、どこで私の真名を…。

いえ能力まで詳しく知っていると、何物ですか！」

「これで三度目だが、どこに自分の情報を敵に晒す愚か者がいる。それと我にばかり構っていてよいのか？」

「!」

ライダーは気付いた。

自分に迫る騎士の存在に。

（白兵戦で私に勝ち目はありそうにないですね…）

白兵戦では勝機無しと判断したライダーは、後方へ逃走する。

無論、それを黙って見過ごすセイバーではない。

ライダーを追って跳躍した。

ライダーにとって幸いだったのは、自分の俊敏がBでセイバーの俊敏がCだった事だろう。

技量では全く及ばないが、単純なスピードではライダーの方が上なのだ。

「ふふふ、上手い具合に追ってきますね」

鋭い眼光で追ってくるセイバーを見て、ライダーは妖艶に微笑む。

確かに接近戦では、ライダーはセイバーの足元にも及ばない。

おまけに黄金のサーヴァントのせいで自分の能力は、完全に暴露されてしまった。

（当初の予定では、ペガサス天馬で逃走しようと思いましたが……）

このまま上手い具合に自分に有利な場所まで、誘い込めれば勝機があるかもしれない。

注意すべきなのは、やはり見えない鞘で覆われた剣。

セイバーのクラスに召喚される程のサーヴァントの宝具が、見えな

い剣だけというのは考えづらい。
必ずセイバーの名を冠するに相応しい宝具を持っていると考えるのが妥当だ。

「見えてきましたね…」

ライダーの目的地である高層ビル群が見えてきた。
森林に誘い込むという手もあったが、それだと木々をセイバーに破壊される可能性もある。
だがビルならば、そう易々とは破壊出来ない、そう考えての行動であつた。

「ッ！——————ライダー、何処まで行くつもりだ！」

セイバーにしては珍しく愚痴る。
既に柳洞寺からは遠く離れてしまった。
よく考えればアーチャーに全て任せてしまったのは失策だったかもしれない。

しかし、こうも考える。

今日実際に会って思った事だが、ギルガメッシュアーチャーは可笑しい。

少なくとも前回の印象では、間違つても他者に助力を仰ぐような人物ではなかったし、戦い方も変だった。得意の殲滅戦はせずに、やったのは弓矢による援護とキャスターへの止め。

全体から感じる雰囲気も、記憶にある彼と若干違うような気がする。
尤も実際に会って話した事など数えるほどなので、正確なことは分からないが…。

「だが、やはり彼の考え方は私とは合わない」

それだけは断言できる。

唯我独尊を地で行くような言動、勝つ為には手段を選ばないという思想。

どれもこれもセイバーの考えとは対極に位置するものだった。

「いえ、今はそんな事を考えている場合じゃない」

自分で自分を叱咤する。

既にライダーには差を付けられてしまった。

セイバーは脚に力をこめると、スピードを上げてライダーを追っていった。

（セイバーはライダーを追って行ったか。
だが、これで……）

セイバーがライダーを追っていた後、柳洞寺にはバゼットとギルガメッシュ、そしてアーチャーが残された。状況は好転したと見てもいいだろう。

一対一なら勝機は低いが、バゼットも含めて二対一となれば勝機は十分にある。

それに、だ。

元からギルガメッシュはこの場でアーチャーを倒そうとは考えていない。

キャスターが死んだ今となっては、目下最大の敵はバーサーカー。

残ったギルガメッシュを含めた六人のサーヴァントで、単体でバー

サーカーを倒せる者はいない。

敢えて上げるならセイバーとギルガメッシュだが、前者はマスターのせいで力半減、後者は本来の実力の半分も発揮できないときいてる。

つまりバーサーカーを倒せるのは、アーチャーが無限の剣製を使い、それをセイバーが倒すというのがベスト。そうでもしなければ素でバーサーカーが最大の障害となる。

その為にもアーチャーにはここで負けて貰う訳にはいかないのだ。

幸いにして数ならばこちらが上。

セイバーがライダーを倒せるかどうかは分からないが、少なくとも結構な時間を消耗するだろう。

出来る事なら宝具の打ち合いをして、共倒れになってくれれば言う事無しだが、流石にそれは欲張り過ぎだろう。だがこれで逃走経路は見えてきた。

「クッククツ、これで二対一だ、アーチャー。

どうだ？ここは停戦といかないか？

もし今日はお開きとするならば、我も今日の所は退こう。

悪い条件じゃあないと思うが？」

「……………成る程、確かに状況は不利だ。

そのマスターが極普通のマスターなら別だが、私は実質的にサーヴァント二体を相手にするのと同義という事になる。

いいだろう。ここは私も停戦しよう」

心の中で胸を撫で下ろす。

良かった、これで……

「へえ、なら俺が加われば丁度いいじゃねえか」

なのに如何して

——— ころも来て欲しくない人間が来るんだ。

「貴方はラン、サー」

「…………あの小僧の時もだが、まさか二度も死んだ筈の人間に会うとはよ。

お互い奇妙な人生じゃあねえか、なあバゼット」

（一難去って、また一難……。

いや前門の虎後門の狼、絶対絶命、四面楚歌、他にいい言葉はあったか……）

余りにも予想外過ぎる乱入。
戦場は更なる迷走を始めた。

TURN 9

「何で、八人目のサーヴァントがいるんだか知らねえが、相手してもらうぜ、金ピカ!」

意気揚々と槍を構えるランサー。

その目は闘志に満ちている。

「……………はあ」

戦場だというのは分っているが、どうしても溜息をつく事を止められなかった。

今日はもしかしたら、俺にとって最悪の厄日なのではないだろうか? そう思ってしまう…。

なんとかセイバーを追っ払えたと思ったら、お次はアーチャーとランサー。

言い方から推察するに、言峰から俺の事を教えて貰ってはいないよ。うなので、恐らくサーヴァント全員と交戦して、必ず止めはささずに生還しろ、という命令は持続していると考えるべきだ。

ならばバゼットをランサーに当てる訳にはいかない。

ホロウのストーリー上でも印象的だっただけあって、ランサーVSバゼットの結果はよく覚えている。

確か因果逆転と時間逆行との概念は相打ちに終わった筈。

ならば必然的に刺し穿つ死棘の槍と相性が良い俺が相手すればいいのだが、問題なのはアーチャー。

英霊エミヤは未来の英霊。

エミヤシロウの未来での戦いがどのようなものだったか、詳しくは知らん。

しかし、恐らくは死徒や魔術師、そして封印指定の執行者とも戦っただろう。

もしかしたらバゼットとも戦っているかもしれない。

兎に角だ。

バゼットは強いが、英霊エミヤはそれを超える強さ……。

おまけにフラガラックは剣、アーチャーなら直ぐに見抜くだろう。その能力も特性も…。

整理しよう。

今の持ち札は二つ。

俺とバゼット、それだけ…。

逆に相手はアーチャーとランサー。

戦力比は少なく見積もって2…8

勝率はほぼ0。

(—————なら諦めるのか?)

心の中に声が響く。

ああ、理解している、これは俺の弱気だ、恐怖だ!

(御免だ!俺は生きるッ!こんな所で死んでなんてやるものかッ!)

再び冷静に、冷静に状況を把握する。

周辺の地形、戦力、それ等を把握したところで—————

「なっ!アンタはあの時の金ピカ!」

再びの乱入者の声がした。

黄金の魂に導かれし靈魂

第9話

私と士郎が柳洞寺に到着すると、意外過ぎる光景がそこにあった。当初の目的であるセイバーとキャスターはそこにはおらず、先日に戦った金ピカとそのマスター、そしてアーチャーとランサーが睨みあっている。

「アーチャー、説明して。

これは如何いうこと？」

「詳しい説明は省くが、私が到着した時点でキャスターは、その金ピカとセイバーによって倒されていた。私が見る限り、どうやら二人は共闘した様子だ。

幸い金ピカのマスターは、何故かライダーと戦っており、金ピカを倒すには絶好の機会でもあったのだが、どうやらライダーは学校の件での真犯人のようだ。

逃げたライダーをセイバーが追跡し、その金ピカが私に、一時の停戦を提案した所で、今度はランサーが来た、というのが現時点までの流れだ」

「あ、ありがとう」

この長い言葉を、全然息継ぎする事無く言い切ったアーチャーに、

少し驚くが今はそんなことを考えている場合じゃない。

つまり大雑把に纏めると、ライダーとセイバーは此処から離れた場所で戦闘中。

そして今はアーチャー、金ピカ、ランサーで三つ巴で睨みあっていると、そういうところだろう。

「異常事態ね…」

「おい大丈夫か、遠坂!？」

頭を抑えた私を心配してくれたのか、士郎が焦った声色で氣遣う。その好意は嬉しいが、今はこの混沌した戦場をどうにかするのが先決だ。

「…………アーチャー、ここは退くわ」

「!」

「!」

「!」

私がそう言うと、ランサーと金ピカ、それに金ピカのマスターが一齐に、私を睨んだ。

英霊二人と魔術師一人の猛烈な殺気を受けて恐怖しそうになる精神を、強引にねじ伏せる。

「成る程、撤退か。」

悪くない選択だ。私も今日はセイバーの救援に来たのであって、ランサーと金ピカと戦いに来たというわけではないからな」

「善は急げよ。」

直ぐに撤退するわ!」

「了解した」

そう言った瞬間――私はアーチャーの肩に捕まり、アーチャーは士郎の首根っこを捕まえた。

ランサーと金ピカは、私達を凝視しているだけで攻撃しようとはしない。

どうやら私達を追うよりも、目の前の敵と戦う事を選んだようだ。

「おい、何やってるんだ!

放せ馬鹿!」

「知るものか。いいから黙っているろ。」

お前と話していると自分の馬鹿さ加減に腹が立ってくるわ、馬鹿が!」

今後の対応を考えていると、なにやらアーチャーと士郎が口喧嘩を始めていた。

人が真面目に策を練っている時に、喧嘩などされて黙っていられるほど、私は心が広くはない。

「ああもう! ゴチャゴチャ煩い!」

「「…………ツ!」」

私が一喝すると二人は大人しくなった。

よしよし。これで落ち着いて集中出来る。

取り合えずアーチャーの話ではキャスターは脱落した。

これは事実。

つまり街から魔力を搾取していた存在が消えた事を示す。

となると残る懸念は、学校に張られている性質の悪い結界。

アーチャーの話では、結界を張ったサーヴァントはライダーであり、セイバーが逃げたライダーを追っていたそうだ。

なら私が採るべき選択肢は一つ。

「アーチャー、セイバーがどっちに行ったか分かる？」

「大体の方角なら分かるが……セイバーの救援に行くつもりか？」

「ええ。別にセイバーの実力を疑うわけじゃないけど、一対一より二体一の方が勝算は高いでしょう。

それにライダーを倒せば学校の結界も解けるんだから一石二鳥よ」

ピシヤリと言い切るとアーチャーは一言だけ「了解した」と言い跳躍していった。

「アーチャーは離脱した、か」

（遠坂凜と衛宮士郎が来た時にはどうなるかと思ったが、どうやらツキが向いてきたようだ。）

ギルガメッシュは辺りの気配を探る

どうやら言峰はいない。

今なら実質的にランサーVSバゼット&ギルガメッシュでの二対一で戦える。

ここでランサーを倒しさえすれば、後は言峰一人など容易く倒せる筈。

「おいバゼット————！」

話しかけようとした時に気付く。

バゼットは既に戦意を消失していた。

アーチャーやライダーと真っ向から戦った時の頼もしさはなく、まるで少女のように恐怖していた。

「おい、バゼット。」

これから俺はアンタのサーヴァントとアンタを殺す訳だが……」

「え————？」

（不味い、今のバゼットでは不味い。

それにこの状況！

ホロウでの二の舞になり兼ねない。）

「待って下さい！

何故アナタと戦わなくては……」

「戦うのは当たり前だろうが。

昔は兎も角、今の俺達は敵同士だ。

さあ、殺しあおうぜ、バゼット」

（駄目だ……ここでバゼットを失っては！

今のバゼットでは勝機など……!)

「チィィ!下がっている!

我がランサーの相手をするッ!」

「え———?」

バゼットを押しつけ、彼女を庇うように前に立つ。

何でもいいから取り出す。

少しでも有利に戦えるような武器を…。

取り出したのは深紅の魔槍。

といっても破魔^{ゲイ・ジャルク}の赤薔薇じゃない。

「なっ!」

驚愕するランサーに容赦なく槍を突き刺す。

—————失敗。

如何に驚愕したとはいえ、槍の英霊の名は伊達じゃない。

軽い動作で赤い魔槍を払うと後方に跳躍した。

「解せんな———その槍は間違いなく俺の刺し穿^{ゲイボルク}つ死棘の槍。

何故お前がソレを持っている」

偽者ではない。

元よりその槍に関してランサーが見間違えるわけがない。

己と共に生き、己と共に伝説を創った半身を間違え筈がなかった。

「四度目だ。どこに自分の情報を敵に晒すアホがいる」

「ちっ、狸が…！」

だがまあ、気に喰わねえが確かに貴様の言う通りだ。

—————言葉じゃなくコイツで語るのがサーヴァントだったな！」

そして戦いが始まった。

高層ビルを水平に駆ける影が二つ。

ライダーとセイバーだ。

「どうです？」

ここでは貴女も全力を出せないでしょう」

「世迷いごとを！」

正解だった。

ライダーとは違い、セイバーにこのような場所での戦いは経験した事が無い。

容赦なく身体を落とそうと引っ張る重力。

それを持ち前の脚力と僅かな足場を最大限に活用する事で駆ける。

驚くべきはライダー。

こんな場所での戦闘にも関わらず、まるで大地のように—————否。地面での戦い以上に俊敏な動きでセイバーを翻弄する。

「ぐっ！」

セイバーではなくセイバーの足元に短剣が突き刺さる。

深く刺さった短剣を、素早く渾身の力で引き抜くライダー。

するとどうだろう。

セイバーが立っている足場が、空中へ放り投げだされた。

当然、その場所に立っていたセイバーも巻き込まれる。

（このままでは……！）

慌てて魔力を放出する時の衝撃でビルに戻ろうとするが遅い。

見上げればそこに騎乗兵の姿は無い。

上にいないのであれば、いるのは………。

「下か！ライダー！」

無防備の脳天に向かってライダーの短剣が伸びる。

セイバーは背中を向けていた。

これならば外す事はない。

「馬鹿な———！」

その声はライダー。

驚くべき事にセイバーは、前を向いていながら後ろから高速で飛来する短剣を、正確に掴んで見せたのだ。

これこそセイバーが誇る『直感』のスキル。

未来予知じみた天性の直感は、まるで後ろに目があるかの如き行動をセイバーに許した。

「はああ！」

ライダーに出来た僅かな隙を見逃すセイバーではない。

魔力の放出によりビルに戻ると、そのまま落下スピードを活かしてライダーへ切りかかる。

急いで後方へと下がるが遅い。

（躲しきれない——！！）

セイバーの剣がライダーを切り裂いた。

そのままライダーは重力には逆らえず地面に吸い寄せられていく。こんな状況にも関わらず、落下するライダーは、その美貌と美しい髪もあって実に幻想的だ。

セイバーは墜ちて行くライダーを冷ややかに見つめている。

あの傷でこの高さだ。

恐らくは助からないだろう。

「あれは……」

少しの間、地面に落ちたライダーを見てみると、やがて一人の——
——そう自分のマスターと同じ年頃だと見える少年がライダーの前に立った。

「お——僕が————立て——」

ここからでは上手く聞き取れないが、どうやらライダーを罵倒しながら命令しているらしい。

だがライダーが立つ事は無い。

既に彼女は常人なら確実に即死であろう程の傷を負っている。

例え立ち上がった所で、ライダーはセイバーを一瞬だけ防ぐのが精一杯だ。

何時までも見ている訳にもいかない。

セイバーはビルから跳躍して、ライダーと少年の前に降り立った。

「ヒッ！おいライダー！

立てよ、僕がわざわざマスターになってやったんだぞ！

死んだっていいから、さっさと立ち上がれよ！」

「うう……」

ライダーの身体がピクリと震えるが、それだけで反応はない。
少年は尚もライダーを罵倒する。

「諦めるがいい、ライダーのマスター。

もはやライダーは戦えない。

貴公の敗北だ」

「ふざけるなよ……クソ！クソ！クソ！

僕が、この僕がア！

おい！ライダー！起きろ！

僕が危ないんだぞ！さっさと起きてソイツを————うわッ！」

その時だった。

少年が持っていた本が燃え始める。

同時に消えていくライダー。

（あれは……ライダーのマスターの令呪はあの本なのか？）

本が令呪というのは聞いた事が無いが、セイバーは魔術師じゃない。
ただ分かるのは、間違いなく本は令呪であり、それが消滅したと同時にライダーが消えたという事だ。

そこから導き出せる結論は一つ、ライダーは死んだ。

「さて覚悟は良いか、ライダーのマスター」

セイバーが不可視の剣を構える。

少年は後ずさる。

このような自分の範疇を超えた恐怖に迫られた人間が採るべき行動など唯一つ。

少年——間桐慎二は恥も外聞もなく逃げ出した。

無論、それを見逃すセイバーではない。

なによりもマスターを逃がせば、また他のサーヴァントと契約する可能性もある。

だが、セイバーが剣を振り下ろす前に、二人の間に立つ者が現れた。

「貴方、は——」

身に纏った法衣。

そして慈愛に満ちた表情——。

成る程、その男は神父だった。

恐らくは、聖堂教会から派遣された聖杯戦争の監督役。

この男がそうなのだろう。

「剣を収めろ、セイバーのサーヴァント。

私はこの戦争の監督役だ」

「……………」

幾らなんでも監督役を斬るわけにはいかない。
しぶしぶセイバーは剣を収めた。

「さて少年。

君は教会に保護を求めるかね？」

優しい声で、間桐慎二に問いかけた。

まるでそれは救いの声でもあり、同時に悪魔の囁きにも聞こえた。

「へーーーーー？」

「怯える事はない。

敗退したマスターは令呪を破棄する事で教会に保護を求める事が出来る。

君はそれを望むかい」

「ああ、望む！

大体、サーヴァントがいないんじゃ、こんな化け物と戦えるはずないじゃないか！

そうだ、戦えない僕を一方的に、謂わば僕は被害者だぞ！それ——

少年の言葉を制して神父がセイバーに向き直る。

「そういう事だ、セイバーのサーヴァントよ。

ライダーのマスターは敗退し教会へ保護を望んだ。

これ以上の戦闘は監督役への敵対と受けるが？」

「いいだろう、元よりその少年が令呪を破棄し、聖杯戦争から降りるといふのであれば、これ以上戦う理由はない。だが一つだけ聞こう。

学校に張られている結界はどうなる——？」

「あれの事か。」

キャスターの張った結界ならば分らんが、あれはライダーの宝具。如何に強力な宝具とはいえ、使い手が死んでもなお発動し続ける宝具など存在しない。

いや、使い手が死ぬ事がトリガーとなる宝具もあるにはあるが、学校に張られた結界はそのような物ではない。今は私の下にいないが、少し前まで、その手の事に詳しい男が教会に滞在していたな。

その者が断言したのだ、間違いはない」

「……………いいだろう。」

聞いた通りだ、ライダーのマスター。

早々にこの場から立ち去るがいい」

「くっ———！」

悔しそうな表情で立ち去る慎二と、それを追う神父を、セイバーは静かに睨んでいた。

TURN 9 (後書き)

最近なにやらスランプ気味の作者ですorz
次回はギルVSランサーになっていきます。

TURN 10

「セイバー！」

神父と間桐慎二が去ったので、再び柳洞寺に戻ろうとしていた時、マスターである衛宮士郎の声が聞こえた。見れば、アーチャーに首根っこを捕まれてぶら下っている士郎と、優雅に肩に捕まっている凛の姿が見えた。

かなりコミカルなその光景に、不覚にも笑みが漏れてしまう。

三人が地上に降り立ったので、慌てて表情を戻す。

「シロウ、それにアーチャーとリンも！
何故ここに？」

「貴女を追ってきたのよ。」

でも、その様子だとライダーには逃げられたのかしら」

「いえ、ライダーは先程倒しました」

「へえ、アーチャーの話だとライダーが結界を張ったサーヴァントらしいし、街から魔力を吸っていたキャスターも脱落したから、これで一区切りね」

ライダーを倒した、という報告に大して驚きもせずに凛が言う。

「はい、それより何故ここに？
アーチャーはどうしたのです？」

「私に何のようかね」

「貴方ではありません。

金色の方のアーチャーです」

「……………」

アーチャーがなにやら不満そうな顔をしていたが、そんな事には構わず続ける。

「私にも詳しい事は分らないわ。

士郎と私が行った時には、アーチャーとランサーと金ピカで三つ巴になっていたし」

「ランサー!？」

彼もあの場所に來たのですか？」

「ええそうよ。

まあ、ランサーがいたお陰で私達が撤退する時に、追撃がなかったんだけどね」

「そうですか。

アーチャーとランサーが…」

「だけどこれで、今日一日までで二人のサーヴァントが脱落した事になるわね」

凜がそう言うと、セイバーが黙り込む。

何か考えることがあるのだろう。

「なあ、遠坂。」

今日は遅いし帰らないか？

寒いし、遠坂は女の子なんだから、こんな夜中に出歩いちゃ駄目だ」

「————あのね衛宮君、これは聖杯戦争なのよ。」

夜に出歩かなくて何時出歩けっというのかしら」

「えっ？ いやそれは————」

「でも士郎の言う通りね。」

今日は遅いし一旦帰りましょう。

セイバーだって無傷ってわけじゃないし」

「待って下さい、柳洞寺で戦っているアーチャーとランサーはどうするのですか？」

「ああ、それなら一応は柳洞寺に使い魔を置いてきたわ。」

キャスターが脱落したお陰か結界も滅茶苦茶になってたし————

————えッ！」

「どうしたんだ、遠坂！」

「金ピカが……………やられた…」

黄金の魂に導かれし靈魂

第10話

柳洞寺に激しい金属音が響く。

対峙するのは二人、蒼き槍兵と黄金の王。

ギルガメツシュは既に刺し穿つ死棘の槍を持っていなかった。
ゲイボルク
代わりに所持していたのは剣とギリシャ風の盾。

「そらそらそらそらア——————ッ！」

「ぬウウウ！」

突き出される高速の槍、それを盾で防ぐ。

だが防ぎきれず槍が、ギルガメツシュの胴体を突き刺した。
しかし彼の鎧は深紅の槍を容易く防ぐ。

「はんッ！　どうやら宝具は大量に持っているようだが、白兵戦をするような英霊じゃねえな。
たつく一体全体どこの英霊だあ！？」

「無駄口を叩く暇があるなら、少しは自らのマスターを殺されかけた不甲斐なさを呪い、後悔したらどうだ？　槍兵！」

「まあな、確かにあれは俺のミスだ。
だが後悔はしねえよ。後悔しても過去は変わらねえからな！」

「ほう、後悔はしないか。
よもやマスターである言峰がお気に召したようだな」

「冗談言うな。あんな陰険根暗神父のサーヴァントになって嬉しい

野郎がいるかよ！
どうせならマスターは良い女がいい」

「ああ、確かにそこだけは貴様に賛成だ！」

カッソッ、そんな音とともに弾かれる槍。

流石は英雄王が数ある鎧から選びぬいた一品だけはある、ランサーの攻撃の悉くをこの鎧は弾いていた。

故にギルガメッシュが防ぐのは、顔だけでいい。

左手に持った盾をフルに活用し槍を防ぎ、右手に持った剣でランサーを斬る、それが彼の戦術だった。

（それにしてもランサー！…これで令呪で動きを制限されていると
いうのだから笑えん！
これが全開ならば————いや考えるのは止そう、今はただ眼前
の敵を滅ぼすだけッ！）

黄金の鎧もランサーの猛攻を受けて、ほんのちよつとばかり凹んでいた。そうほんの少し…。

これ程までの防御力があるならばと、ギルガメッシュは戦術を変える事にした。

「むっ！貴様————ッ！」

槍兵の顔が驚愕に染まる。

あろう事かギルガメッシュは、左腕で顔をガードして突貫して来たのだ。

槍で突こうにも、黄金のサーヴァントを包む鎧はあまりにも頑強。

右手には剣ではなく、何処から取り出したのか巨大な薙刀のような宝具を持っており、ランサーの胴体を上と下の半分にする為に振るわれている。

ならば、と。ランサーは後方へ跳躍する事で避けた、が—————

「かかったな、阿呆がッ！」

そう、最初から避けられるのは分っていた。

だが『避けられる』という結果が既に分っているならば、その結果に至るまでの過程を操作し推測する事もある程度は可能。

結果はギルガメッシュの計画通り。

攻撃が通用せず、右から迫り来る薙刀を避ける為にランサーがとった行動、それは後方への跳躍。

そして『跳躍する』という未来が既知のものなら、罠を仕掛けるのも容易。

「それは、おいおいこれ全部が宝具かよ！」

ギルガメッシュの背後に並ぶ宝具、総勢約六十。

現在の彼が使える、ほぼ全ての武具達である。

それを彼は—————

「死ね」

微塵の容赦なく解き放った。

迫る魔弾。

単なる投擲武器ならば問題はない、ランサーのスキルである矢避け

の加護は、目に見える範囲の投擲攻撃であるなら、余程のレベルでない限り無力化する。

だがギルガメッシュの投擲は”余程の攻撃”であった。

六十の魔弾は全て宝具。

何個かはランクが低く、大した問題じゃない物もあるが、それでもこの数は英霊でも回避不可能の攻撃であった。

そう、ランサーが並みの英霊ならば。

「はっはア！やるじゃねえか金ピカ！

だが俺もこの程度で殺られるほどやわじゃねえんだよッ！」

並みの英霊、そんなわけがない。

この場にいるのはアイルランドの光の御子。

克蘭の猛犬と畏れられ、そして数多の戦場を生き残ってきた半神半人にして最高の英霊。

そんな男が、たかだが宝具六十の魔弾に襲われた程度で死ぬか？

答えは否だ。

高速で飛来する魔弾、その全ての軌道を予測、自分に当たらない物は放っておき、避けられる限界までは避ける、そして残りは全て――

叩き落とすッ！

「馬鹿、な――――」

パラパラパラ、やがて攻撃が止む。

どんな人間でも回避不能の場所に居た男は――――平然と何事もなかったように立っていた。

いや、何事もなくはない。

脇腹の辺りから血が流れている。
どうやら回避出来なかった宝具が掠めたらしい。

「さて、準備運動はここまでだ————」

瞬間、空気が凍った。

ランサーの握る槍から発する邪悪な気配。
宝具が解き放たれようとしている。

「いかん！」

急いで蔵かた何かを取り出そうとするギルガメッシュ。
しかしそんな彼をランサーは待つてはくれない。

「その心臓、貰い受ける！」

「貴様にくれてやる心臓などないわ！」

自らの前に巨大な盾を構える。

盾から発する魔力は並大抵のレベルじゃない。
ずっしりとした重量感からは、確かな信頼感があつた。

「刺^{ゲイ}し穿つ————」

大気な魔力^{マナ}が収束し
そして一気に放たれた。

「————死棘^{ボルク}の槍！」

槍の軌道を遮るのは一つの盾。
Aランク相当はあるその盾は、バーサーカーの攻撃であろうと防ぐ事を可能とするだろう。

「よしッ！」

防いだ、とギルガメッシュは確信する。

槍は真っ直ぐ解き放たれている、そしてその先にあるのはバーサーカーの肉体よりも硬い盾。

ランサーの槍が直線で放たれた以上、この盾に阻まれるのは必然なのだ。

「なに――？」

だが畏れるが良い、偽りの英雄王。

成る程、間違いなく盾は槍の進行方向上にある。

この盾を突破するという『過程』を経ずして刺し穿つという『結果』はないであろう。

「――――があ……！」

有り得ない軌道を描いた槍は、黄金の鎧ごとギルガメッシュを貫いていた。

深紅の血液が黄金の鎧に一輪の花を咲かせる。

「馬鹿な……」

因果逆転、ゲイボルクは『過程』と『結果』を入れ替える呪われし槍。

真名を開放した時には、既に『心臓を貫く』という結果は終わっている。

だからこれは当然の結末。

結果が確定しているのだから過程は結果に従って姿を変えた。

槍が引き抜かれる。

すると黄金のサーヴァントは糸の切れた人形のように、ゆっくりと崩れ落ちた。

「さて、次はアンタだ————」

ギルガメッシュを倒したランサーが次に標的とするのは————。決まっている、バゼット・フラガ・マクレミツツしかない。

「え——————ギル……」

バゼットがギルという男の死を認識するまでに時間が掛かった。

言峰に殺されかけ、消え行く命を拾い上げた張本人にして、彼女が得た二人目のサーヴァント。

そんな存在が死んだ、いや殺されたのだ。

そして殺した男は、次は自分の命を刈り取らんとこちらに向かってくる。

男の目を見た。

そこには何もない。

ただ女魔術師を敵としか認識していないような目だ。

「嫌です！——私は、貴方と、戦いたくないッ！」

「そうか、なら抵抗せず死ね。
昔のよしみだ。苦しまず逝かせてやる」

（死ぬ、私が―――？）

二度目の死に直面して、バゼットが心の底から思ったのは、純粋な
生きたいという本能だった。

背水の陣、退路を断たれ絶体絶命の危機が訪れた人間は、僅かな活
路を求め嫌が応にも前進する。

バゼットは生への活路を求め敵意を出し―――そして再
び拳を下ろした。

「ああ？」

ランサーな怪訝な顔をする。

漸く戦う気になったバゼットに、ランサーも赤枝の騎士の礼儀とし
て全力をもって戦おうとしていたのに、そのバゼットが拳を下ろし
たのだから無理はない。

（たくツ、怖气ついたのか？）

そう思った時だった。

ランサーにも想定外のスピードで拳が迫った。

凄まじい反射神経で軌道を見切り避ける。

頬から一筋の血、どうやら避けきれなかったらしい。

「……せません」

「なに？」

「私は許せません……」

「まあそうだろうな。」

アンタを結果的には裏切っただけじゃなく、新しいサーヴァントまで俺が殺したんだ。

別に恨んでもらって構わねえよ」

「違います、貴方ではありません」

「俺じゃない？」

「はい……。私は私自身が許せない。」

貴方と戦うのを恐怖し、拒んでしまった私が……」

驚く。バゼットには今までにはない何かがあった。

そう、それは一つの決意。

「だからこそ、私は貴方を倒す。」

赤枝の騎士の末裔としてじゃない、貴方の元マスターだからでもない。

私は……ギルのマスターとして……仲間クー・フリーン、貴方を倒す！」

「……………」

ランサーは暫く呆然と、そう言ったバゼットを見ていたが、やがてもう堪らないというくらい大声で笑い始めた。

「はははははははははははははははッ！成る程、残念だぜ。」

つくづく女には縁がねえ、これ程の良い女をみすみす逃がしつちまうとはねえ。

だがいいぜ、きなバゼット」

その声が合図となった。

疾走するバゼット、迎えるはランサー。

先手はやはりバゼット。

時速100kはある右ストレートがランサーを襲う。

「ほう、俺と前に戦模擬戦ったした時よりいい動きじゃねえか」

「貴方に誉められるとは光栄です。

ですが微塵も手は抜きません！」

———強い、とんでもなく強い！

精神は僅かながらにでも肉体に影響する。

無論、これは魔術師の考えではない。

精神などが肉体という実体に影響などする筈がない、というのが魔術師の考え方だ。

だがそんなものは、本物の戦いを知らない学者の戯言に過ぎない。

精神の力はある。

挫折し、恐怖し、絶望を知ってなお歯を食いしばって立ち上がった者だけがその力を識る事が出来る！

旧知の人間からの裏切りという挫折を味わい、死という恐怖を味わい、ギルの死という絶望を知ってなお立ち上がったバゼットには、その力を得る資格があった！

「だが、まだ粗いな」

それでも、英霊という頂には届かない。

ランサーの回し蹴りが炸裂しバゼットは吹っ飛ばされる。

これは当然の結末だ。

ルーン魔術でも戦闘技術でも経験でも、何一つランサーを上回る事がないバゼットが、彼に敵う筈がないのだ。

「見事だ、まさかこの現世にアンタみてえな戦士がいるなんて思わなかった、が。」

運が悪かったな、バゼット」

令呪の縛りなど精神で捻じ伏せる。

最高の好敵手相手に手加減された一撃など失礼に値する。

自らの最高の一撃で目の前の女を殺す、それがランサーなりの礼儀であつた。

しかし、それは――――

後方から放たれた宝具によって妨害される。

「バゼット、下がれ！」

「ギル、貴方は――――！」

「いいから下がれ！」

ブローケン・ファンタズム

壊れた幻想により地面に突き刺さった宝具が爆発する。

幾ら矢避けの加護といえど、爆風を防ぐ事は出来ない。

ランサーは防ぐ事も出来ず吹き飛ばされた。

「ちっ、生きてやがったのか金ピカ！」

「フン！我は貴様とは違い運が良いのでな」

運が良い、という言葉でランサーは何故ギルガメッシュが生き
てゐるかを理解した。

ランサーの刺し穿つ死棘の槍を防ぐ方法は、幾つかある。
その一つが幸運だ。

ギルガメッシュの幸運はA

つまり刺し穿つ死棘の槍は”幸運”にもギルガメッシュの心臓から
外れたのだ。

「少し心配をかけたな、バゼット。

我とした事が少し眠っていたようだ」

「そんな事より、怪我は——」

「はっ！誰に物を言っている。

この程度のダメージなど問題ではない」

笑みさえ漏らしながら言う。

同時に今もなお、眼光はランサーを貫いていた。

「さてと、んじゃこれからもう一勝負、と言ってえが悪いな。

言峰の野郎は臆病で今直ぐ帰って来い、だよ」

「ほう逃げるのか、ランサー」

「追いたければ追って来てもいいぜ。

——ただし追いつければな」

ランサーは最後にそう言い残すと柳洞寺から去っていった。
追うつもりはない、なにせ二人ともランサーのスピードに追いつくことは出来ないのだから。

「……………」

「取り合えず終わりましたね」

「……………ああ」

「ギル？」

様子が可笑しい事に気付いたバゼットがギルガメッシュを見た。
目に付くのは黄金の鎧を流れる夥しい血液、そして汗。

「グッウガハッ！！」

「ギル！」

凄量の血を吐いたギルガメッシュに驚愕し、急いで駆け寄るバゼット。

ランサーの刺し穿つ死棘の槍はただ因果を逆転するだけの槍ではない。
ゲイボルグ

ギリギリで致命傷は免れたとはいえ必滅の黄薔薇程ではないが治癒不可の呪いもある。
ゲイ・ボウ

ランサーがいた時は強がっていたが、とうに限界など超えていたのだ。

最後にもう一度だけ血を吐くと、ギルガメッシュは意識を失った。

TURN10 (後書き)

主人公勢が大ピンチです…。

これでギルは一時的に戦線離脱、現状の戦力はダメツトさんだけの状況、おまけに拠点は変なオタク警官の住む家。

立派な日本邸宅に美少女二人+虎と一つ屋根の下である士郎とは大違いです。

それでは次回に…。

TURN 11

気に喰わない。

役立たずのライダーもそうだが、ライダーを倒した後に自分まで殺そうとしたセイバーにも腹が立つ。

それだけじゃない。

間桐の頭首である僕を差し置いて、よりにもよって衛宮なんかと一緒にいる遠坂にも腹が立つ！

「それで僕の部屋はどこだ？
さっさと案内しなよ」

「悪いが私には整理すべき書類が残っているのですね。
場所は案内するので君一人で行きたまえ」

返ってきた返事は拒否だった。
いけ好かない、何もかもが腹立たしい。

「は！？お前監督役だろ！
ならマスターを誠心誠意持て成すのが仕事じゃないか！」

「この教会の利用者は君が初めてだが、サーヴァントを失って尚も
その闘志。

流石は間桐の後継者という事かな」

「へ、へえ。分ってんじゃないか。
ならさっさと案内しろよ」

この神父———確か言峰綺礼だったか？———気に喰わない奴だ
と思っていたが案外見る目があるかもしれない。そう間桐の後継者
は僕なのだ。

断じてあの馬鹿な妹じゃない。

「いいだろう……と言いたい所だが君には一つ伝えねばならないこ
とがある」

「伝えねばならないこと？……なんだよそれ？」

「そう身構える必要はない。

ここは教会、君の敵はどこにもいないのだからね」

「……………」

慈愛に溢れた表情で語る神父に、少しだけ気おされる。

如何にも深刻な事を伝えるように思い口調で神父は語り始めた。

「先ずライダーはまだ生きている。

死んだように見えたのは間桐のご老人が、君の偽臣の書を燃やし間
桐桜の令呪を使って呼び戻したからだ」

「なっ！———お爺様がッ！

それに桜の！！」

「どうやら間桐臓硯は君ではなく間桐桜をマスターとする算段だ」

「ふざけるなッ！

馬鹿を言うなよ、僕が間桐の頭首なんだぞ！

それを差し置いて、桜がマスター？

チクシヨオ！」

有り得ない、間桐の後継者は僕以外の誰でもない！

僕は腰抜けの父とは違う、魔道を恐れ逃げたような腰抜けとは……。なのに桜がマスターだと！？

マスターを桜に変更する。

それは事実上、間桐の頭首は桜であると言ったようなものだ。

「僕が少しばかり優しくしてやったら付け上がりやがってえええ！あんな養子が後継者だって、違う僕だ！あんな間桐とは何の縁もない奴に！」

ひたすらに近くにあったイスを蹴る。

こんな事は無駄だと分っているが止める事は出来なかった。

「畜生！僕にもサーヴァントがいれば……」

今直ぐに桜をぶん殴りに行きたいが、今の桜にはライダーが付いている。

幾ら間桐の正統な後継者である僕でも、化け物であるサーヴァントが相手では戦えない。

「ほう、では君はサーヴァントさえ居れば戦う、そう言っているのかね」

「へ……あ、ああ！当然じゃないか！

サーヴァントさえ居れば何時でも戦ってやるさ！」

「そうか、それは良かった。

実は丁度手の空くサーヴァントがいてね：
「おや、丁度帰ってきたようだ」

教会の扉の方向を見ると、いた。
全体的に青い服装、そして紅の眼光。
そいつの姿には見覚えがあった。

「お前はランサー！」

言峰を見るが依然として表情は変わらない。

「喜べ少年。君の望みは漸く叶う」

思えば、この時からだったのかもしれない。
僕にとっての聖杯戦争の開幕は…。

黄金の魂に導かれし靈魂 第11話

ギルが深手を負った。

これは私の責任だろう。私がランサーと向き合えていればこんな事にはならなかったかもしれない。

とは言っても、何時までもこんな場所にいる訳にもいかない。
木の陰に隠れていた使い魔を排除すると、ギルを背負う。

鎧を装備しているギルは少しばかり重いが、この程度ならアフガンで戦った重力を扱う魔術師の重圧に比べれば大した事はない。

問題は人の目だ。

ギルは通常のサーヴァントと違って受肉しているので、霊体化は不可能。

せめて鎧さえ外せば目立たずに運ぶ方法もあるのだが……

「余り時間を掛ければアーチャーやセイバーが戻ってくるかもしれない。止むを得ないか……」

覚悟を決める。

拠点である松田邸は柳洞寺から遠くないし、幸い今は深夜。

人目はかなり少ないだろう。

脚に強化のルーンを刻む。

そして、そのまま全力で疾走した。

「ここは………帰っていたのか」

目を覚ましたら、拠点とした松田邸だった。

どうやらランサーの攻撃により俺は気絶していたらしい。

「ヌツ…！」

体を起こそうとすると骨を直接ぶん殴られたような痛みが走る。

それはそうだ、俺の心臓の辺りを見たら穴が空いていた。

魔術によって治療されてはいるが、それでも宝具によるダメージだ。セイバーのように精霊の加護を受けてはいない俺では、治癒に時間が必要だろう。

「意識が戻りましたか」

うん？バゼットか。

見た目に外傷はないので、どうやらこいつも無事らしい。

「我とした事が油断した。

ランサーのゲイボルクの効果を見誤るとは…。

いやしかし、奴の槍は既に原典を上回っている。

流石は克蘭の猛犬ということ、か…」

「駄目です、起き上がっては！

応急処置はしましたが、まだダメージは残っている筈です！」

「しかしだな……」

「駄目です、貴方がそんな状態では今後の戦いにも支障が出ます。少なくとも今日一日は休んでください！」

「そ、そうか？」

「そうです！」

かなり強く言ってくるバゼット。

まあ一理ある。

疲れた時は眠るのが一番だ。

こうして見ると、とてもサーヴァントには見えない。
無防備な寝顔からはリズムよく吐息が聞こえてくる。

「しかし、こうして見ると本当に唯の人間みたいですわね」

ツンツン、と頬を突いてみる。

少し顔を歪めたが起きる様子はない、完全に熟睡しているようだ。

なんだか面白いですね……。。

私とした事が、突つついた時のギルの反応が面白くて、つい悪乗りしてしまった。

鼻の頭を突つくと、ギルは先程よりも反応する。

つついているとギルが私の指を咥えた。

「ッ！」

ど、どうでしょう！

強引振り払う訳にもいきませんし……。！

や、やめて下さい、もにゅもにゅしないで下さいー！

ひ、酷い目にありました。

バゼット・フラガ・マクレミッツ一生の不覚…！

そういえば昨日のお昼から何も食べていませんね。

家主の松田はどうやら居ないようですし……仕方ありません。

私が作ると思いますか…。

冷蔵庫の中を確認。

どうやら松田という男は、意外にも料理が出来るようだ。

より取り見取りの食材の数々が並べられている。

何故か物凄く負けた気がするのは何故でしょう…。

さてとこれだけ食材が在れば大丈夫でしょう。

妙な臭いがしてギルは目覚めた。

時計を見ると午後の四時。

傷はまだ痛むが、なんとか体を起こした。

「ギル、丁度良かった。

今食事が出来た所です」

「なに？ 食事だと」

お盆に載っていたのは意外にも極普通のカレーだった。

何故か脳裏に、変なシスターの姿が浮かんだが気のせいだろう。

「お前が作ったのか？」

「ええ、慣れない作業だったので少し時間が掛かりましたが味は問

題ない筈です」

「そうか、では頂くとしよう」

口に入れた瞬間、濃厚な甘味が広がった。

そしてその甘味を包むように刺激的な辛さと混ざり合い絶妙な……
：不味さを構築していた。

はっきり言って今直ぐにでも吐き出したいような味だ。

こんな時の選択肢は三つ。

？美味しいふりをする

？やんわりと誤魔化す

？相手にも勧める

ギルの選んだ選択肢は………

「こんな飯が食えるか————ッ！」

どれでもなかった。

「な、何をするのですか！」

この食事を造るのに何時間掛かったと思っているんですか」

「阿呆か！これが食事だと？」

なら聞くがこれは何だ！何故カレーにまな板の欠片が入っている！」

「そ、それは………」

大丈夫です、力強く噛めばしっかり食べれます」

「ええい！だからお前はアホなのだ！

これが料理だというなら、生ゴミですら料理になるわ！

そもそも、カレーをどうやったら、これ程までに不味く作れる！

一回自分で食してみよ！」

「何を言うのです。

味見もしないで他人に料理を出すほど私は無神経ではありません。
しっかり自分の舌で確認しました！」

「確認した？これとか？」

「はい」

その時、ギルガメッシュは一つの悲しい真実に気付いてしまった。
別にバゼットに悪意があった訳でも、味見をせずに出した訳でもない。

そう、バゼットは日常生活においてトンでもなく駄目だったのだ……

「仕方ない、おいバゼット」

「へっ、これは……」

ギルが放り投げたのは何処に持っていたのか、カップラーメンだった。

どうやら王の財宝に入れておいたらしい。

「これにお湯を入れて三分間。

後は任せた」

「ぎ、ギル！この料理は……」

「お前は問題なく喰えるのであろう。
自分の汚点は自分でなんとかしろ」

バゼットが文句を言うが、全て無視する。
数分も経つとバゼットも諦めラーメンを作りにいった。

「とんでもない目に合った」

再び横になる。

もし王の財宝の中に、バゼットを治療した時のような霊薬でもあれば問題ないのだが、不運にもあれ以外に使用可能となった霊薬はない。

気長に傷が癒えるのを待つか、霊薬などの宝具が使えるようになるのを待つしかないだろう。

「これで残るサーヴァントはアサシンとキャスターを除いて五人、いや我を含めれば六人か。

しかしライダーを追っていったセイバーが気になる。

あの女がそう簡単にやられるとは思えん、ライダーが敗退したか否か……それが気になる」

「ギル、出来ましたよ」

「ん？…そうか」

バゼットもカッププレーメンを失敗するという事はなかったようだ。
そう、今は休んだ方がいい。
これは一時の休息。

今日一日ぐらい、こんな日があってもいい。

TURN 12

「問おう。貴方が、私のマスターか」

時間が止まった。

恐らくは一秒としてなかった光景。

だけど、

例えこの身が地獄に落ちようとも、鮮明に思い返すことができる。

全てはこの言葉より始まりし物語。

ならばこの戦いは運命の序章に過ぎない。

神話でもなく戦乱の時代でもなく。

この現世に蘇った英雄譚。

その男は『正義の味方』を目指した。

半数以上の男子が幼き頃に夢に描き、そしてやがては忘却する夢。

奇跡というならば、彼がその夢を持ち続けたことが一つの奇跡だった。

人は変わる。

変わらざるを得ない。

六人もの人間を惨殺した殺人犯が、幼き頃には人々を救う医者を目指していたように…。

人は十数年の時間で容易く変貌する。

故にこれは奇跡であり悲劇。

その夢を早々に忘却していれば彼は幸福に生きられた。

平穏な日常、平穏な暮らし、平穏な生活。

平和という言葉は思ひ。

一つの国が平和を謳歌する間にも悲劇は廻り続ける。

彼の行動は単なる愚行。

人を救う事はあっただろう。

人を想う事もあっただろう。

それでも人は……愚かなる人は『正義の味方』の在り方を理解できない。

彼を理解できるのは、彼と同じような純真なる願いを持つ幼子か、彼を良く知る人間だけ。

それでも男の顔には笑顔があった。

笑えたのだ、まだ。

一人なら彼は笑えなかった。

だが居てくれたのだ。

彼の隣には常に一人の女がいた。

嗚呼、彼女の存在は例え無間地獄へと堕ち、焦熱で焼かれようとも忘れないだろう。

――――彼女に最大の感謝を。

黄金の魂に導かれし靈魂

第11話『英雄エミヤシロウ』

遠坂凜が朝目覚めると、瞳は濡れていた。
どうやら気付けば涙を流していたらしい。

「あいつ……」

夢で見たアイツ。
自分のサーヴァントであるアーチャー。

—————その真名が漸く分かった。

成る程、彼が記憶喪失と偽り誤魔化した理由も頷ける。
単純に未来の英霊というだけならまだしも、そんな事実が信じられる筈もない。

万が一、本当の目的に気付かれたら洒落にならない。

「あーもう！面倒くさい！」

若干、ネガティブになった頭をシェイクする。

こんな所でグダグダと悩むなんて性にあわない。

「アーチャー、いる？」

「起きて直ぐに呼び出しとは……珍しい事もある者だ。君が朝からこんなに元気とは、良い事でもあったのかね？」

「煩いわよ、アーチャー。っとそんな事より今から巡回に行くわよ」

「今から？気が早いな」

「いいでしょ。分かったならさっさと行くわよ」

ピシヤリ、と言い切るとアーチャーもそれ以上は言わなかった。

「ここまで来れば、いいか」

冬木中央公園、前回の聖杯戦争が終結した土地でもあり英霊○○○○が始まった場所。

余りにも人気のない伽藍堂。

死者達の怨念漂う一種の固有結界。

不気味な場所だが、誰にも聞かれないように話をする為には申し分ない。

「それで、私をここに連れてきて如何いうつもりだ？」

「あら、気付いてたの」

「当然だろう。巡回に行くと言っておきながら君は辺りを警戒するでもなく、ただこの場所を目指していた、違うかね」

「やっぱり腐っても英雄なのね、アンタって」

「お褒めに預かり光栄至極、と言える状況でもない。理由を説明してくれ」

凜が一回だけ深呼吸するとアーチャーに向き直る。

気付くと手の平は汗で濡れていた。

自分の中にある弱さが、別に言わなくてもいいじゃないかと誘惑する。

そうだ、別に何も言わなくていい。

言わなくても、また前と同じような日々が続くだけ…、何も変わらない。

――ドクンッ

頭をブンブン振るう。

駄目だ、言わなくてはならない。

一人だけ一方的に相手の大事な秘密を知っているというのはフェアじゃないし、なによりもそれが自分の役目だと、そう思ったから。

「私ね、昨日夢を見たわ。変な夢よ。」

最初はね、一人の女の子がいたのよ、滑らかな金の髪に翠色の瞳。女の私でも惚れちゃいそうな可愛い子」

アーチャーの目が見開いた。

今まで一度も目にした事が無い驚愕の表情。

「夢の中に出てくるソイツはね、本当に馬鹿だった。

大した力もないヘツポコの癖して、自分より他人の方が大切だなんて考えてた。

馬鹿よね、自分より見ず知らずの他人を優先するなんて、異常とか言いようがないわ」

「――――」

「本当に腹が立ったわよ！ソイツはね『どっかの誰かさん』がブン殴っても説教しても蹴り飛ばしても川に突き落としても、全く対価を得ようとも報酬を要求したりもしないし、ええ、勿体無くて涙が出てきたわ！」

でも、とそこで一つ区切る。

「私は何よりも不甲斐なく思ったのはソイツじゃなくて、ソイツが戦っているにも関わらず最初にくたばった『どっかの誰かさん』よ！」

その後は……ただひたすらの戦い。

男は最後の笑顔を失い、ただ一人だけで戦い続ける。

時には某国の独裁者を狙撃し、またある時には戦犯の汚名を着せられ殺されそうになった。

ブレーキを失った車は止まる事がない。

何度も何度も、気が遠くなるほど何度も男は殺し続けた。

僅かでも10を救う可能性があるならそれに賭け、可能性が0なら歯を食いしばって1を切り捨てる。

男に与えられたのは史上最悪の犯罪者という称号。

表からも裏からも下種、最低、悪魔と罵られ最期には名も知らぬ少女に毒を盛られて死んだ。

だが断言はしよう。

この男がいなければ、世界はもっと多くの人間を地獄の釜へと差し出していた。

しかし彼が人々に理解される事は唯の一度としてない。

その人生に意味があったのかも今となっては分からないが、その一生が決して幸せでなかったのは確かだろう。

「貴方の真名は—————」

「伏せろッ！」

ギイイイイン、鉄を弾くような音。

地面には数本のダーク。

聖杯戦争でこんな武器を使うサーヴァントといったら一人しかいない。

「アサシン暗殺者のサーヴァント！」

暗殺者の姿は見えなかった。

当然だ、魔術師程度に発見されるようなら暗殺者などとは名乗れない。

しかし、それは私だけのこと。

アーチャーはどうやらアサシンの居場所に見当が付いていたようだ。

「話は後だ、下がっている」

双剣を構えたアーチャーが凜の前に立つ。

鷹のような眼光は、常にダークの飛んできた方向を凝視している。

木の陰から数本のダークが飛来した。

単純な投擲だが、それ等は全て計算された攻撃。

右に避けようと左に避けようと……何処へ避けようともダークはアーチャーを逃がすことはないだろう。

だが避けられないならば叩き落せばいい。

ランサーのような矢避けの加護は持たないが、それでも幾たびの戦場を越えてきた英霊なのだ。

この程度のダークを叩き落すなど造作もない。

――瞬間、空気が凍った。

「これ……なんなの？」

凜が普段からは想像も付かないほど弱気な声で呟く。

突然そこに現れた物は明らかに異様だった。

一言で言い表すのならば黒い影。

だが分かる、生命にとって良くない、ただ喰らうだけの存在だ。

「止むを得んな。凜この場は一旦退くぞ！
戦うにしても不確定要素が多すぎる」

「同感ね、それじゃ私が——ッ！」

瞬時に反応したアーチャーが、凜に迫った短刀を叩き落した。
アサシンのダークとも違う鎖に繋がれた短刀、ライダーのものだ。

「チッ！セイバーめ、仕留め損なったか！」

それだけじゃない。

今のライダーは強かった。

大体のステータスがワンランクほど上昇している。

（不味い宝具を使うか……？

いや詠唱に時間が掛かりすぎる、ならばッ！）

「I am ^{体は}the ^{剣で}bone of ^{できて}my ^{いる}sword」

手に出現したのは、彼女の剣。

選定の剣の贋作、だが内包する魔力は本物と見劣りしない。

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想」

爆散する選定の剣。

内包された神秘に比例した大爆発が公園中を包み込んだ。

流石にライダーとアサシンを倒すまでには至らないが、それでも目を晦ます事には成功した。

時刻は朝の七時。この公園の外では既に通勤中のサラリーマンや散

歩してる老人などがいるだろう。

幾らなんでも人気のある場所ではサーヴァントは戦闘が出来ない。なにせサーヴァントは兎も角としてマスターは魔術師。

魔術師ならば神秘の秘匿は絶対、故にそのような行いは不可能だ。

「だからこそ、もう終わりですよアーチャー」

「貴様、キャスター！」

アーチャーは動けない。

黒化したキャスターは妖しく虹色に光る短剣を凜の首筋に当てていたのだから。

（やらかしたわ……私の馬鹿！）

心の中で凜は自分の不甲斐なさを呪う。

ライダーのアサシンの目を晦ませたと思い、油断したのが不味かった。

結果的に何故か生存しているキャスターに、人質のような扱いをされている。

（でも、これなら……）

凜は気付いた、いや気付いてしまった。

自分の腕には未使用の令呪が二つある。

サーヴァントに対する絶対命令権、これがあるからこそサーヴァン

トはマスターに従うと言っても過言ではない。同時にサーヴァントの能力を一時的に増加する事も出来る、最後の切り札。

アーチャーに『自分を助ける』と命令すれば、白兵戦は不得手のキヤスターだ、間に合うだろう。

だけどそれは……………。

（キヤスターの隣にいる黒いの。

こいつに捕まればアーチャーも…）

つまりアーチャーの命を選ぶか自分の命を選ぶかの二者択一。

アーチャーを選べば、自分が生還する確率はかなり低くなるだろう。

（……悩むまでもない選択ね。何所の世界にサーヴァントの為に自分を犠牲にするような馬鹿がいるってのよ）

そう考えて、同盟相手の少年を思い出して苦笑してしまう。

自分は魔術師、根源に至り遠坂を次の代に受け継がせる義務がある。ここで死ぬ訳にはいけない。

「アーチャー、令呪を持って命じるわ」

「アーチャー、令呪を持って命じるわ」

凜の声はアーチャーの耳にも鮮明に届いていた。

令呪を使うであろう事は、容易く理解出来た。

この状況を打破するには、令呪の力を使うのが唯一の突破口。
その場合、自分はあの黒い泥に取り込まれてしまう羽目になるだろうが…。

（不思議だな、それも構わんと思うとは…）

そう、これでいい。

どうせこの時代の衛宮士郎を殺した所で本当に自分の抹殺を出来るかなど分らない。

それに自分が愚かな事をしているという実感もある。

一度は完全否定した男と同じ道を歩もうとしているなど、愚かとした言いようがない。

ならばこれは自分にとっては出来すぎた結末。

自分勝手な理想に一人の女を巻き込んでしまった罰。

「幸せになりなさい！」

「なっ!？」

何を言われたか理解出来ない。

彼女は何と言ったのだ？

「たっく私も馬鹿ね。士郎のアレが映ったのかしら」

「冗談を言っている場合か！いいから手を伸ばせ！」

「最後の令呪で命じるわ、逃げなさい。

逃げて、幸せに生きなさい」

令呪の強制によりアーチャーは自らの意思とは関係なく敗走する。
最後に少しでも見た凛の表情は……優しげな、母のような笑顔だった。

TURN 12 (後書き)

ずっとアーチャーのターン。

主人公勢は影も形もないという……。

TURN 13

「フィィィィィッシュ！」

海辺で奇声を上げながら、魚釣りに勤しむのは、赤い弓兵：ではなく先日言峰によってランサーの仮マスター（本人は仮だと気付いていない）になった間桐慎二だ。

「H A H A、どうしたんだい、ランサー。」

どうやら少し調子が悪いようだけど。

おっと、そんな事を言ってる間にもフィィィィィッシュ！」

「うるせえ！この近代かぶれ！」

テメエとようなりールじゃねえんだぞ、こっちは！

魚が逃げっちまうだろうが！」

「負け惜しみかい、ランサー。」

自分の無能さを道具のせいにするだなんて、随分と英霊っぽくないじゃないか。

そんなに自分の無能さが恨めしいんなら、君もリールに代えたらどうだい？

尤も、古代人の君にエレガントなりール釣りが理解出来とは思わないけどね！」

慎二が喧しい笑い声を上げる。

それにしても港にはランサーと慎二の二人しかいないというのに、何故か祭りの中にもいるかのような騒がしさがある。

そういう場を沸かせるという意味では、慎二にも才能があるのかもしれない。

「つていうか、そいつはテメエの力じゃなくて殆ど機械の力じゃねえか！」

ランサーの言うとおり、慎二の使うリールは最新技術の結晶。

十六個のボールベアリングによるブレなしガタなし、おまけに電動操作の高速巻上げ式である。

ぶっちゃけデータさえ入力しておけば、後は全てリールがやってくれるという、釣りをしに来たのか、機械の調子を確かめに来たのか分からないような一品だ。

しかし流石のクランの猛犬の野生の感も、最新技術の前に藻屑と消えたという事か…。

そう考えると、妙に悲しいものである。

「たっく、こんな事なら釣りになんて誘わなきゃ良かった…。」

ガックリと項垂れるランサー。

そう、何を隠そう慎二を釣りに誘ったのはランサー自身なのだ！

話は数時間前まで遡る。

しぶしぶ慎二を仮の主とする事を了承し、新たなる拠点として用意されたホテルに向かったのはいいのだが、暇だったのだ。

言峰が慎二にランサーを与えるための条件として提示したのは三つ。

？ 間桐家の人間とは手を組まない

？ 聖杯戦争の間は間桐邸に帰ってはならない

？ 間桐臓硯を殺して欲しい

元々、自分をマスターから外し、恨んでいた慎二にとって特に拒否する理由もない条件だった。

この条件を呑んだ慎二は、言峰より与えられたホテルへと向かい、一先ずの休息を得ていた。

何かやる事はないか、と思ってもランサーは他のサーヴァントの情報をほぼ持っていたし、ライダーのように慎二本人が魔力を提供しなくても、言峰が供給しているため一般人から魔力を奪う必要もない。

ライダーのように一回で大勢の人間から魔力を奪う方法があるなら別なのだが、対人戦に特化した彼に、それ程の大魔術は行使不能だ。

尤も『一般人から魔力を奪え』などという命令自体、ランサーは絶対に実行しようとはしないだろうが。

令呪のない慎二では、ランサーに命令を強要する事は出来ない。

そして第二の問題が発生した。

暇なのだ、慎二本人も今更学校になど行く気もないし、慎二も馬鹿じゃない。

化け物のような強さを誇り最強だと思っていたライダーは、セイバーの前にあっさりと敗れ去った。

ランサーはセイバーと同じ三騎士の一角だが、あちらにはセイバーだけではなく凜のアーチャーも付いている。真っ向から挑むなんて愚の骨頂。

故に慎二は一先ず静観に徹する事にした。

特にやる事もないし、他の奴等が勝手に消えていく様を笑いながら見物しよう、という魂胆である。

だが、ここで第三の問題が発生する。

それはランサーというサーヴァントが、かなりフリーダムな性格だったという事だ。

あの言峰から一時とはいえ開放されたのが嬉しかったのか、慎二の隠して持っていたエロ本を見つけてニヤニヤしたり、TVのお笑い番組を見て大爆笑したり、いつの間にか仲良くなった酒場のおっちゃんから、酒を貰って騒いだり……、最初は勝手な行動ばかりするランサーにイラついていた慎二だが、ランサーに勧められるがまま酒を飲んでいる内に、一緒になって騒ぎ始めたのだ。

そして今日、ランサーは趣味である釣りに行く際に、何気なく慎二にも声を掛けた。

特に理由はない。強いて言うなら流石にサーヴァントがマスターから離れすぎるのも如何かと思ったからである。
その結果がこれだ。

「フイイイイイッシュ！」

どうだ、これで二十四匹目だ、おやおやランサー、君のバケツはどうやら数匹しかないようだけど、体調でも悪いのかい？」

「だーっ！ ウッセェ！」

どうやら今日の夕食は魚料理になりそうだった。

黄金の魂に導かれし靈魂

第13話『理想と現実と欲望』

———ポタポタポタ。

雨が降り始めたようだ。

太陽は雨雲に隠れ、天から雨水が降り注ぐ。

生命に恵みを与え、汚れを洗い流してくれる雨だが”彼”の精神は
洗い流せてはいなかった。

一人だけポツンと誰も居ない木の中で佇む男。
赤い外套を纏ったアーチャーである。

「—————」

絶望もない。

怒りもない。

憤りもない。

嘆きもない。

マスターが連れ去られたというのに、彼の心は伽藍堂。
空っぽである。

———守れなかった。

アーチャーは漸くその答えを認めた。

彼の無表情に再び表情が戻ってくる。

無論、それは喜びではない。

深い絶望と、自分への憎悪だ。

生前、彼は遠坂凜を守れなかった。

否、自分の理想に彼女を巻き込み、そして殺した。
手を掛けたのは自分ではないが、自分の理想が殺したも同然だ。

「俺は————ッ！」

何をやっている？

自問するが答えは出ない。

英霊エミヤの目的は一つ、自分自身を己の手による抹殺だった筈だ。
自分殺しという最大の矛盾は、英霊の座にいる本体をも或いは消滅
させるかもしれない。

守護者という呪縛から逃れたいならば、今直ぐにでも衛宮邸に行き、
そして殺せばいいだけだ。

幸いにして凜と過去士郎の自分は協力関係にあったので、怪しまれず近
付き殺すのは容易だろう。

そうすればいい『幸せになれ』という凜の令呪とも、この行いは一
致する。

何故ならば完全なる死こそが、自分の幸せなのだから。

「君は、怒るかもな」

だが、それは無理だろう。

既に理想など完全に捨て去った筈だが、それでもまだ捨ててなかつ
た物があつたようだ。

自分の命より他人の命が大切だなんて間違っている、そう自分に言
ったのは誰だったか。

嗚呼、確かに自分という存在は愚かだ。

漸く自分を守護者という呪縛から解き放つ機会を得たというのに、
それを他者の為に使おうとしている。

「俺一人では、戦力が足りん！」

自分は既に凜というマスターを失い孤立無援。

幸い凜が捕まった直前に令呪を使い切ってくれたお陰で、何故か生存しているキャスターに自らが操られるという事はないだろう。

しかし敵には、キャスター、ライダー、アサシンという三人のサーヴァントがいる。

せめて二体ならば宝具を使って、誤魔化せたかもしれないが、流石に三体を同時に相手するなど不可能だ。どうしても戦力がいる。

「やはり、セイバーの助力を得るのが無難か」

ランサーは記憶が正しければ言峰のサーヴァントなので除外、ギルガメッシュは論外、一瞬だけバーサーカーとそのマスターである少女が頭に浮かんだが、即座に否定する。

自分に彼女を頼る資格はない。

となると、残るのはセイバーしかない。

彼女とそのマスターである男ならば、間違いなく遠坂を救う為に動くと予測出来るし、それにセイバーがいれば三体のサーヴァント相手だろうと戦える自信がある。

しかし、それでも確実に遠坂凜を助けられるかと言えば、ウンとは言えない。

もう一人、もう一人だけでも最低限度の戦闘が可能な者が欲しい。

「はあ、俺も随分と馬鹿なものだ」

やる事は決まった。

後はもう、駆け抜けるのみ。

英霊エミヤは一人、衛宮邸へと跳躍した。

「アーチャー！何所へ行ってたんだ！
それと遠坂はどうしたんだ？」

帰ってきて早々に、衛宮士郎がアーチャーに言った。
その声を聞いたのかセイバーが急いで駆け寄ってくる。

どうやら朝起きて自分と凜がいないのに気付き、家中を探し回った
ようだ。

だが今は流暢に世間話に興じる余裕などない。

「凜が……浚われた」

「「なっ！」」

「それはどういう事なんですか、アーチャー！
凜が浚われたとは！？」

「言葉通りの意味だ。」

私と凜は巡回中にアサシンと何故か未だに現界していたキャスター
とライダーに襲撃され凜を奪われてしまった。情けない話だ」

「キャスターとライダーが！？」
馬鹿な、二人は確かに倒した筈……」

「ライダーに関しては分からん。
だがキャスターに関しては……あれは黒化だな」

「黒化？、なんだよそれは？」

「私もその手の専門ではないので詳しい説明は出来ないが……。単純に言えば、魂が汚染された事で性質が反転し、より悪としての方向に傾くという事だ。

それにキャスターは完全に受肉していた、もしやとは思うが此度の聖杯戦争、どうもきな臭い方向へと進んできたようだ」

「よく分からないけど、それでキャスターはどうして黒化したんだ？サーヴァントが負けたら消えるだけじゃないのか？」

「推測だが、キャスターの近くに黒い影のような物があつた。あれは清純な英霊、特にセイバー、君のような存在にとっては天敵だ。

触れただけで、サーヴァントは問答無用に吸収されキャスターと同じ末路をたどる事になるだろう」

「黒化の事は……正直に言うともまだ分からないけど、そんな事より遠坂はどこに連れて行かれたんだ！早く助けに行かないと……」

「ほう、私は君達に俺のマスターを救助する”お願い”に来たのだが、それは不要のようだな。
だが礼は言おう。正直私一人で凜を救出する事は出来ない」

「むっ……。」

アーチャーに礼を言われたのが、よっぽど複雑だったのか士郎が変な顔をする。

アーチャーはそんな士郎を見て思わず苦笑してしまいそうになった。忌々しいがこの時ばかりは、衛宮士郎の異常に救われたようだ。

「それで居場所は分かっているのですか？」

「既に大まかな場所は特定してある。

敵も随分と些細なミスをしたものだ。

契約破りを持っていながら、それを拠点に着くまで使わず、結果として凜の視界から奴等の居場所を特定する事が出来たのだからな」

「それで、そこは何処なんですか？」

「柳洞寺だ。一度は崩壊しかけた神殿を再構築して立て籠もったようだ。

警備にしてもライダーとアサシンがいるぶん、前回とは比べ物にならないだろう」

「それじゃあ、今直ぐにでも助け——ッ！」

士郎が駆け出そうとした時だった。

何か鉄の塊が彼の直ぐ前を通過する。

「アーチャー、お前なにを……？」

「まさか、敵の間者だったのか、アーチャー！」

士郎に攻撃したのは……アーチャーだった。

両手に夫婦剣を持ち、鷹のような眼光で士郎を睨んでいる。

マスターを威嚇とはいえ攻撃されたせいで、セイバーはアーチャーの指の動きすら見逃さないように、睨みつけていた。

「小僧、はっきり言ってやる。」

今の貴様では到底戦力にならん。」

「いきなり何を！」

「事実だ、認めろ。」

ライダー、キャスター、アサシンの三体のサーヴァントだけならば私とセイバーでどうにかなっただろうが、正体不明の影の存在がある。

戦力はどれほど頼りないとしても惜しい」

「何が言いたいんだ！」

「なに、他愛ない事さ。」

衛宮士郎、お前は強くなりたいか？」

「————ッ！」

「呆けるな、単刀直入に言おう。」

強くなりたいならば、俺が貴様を鍛えてやる。

本来、一朝一夕に強くなるなど有り得んが、貴様と俺の場合は特例が存在する」

この時、士郎は直感的に理解してしまった。

こいつに……アーチャーに鍛えられたなら、確実に自分は大きく成長できるだろうと。

————ドクンッ

動悸が早まる。

これは選択の時だ。

アーチャーの言葉には、妙な信頼性がある。

確かに相容れない相手ではあるが、今なによりも優先すべきなのは、下らないイザコザではなく遠坂の救助、ならば力が欲しいか、との問いかけをしてきたアーチャーの提案を断る事は……出来ない。

「分かった、お前に鍛えてもらう」

「シロウ！」

「大丈夫だ、セイバー。」

俺にも良く分からないけど、今はアーチャーは俺たちに危害を加える事はない。

だけど鍛えるったってどうするんだ、あんまり時間は掛けられないぞ。

早く遠坂を助けに行かなくちゃならない」

「無論だ、元より時間など掛ける気はない。

————付いて来れなければ、死ぬかもしれないぞ」

それはアーチャーなりの最後通牒だろう。

冗談で言っているのではない。

本当に、少しでも気を抜けば死ぬかもしれないとアーチャーは言っているのだ。

「望むところだ」

そう、今は力が必要だ。
遠坂を助けるための、力が――！

TURN 13 (後書き)

今回も主人公組みの出番は無し……。

まあ今現在はランサーにやられた傷の療養中のため仕方ないんですが…。

TURN 14

「如何した？」

何度目だろうか？

彼が地面に叩きつけられたのは。

「うるせえ」

何度目だろうか？

彼が尚も立ち上がったのは。

「まだだ！」

貴様の投影は基本骨子の想定が甘い。

それでは、そう容易く崩れ去る」

何度目だろうか？

彼の鍛えた剣が霞みとなるのは。

「^{トレース}投影、^{オン}開始」

そしてこれで何度目になるか分からない投影。

そしてこれで何度目になるか分からない消失。

「くそっ！」

打ち合う度に流れてくるアーチャーの記憶。

学園で

土蔵で

お寺で

洞窟で

そして戦場で

あらゆる場所で彼の者は剣を鍛える。

「投影、開始」

既に士郎も……そして傍らで見守るセイバーにも分かっていた。
アーチャーの真名がなんなのか。

そしてアーチャー。

彼もまた退くことができない。

このまま目の前にいる衛宮士郎を殺してしまえばどれだけ楽か。
打ち合いの中で、何度も考えた。

しかし、それは出来ない。

何故ならば————この身は一つの後悔を残している。

生前、叶えられない望みが一つだけあった。

嗚呼、確かに正義に味方にはなった。

しかし○○の味方にはなれなかった。

なる事ができなかった。

「未熟者が。何を履き違えている。

基本骨子だけではない、剣に秘められた概念、歴史、魔力、その全てを完璧にトレースしろ。

その程度の干将では、サーヴァント相手に三合と保たんッ！」

馬鹿げている。

恐らくアーチャーは衛宮士郎を殺そうとするだろう。

これは断定だ。

だが幸か不幸かアーチャーには、それ以上に優先すべき事柄がある。

士郎も理解していた。

これはほんの一時、遠坂凛という少女を助けるまでの共闘関係。

ことが終われば、自分達は互いに殺しあう運命であろう。

それでも今は、今だけは。

「お前は戦うものではない、造るものにすぎん。

余計な事は考えるな。イメージするのは――――」

――――常――――に”最強の自分”だ

黄金の魂に導かれし靈魂

第14話『廻る運命と罠』

「カッカッカッ、調子はどうかの？」

「……………」

イスに縛り付けられた少女は何も応えない。

ただ目の前の老人を睨み、威嚇するだけ。

このような状況にありながらも闘志は衰えていないのは流石と言
うべきか。

「しかし衛宮の子倅が未来の英霊とはもう。
世の中は分らんもの、そうは思わんか。
いやいや長生きはしてみるものよ」

————間桐臓硯、それが妖怪の名だった。

見た目は人間であるが、その中身は蟲。
夥しい蟲が寄り集まり構成された肉体、それが臓硯の正体だ。

「間桐のご老公が、まだ現役とはね。

父さんは老人の方は引退したって言ってたけど、まさかそんな方法で生き延びてたなんてね」

「カッカッカッ、時臣らしい。

彼奴は魔術師としては完成されていたというに、どうも妙な所が抜けているの。

まあそのお陰で、ワシは誰にも警戒されず聖杯に近付くことが出来たのだが」

喧しい声。

老人の自慢話ほど面倒なものはないとも言うが。

間桐臓硯の話は、性根が腐りきっている為か、聞く度に虫唾が走るほど不愉快だった。

だがそれとは裏腹に、凜は決して臓硯の言葉を聞き逃したりはしない。

その一言一句を正確かつ素早く頭の筆筒に納めていく。

意外なヒントとは日常の中に潜むものだ。

年寄りの自慢話の中にも、もしかしたら起死回生のヒントがあるか

もしれない。

どれほど絶体絶命のピンチに陥ろうと決して諦めない。
それが遠坂凜の強さであり魅力であった。

しかし悲しいかな。

遠坂凜という少女は、同時に物事を正しく把握する事が出来る人間だ。

なので、どんな事をしても逃げる事など叶わない、ということも理解している。

仮に臓硯を殺そうとしても、背後にいるライダーが凜を殺すだろう。故にチェック、成す術などない。

「しかし、此度はワシも乾坤一擲。

我が人生を通して、かなりの大博打じゃった。

なにせ此度を傍観していれば、魔術協会から派遣された魔術師によって、聖杯戦争そのものが終結し兼ねんからのう。背水の陣を引いたせい、随分と事は上手くいった」

「へえー。じゃあ執行者の従えてるサーヴァントの正体も知ってるってこと？」

「当然じゃろう。歴代最強と評される執行者と最古の英雄王ギルガメッシュのペアでは、並大抵のことでは立ち向かえんだらうて。

それこそ手駒を多く揃え、何重にも張り巡らせた策を使わねばの」

（最古の英雄王！成る程ね。

宝具を馬鹿みたいに持ってたカラクリが分かったわ。

だけど、どうやって士郎とセイバーに伝えようかしら）

そう考えている時だった。

臓硯がなにやら、驚いたような反応をする。

「ふむふむ、カッカッカ。

遠坂の倅、どうやら助かる見込みが出てきたようだぞ」

「えっ」

「どうやら柳洞寺にセイバーとそのマスター、そしてアーチャーが
進入したようじゃ。

見事に”釣れた”かの」

「あんた、まさかその為に私を殺さずに」

臓硯はニヤリと笑うだけで応えない。

歯噛みするが、現実が変わる事がなかった。

恐らく臓硯の目的は、この柳洞寺に拠点を構える事などではない。
アーチャーとセイバーをキャスターと同じように黒化させ支配下に
おく、それこそが臓硯の目的なのだろう。都合五体、これだけいれ
ばバーサーカーもランサーも、そして黄金のサーヴァント、ギルガ
メッシュも敵ではない。

自分は三人を誘き寄せる餌に過ぎなかったのだと。

「さて、歓迎の準備じゃ。

では釣った魚を大人しくさせるとするか」

「気をつけろ。此処は相手のテリトリー。」

何処に罠があるか分からん」

対魔力があり、魔術的トラップが効かないセイバーが一番前を。その次をアーチャー、そして士郎が続くような形で階段を進む。

「まさか、二度も此処が戦場になるとは。リンも無事だよ良いのですが」

「ああ。遠坂のことだ。そう簡単に死ぬもんか！」

士郎はセイバーに言うが、本当は自分に向かって言った言葉であった。

敵の捕虜となった魔術師がどうなるか、想像するのは容易い。

その不安をなんとか、一縷の希望に縋る事で空気を保っている。

「ムッ————これはッ！

いかん、離れろ！」

アーチャーが士郎を突き飛ばす、と次の瞬間にアーチャーの姿は跡形も無く消え去った。

階段に設置されていたトラップ、強制転移。

妙手だ。これならば対魔力のあるセイバーを孤立させる事が出来る。

アーチャーの咄嗟の判断がなければ士郎とアーチャー二人が、セイバーから引き離されていただろう。

「…、不覚でした。まさか転移魔術をトラップとして利用してくるとは！」

「ああ。だけど今はそんなこと気にしてもしょうがないだろ。

早く遠坂を助けに行かないと…」

「はい。ですが————」

セイバーが階段を見上げると、そこには骨の兵士達の群れ。その頂点には騎乗兵のサーヴァントが何食わぬ顔で立っている。

「くそっ！こいつらを倒さないと先に勧めないってことか！」

骨の兵士だけなら兎も角、サーヴァントであるライダーもいる。掃討には少し時間が掛かってしまうだろう。それでも———。

「行くぞ、セイバー！」

「はい、押し通します！」

引く理由も立ち止まる理由もない。
二人は骨の軍勢に向かって駆け出した。

「ここは………」

アーチャーが送られたのは意外な事に、柳洞寺の前だった。途方も無く遠い場所に飛ばされることも覚悟していたので、少し拍子抜けである。

「カッカッカッ、よく来たのアーチャー。」

「——いや、エミヤシロウと呼んだ方がいいかの？」

「貴様ッ——！」

そうか、凜の記憶を見たという訳か。

いや、私の事は如何でもいい。

遠坂は何処にいる？返事次第では命は無いと思え」

「ここにおるよ、ほれ」

臓硯が合図をすると、イスに縛られた凜が現れる。

出現の仕方からしてキャスターの魔術だろう。

「~~~~ッ！~~~~~~~~！」

「無事だったか……」

縛られてなお凜は、アーチャーに文句を言おうと口をもごもごする。口は塞がれているため声は出ないが、長年の付き合いからアーチャーには、凜が言っている事の内容は予想できた。

「いや、君の令呪には従っている。

私は私の幸せのために此処に来た」

アーチャーは進む。

凜の元へ。

「キャスター」

臓硯が一声上げると魔術師のサーヴァントが現れる。
黒化されているせいだろうか。

その顔に生氣はない。

あるのはマスターの言う事だけに従う人形としての機能だけだ。

そしてキャスターの隣には、公園の時にもいた黒い影。

あれはサーヴァントの天敵だ。

清純な英霊ではないアーチャーでも、直接触れれば吸収されるのは拒めない。

「しかし以外と言えば以外。

後学の為に聞くが、何故お主は嘗ての自分を殺さずに此処にきた。よもや、再び正義の味方などになるつもりかの？」

「正義の味方？…笑わせるな。

昔は知らんが、今の俺は断じてそんなものではない」

Unaware of loss.

ただ一度の敗走もなく

Nor aware of gain

ただ一度の勝利もなし

だが、この身は一つの後悔を残している。

そう、だからこそ———

「俺は、遠坂の味方だ！」

今こそ、生前に抱いた最後の未練を払おう。

どうしても救いたい人がいた。

何故ならばこの身は彼女の剣。

故に彼は駆ける。

この身は唯一人遠坂凜の味方。

ならば彼女を害するモノの悉くを討ち滅ぼそう。

英霊エミヤの衛宮士郎として最後の戦いが始まった。

TURN 14 (後書き)

主人公の出番が(泣)

ですがこの話が終われば、後は主人公サイドオンリーで進めるはず？

ちなみに、もはや大抵の方が気付いていると思いますが、このアーチャーは原作 Fate のアーチャーではなく UBW ルート後の士郎です。

UBW ルート後、最悪のバッドエンドを迎えてしまった士郎、そう考えて頂ければ十分です。では次回に……。

TURN 15

ガアアアアン、そんな金属音が柳洞寺に響き渡った。といっても、単なる鉄と鉄とがぶつかる音ではない。

凶器と凶器がぶつかり合う狂気の音だ。

アーチャーの双剣が奔る。

迎え撃つは鎖付き短剣。

だが遅い。

ライダーは正規のマスターに戻った事により大方のパラメーターが上昇している。

しかし、それでも尚アーチャーの気迫は、その悉くを破る。

「ぎゅ、彼の魔物は姉達を守る為に、島に入った侵入者を打ち払ってきたと言うが、成る程、大した腕前じゃないか、ライダー」

「随分と余裕なのですね、アーチャー」

「余裕？……そうだな。

奇妙な事だが、何故だか今なら相手が誰であろうと負ける気はしない。

生前感じた事のない気分だな」

蛇のような動きで絡みつく鎖を払う。

だがライダーもさるもの。

器用に鎖を双剣に巻きつけると引き上げた。

筋力でライダーに劣るアーチャー。

容赦ないライダーのパワーは、あっさりとアーチャーから武器を取

り上げた。

だが彼女は勘違いをしている。
元より彼は戦うものではない、作る者に過ぎない。
故に彼が行うのは戦いではなく、

「投影開始」

再び握られる双剣。

それはさっきまでアーチャーが手にしていたものと大差ない。

「同じ武器を取り出した？

それが貴方の宝具ですか？」

「ほう、間桐臓硯から聞いていないのか？

なら構わん、好きに勘違いしていろ」

自分の立ち居地と相手の立ち居地を見比べる。

これならば………或いは。

「投影、開始ッ！」

自身の心象に刻まれし設計図を引っ張り出す。

丁寧かつ高速に、それでいて完璧、本物すら凌駕する勢いで。

魔術回路が唸りを上げ、総勢20の剣を同時投影。

狙う先は既に決まっている。

「ッ————！！」

本当に何者ですか？

何度弾き飛ばしても取り出される双剣、それに展開された宝具。

これ程の数の宝具を持っている英霊など……」

「無駄口はそこまでにしておくのだな、騎乗兵。」

「いけ」

短い号令。

それで十分。

アーチャーの周囲に浮かぶ剣達は、一斉にライダーへと向かう。その様は、成る程、弓兵の名に違わぬものであった。

「確かに剣軍は脅威、ですが避けなくては無いのですよ」

「無論、そんな事は理解しているさ。」

こんな小手先が通じる相手など、肉弾戦が不得手のキャスターくらいであろうよ。

だが、俺の目的はお前を倒すことではないッ！」

そう言うと、アーチャーはライダーを無視して間桐臓硯へ突進した。

「カッ———！」

驚きの声は、臓硯。

流石の翁もこの事態は予想していなかったのか、反応が遅れる。

「—————」

躊躇などする筈がない。

相手は外道の魔術師。

与えるべき慈悲はなく、救う道理もない。

アーチャーは容赦なく双剣を振り落とし、臓硯を真っ二つにした。

「これは――――手応えがない……」

そう、アーチャーは確かに間桐臓硯の体を切り裂いた。
しかし、奇妙な違和感。

何故か、間桐臓硯を斬った感触はあっても”殺した”感触がない。

「カッカッカッ、少し遅かったの。」

残念ながらアーチャーよ。お主はこれで仕舞いじゃ」

「なに――――ッ！」

アーチャーが飛び退くのと地面が抉られるのは同時だった。

もしアーチャーが動かなかつたら、彼もまた地面と同じ運命を辿ったであろう。

「馬鹿な。セイ、バーだと？」

「……………」

それは確かにセイバーだった。

不可視の剣を構え、アーチャーに対峙する姿は、紛れもない彼女そのもの。

だがその顔には、凛々しさはなく、ただ無表情な顔があるのみ。

「クッ、キャスターか」

「左様。彼の名高き騎士王があ程度の小細工でやられるとはちと予想外じゃったが、これでチェックメイトじゃのう。お主は孤立無援。」

いや、四面楚歌と言った方が正しいかの。」

臓硯が腕を一振りすると……分かってしまった。

アーチャーは囲まれている。

前方には契約を破戒され、キャスターに隷属しているセイバー。

上空にはキャスター。

後方にはライダー。

アサシンは見当たらないが、もしかすれば何処かに潜んでいるのかもしれない。

「念の入ったことだ。

小僧を放ってキャスターまで私に当てたか」

「当然じゃろう。衛宮の子倅など大した脅威、いや脅威ですらない。奴の足止めはキャスターの人形でも十分じゃろうて。

その程度の相手にわざわざサーヴァントを割くよりも、ここで確実に脅威を奪った方が上策であろう」

確かに、成す術はない。

切り札を使おうにも、詠唱を完了する前に、三体のサーヴァントは自身を滅ぼすだろう。

そうなれば、後はない。

（いや、後も何も、投影すらする隙がない）

こと、ここに至り完全なる詰みであった。

三方から油断なく銃口を突きつけられた自分では、投影魔術をする隙すら与えて貰えそうにない。

キャスターとライダーならなんとかなる。

しかしセイバーは無理だ。

所詮、アーチャーは白兵戦を主体とするサーヴァントではない。
セイバーとアーチャーが戦えば、その差は明確。
切り札を使わない限り勝ち目は無い。

そして現状では、その切り札すら使えないのだ。

「終わりじゃ、やれ」

短い一言。

三体のサーヴァントは同時に動き出す。

死角などない。

避けることなど不可能。

――瞬間、爆発が起こった。

「上出来だ、小僧！」

確認するまでもない。

この場にいる誰もが、動いていない中で爆発は起こったのだ。
ならば、誰が引き起こしたかなど明白。

「馬鹿な、この短時間で龍牙兵を突破したというのか!？」

臓硯が声を荒げる。

無理も無い、幾らキャスターがいなくなったとはいえ、魔術師一人
があこの山門を突破するには、結構な時間が必要なのだ。
桜からの情報で、未だ見習いの粋を出ない衛宮士郎が、この短時間
で山門を突破するのは有り得ない事態なのだ。

無論、もし衛宮士郎が普通の特訓をしていたならば、これほど短時間に山門を突破する事は不可能だった。

不可能を可能にしたのは、アーチャーとの特殊な特訓。

内容は、ただ剣を打ち合うという単純なものだが、それは同時に、英霊エミヤの経験を衛宮士郎へ伝えるという事でもあるのだ。

故に士郎は、この僅かな間に、急成長を遂げることが可能になる。

流石の臓硯も、士郎がこれほど成長していたとは気付かずに、手を見誤った。

キャスターを呼び戻し、確実にアーチャーを仕留めようとせず、大人しく山門を守らせておけばよかったのだ。そうすれば、幾ら強くなったとはいえサーヴァントよりは弱い士郎では、山門を突破出来なかった。

「フツ—————」

そして再び翁は間違える。

臓硯はアーチャーが遠坂凜の元へ向かうと考えていた。

しかしアーチャーは遠坂凜には目もくれず、上空のキャスターへと迫っていた。

「悪いが、逃がさんぞ、キャスター。」

—————「投影、装填」

アーチャーが持っていたのは無骨な斧剣だった。

臓硯はそれを知っている。

此度アインツベルンが用意したサーヴァント。

バーサーカーの使っていた斧剣だ。

「全工程投影完了—————ナインライブズブレイドワークス是、射殺す百頭」

超高速で放たれる九連撃。

肉弾戦が一介の格闘家にすら劣るキャスターでは、これを超える術などない。

悲鳴を上げる事も出来ず、キャスターは、今度こそ確実なる死を迎えた。

「うぐっ————」

キャスターが死んだ事によりセイバーの呪縛も解ける。

後はライダー。

そして間桐臓硯。

————いやもう一つ。

「……………」

黒い影が蠢く。

それが向かうのは、極上の餌であるセイバーに他ならない。

「致し方ない」

弓を構える。

誰も意識から外している今なら。

そう思い放たれた矢は見事、凜を縛る呪縛へと命中し、その拘束を破戒した。

「クッ、これで俺の仕事は終わり、だな」

「あ————今————も————ど————か————」

上手く聞こえない。

それが少し心残りではある。
だが構わない。

既に準備は整っている。
キヤスターが死に、セイバーが戻った今、先程より事態は好転した
といっている。

「だが、セイバーではあの影の相手は些か相性が悪い」

凜を確実に逃がす方法。

簡単だ、自分と敵を完全に世界から引き離してしまえばいい。

「早——戻っ——き——なに——」

何故だろうか。

上手く聞こえない。

——————幸せになりなさい。

その令呪は確かに届いていた。

英雄エミヤシロウに残った、たった一つの後悔。

愛した女を自分の我俣に付き合せ殺した。

嗚呼、ならばこそ、この結末は幸福だ。

この身は最期まで彼女のサーヴァントであり続けた。
彼女の味方であり続けた。

——ならば、我が生涯に後悔はなく、

「——My whole life was “unlimit
ed blade works”」

——その体は、無限の剣で出来ていた。

TURN 15 (後書き)

つ、疲れた。

やっと終わってくれた。

ぶっちゃけアーチャー主観で書くの苦手です。

次回から漸く主人公サイドへ戻れる……。
ではまた。

TURN 16

英霊エミヤが柳洞寺で散ってから三日後。

松田邸には、大体の傷を癒したギルガメッシュとバゼットがいた。

「見ろ、バゼット。」

「これは……なんですか？」

ギルガメッシュが取り出していたのは、奇妙な円形の道具だった。中心にある針は7という数字を示している。

「これはな、細かい説明は省くが、残りサーヴァントの数を示している。」

無論、この我を含めてな」

「つまり、現在残っているのはギルを含めて七人と。しかしそれは可笑的い。」

貴方が言うにはアサシンとキャスターは倒したのでしょう？
ならば7ではなく6を指すのではないですか？」

「然り。だが、それに関してはアサシンが何らかの方法で山門を離れ、まだ現界していると仮定すれば、まあ理屈は通る。しかし本当に可笑的なのは、そんな些細な事ではない」

立ち上がり、ソファに座りなおす。

「いいか。我がこれを使えるようになったのは四日前だ。」

そして四日前に、これは8を示していた。
更に奇妙な事に三日前にこれは7を示し、少しした後6を示した。
最後には再び7に戻った。これを如何思う？」

「つ、つまり貴方はこう言いたいのですか。
サーヴァントが倒された後に復活している、と」

「信じたくは無いが、その結論しか出てこなかった。
そして、最近になって冬木市全体を騒がしている行方不明事件。
犯人は未だ特定出来ず、手がかりすら見つけられない。
松田からの情報だが、なんでも………現場の状況を見るに、
人がその場で消滅してしまったかのよな、そんな様子らしい。
それでいて犯人の痕跡は全く無いときている」

「成る程。そんな事が出来るのはサーヴァントか魔術師でなければ
不可能です。」

それでギルには犯人の目星は付いているのですか？」

「………確信はないが、心当たりがある」

「本当ですか!？」

「ああ。我が見るに最も臭いのは間桐だ」

「間桐ですか。根拠は？」

「残りのサーヴァントとマスターだ。

セイバーとアーチャーのマスターは分かっている。

我が見る限り、遠坂の頭首は外道な方法を嫌うし、その遠坂と同盟
しているのだ。」

セイバーのマスターも同様だろう。

言峰は……こいつも容疑者の一人ではあるが、あれは理知深く同時に頭の良い男だ。

こんな教会を敵に回す事を大規模にはしないだろう。

残るはアインツベルンと間桐だけだ。

アインツベルンはサーヴァントを完全に制御出来ているので除外、となると消去法で間桐が一番怪しい」

「ですが間桐のサーヴァントは吸血行為によって魔力を奪う筈です。人間を行方不明にさせる理由があるとは思えません」

「だろうな。しかしサーヴァントを復活させるほど聖杯戦争に詳しく、かつ外道な行いを平然とする者となると、かなり絞られてくる。」

「では間桐に襲撃を掛けますか？」

「無駄だ、松田に聞き込みという名目で間桐邸に行かせてみたが、家は留守。」

「気になったので、我も財を使い調べたが、あれはもぬけの殻だ。」

沈黙が場を支配する。

この全く正体の分からない不安。

二人を慎重にさせるには十分であった。

「ギル、一つ提案があります」

「なんだ？」

「同盟を組む、というのは如何でしょうか？」

「ほう……」

悪い手段じゃない。

遠坂凜はこの事態が解決するまでの停戦と言えば、一先ずは納得するだろう。

「出来れば間桐以外の御三家どちらかと手を組みたいのですが、如何でしょう？」

「我は遠坂を勧める。

アインツベルンのバーサーカーとは現状で余り正面に立ちたくはないし、アインツベルンのことだ。

イレギュラーである我を見れば、真っ先に疑うか————ッ！」

「如何したのですか、ギル？」

感じる。

馬鹿みたいな力の奔流。

並みの宝具では、ここまでの力は出せない。

そして英雄王の記憶は、このヒカリに心当たりがあった。

「これは……エクスカリバーだと。

しかも、この方角は！」

地図を出して確認する。

彼の懸念は正しかった。

セイバーのエクスカリバーが放たれた場所、そこはアインツベルンの森であった。

黄金の魂に導かれし靈魂

第16話『ヘラクレス』

到着した時、最初に見えたのはバーサーカーと戦うセイバーだった。それはいい。

F a t e ルートでもバーサーカーとセイバーの戦闘シーンはあったから、別に可笑しい事じゃない。

問題は二つある。

先ずセイバーの動きが違っていたこと。

格段に良くなった動きとエクスカリバーを使用しても、ダウンしていない事から、マスターが凜になったのだと思われる。

そして大問題なのはもう一つ。

バーサーカーだ。

今のバーサーカーは鉛色の筋肉を禍々しい漆黒へと染め上げ、無茶苦茶な攻撃を仕掛けている。

なによりも士郎が庇うイリヤスフィールの姿。

もう何がどうなっているのか全く分からない。

「どうしますか？」

このままならセイバーが脱落すると思いますが？」

バゼットの言う通りセイバーは、バーサーカーの怪物染みたパワーで押されており、斧剣がセイバーを粉碎するのも時間の問題だろう。

「…………セイバーを援護する。」

「いいのですか？」

「ああ。何故だか知らんがアーチャーはいないようだし、アインツベルンのマスターと遠坂のマスターが都合よく揃っている。情報を得るチャンス逃がす訳にはいかん。

……………如何して、アインツベルンのマスターが敵である筈のセイバー達に守られていて、おまけにバーサーカーがその敵なのかは全く不明だがな」

王の財宝内からAランク相当の宝具を選び展開。

狙うのはバーサーカー。

「行けッ！」

狙い通り宝具達はバーサーカーの体へと飛び、貫く。

そしてバゼットと二人、セイバーの側へと飛び降りた。

「貴方はアーチャー！」

何故ここに！」

「それは、こちらが聞きたい。

あれはなんだ？

バーサーカーはアインツベルンのサーヴァントであろう。

それが如何して自らのマスターを襲っている！？

……………と言いたくはあるが、先ずはあれを片付けなければ始まらない！」

宝具によって貫かれたバーサーカーは既に、回復、いや再生を始め

ていた。

「■■■■■■■■■■ッ！」

雄叫び、蘇ったバーサーカーは乱暴に斧剣を振り回し暴れ始めた。それはまるで台風を擬人化した姿。

周囲の木々はただバーサーカーのパワーの前に倒されるだけ。

「如何してこうもイレギュラーばかり起きる。

だが、幾らバーサーカーと言っても動きが出鱈目過ぎるな……。よもや目が見えないのか？」

「恐らくはそうでしょう。

黒化した事でパワー自体は上がっているようですが、動きの方はより単調、いや適当になりました。

今の彼は、ただ得物を振り回しているに過ぎません」

そうは言っても脅威なのは変わらない。

ただ振り回すだけというが、逆に一度でも攻撃を喰らえば、それだけで致命傷になりかねない。

例え黄金の鎧を纏っていてもある。

「セイバー、聖剣で一気に吹っ飛ばす事は出来んのか!？」

あれを一度づつ殺すのは手間だぞ！」

「一度づつ……?」

そうか、ヘラクレス十二の功業。

彼は十二の生命を持つのですね!？」

「阿呆がッ!今はそんな事を言っているのではない!」

「そうか、アーチャーが何故お前達に敵対しているかは、この場では問わないでおこう。つまりお前はアレを倒す切り札がない、そう言っているのだな」

「……残念ながら。」

そう言う貴方はどうなのです。

ギルガメッシュ、貴方の宝物庫にはバーサーカーを倒しうる宝具も収められているのでは？」

「私の真名まで知っていたか。

いや、この場では聞くまい。

……しかしアレを倒しきる宝具となると……キツイな。

一度なら如何とでもなるが、十二回殺すとなると……手詰まりだ。ここは退却を考えた方が吉だろう。」

「分かりました。

私が突っ込みます、貴方は援護を」

「良からう」

魔力を放出。

セイバーの体が消えた、そう思った瞬間にバーサーカーの懷に潜り込む。

一撃、二撃、次々と斬撃を当てるが、それでもバーサーカーには傷一つつかない。

「伏せろ、セイバー！」

Aランク以上の宝具数個を含む、三十の宝具。

それらを同時に射出。

「■■■■■■■■■■ッ！」

並みの英雄ならば回避不能の連続攻撃。

しかし彼はギリシャの大英雄ヘラクレス。

狂化されて尚も失われていない天然の戦術眼。

数ある宝具の中で自分を殺しうるAランク宝具のみを識別し、叩き落す。

「チッ——化け物かッ！」

Aランクに満たない宝具を幾らぶつけようとヘラクレスは倒せない。そうUBWLートのギルガメッシュがバーサーカーに勝利出来た理由の一つがこれだった。

数個程度のAランク宝具では無意味。

大英雄は数個のAランク宝具を正確に叩き落してしまう。

故にUBWLートのギルガメッシュは”Aランク以上の宝具”だけを使った殲滅戦を行ったのだ。

如何な大英雄も迫り来る武器全てがAランク以上では抗うことも出来ず敗れ去った。

しかし今はそうではない。

制限により全ての宝具を使えないギルガメッシュでは、ヘラクレスに及ばない。

「ならば、ほらAランク宝具の雨だッ！」

数少ないAランク宝具の全てを展開する。

総勢50、如何な大英雄ですら防ぐことの敵わない数。

合図と同時に飛来する魔弾は、容赦なくヘラクレスの体を貫いていく。

「■■■■■ッ！」

誰へと向けた叫びなのか。

ヘラクレスの巨大な声に森が震えた。

決死の覚悟で放たれたAランク宝具の雨。

しかし、それを以ってしてもヘラクレスを四回殺すのが精一杯だった。

フラガ・ラック
「斬り決る戦神の剣！」

その時、ギルガメッシュの横を高速で通過しヘラクレスへと向かう閃光。

数少ない現存する宝具は、その効果を十二分に発揮して大英雄の命を一つ奪い去った。

「バゼットか！」

「ええ、どうやら彼の宝具は常時発動型のようですので。」

「ああ、助かった。」

これで残りの命は七つ……それでも多すぎるぞ！

おい騎士王、本当に聖剣は使えんのか？」

「せめて命が残り三つ程ならば出来なくはないのですが、七つでは……」

（駄目か、やはり逃げるしかないのか？

てギルガメッシュに、かなりのダメージを喰らわせていた。

（体が……上手く動かん。

急いで回復せねば……）

バゼットや遠坂凜が自分に駆け寄ってくる。

それを第三者のように眺めながら、王の財室内に手を伸ばす。

（セイバー一人ではそうは保たん。いや、それ以前に例え我／俺が回復し戦いに参加したとしても、別になんら変わらん。我／俺にはセイバーのように近接は無理であるし、何よりAランク宝具は玉切れ。

これが英雄王とは滑稽過ぎて笑いも出ない。

所詮は英雄の偽者、ただの人間が大英雄に勝とうとするなど夢物語だったのか。）

手が止まる。

そう、別にここで目を瞑ってしまったても誰も文句は言わない。

どうせ自分は一度死んだのだ。

こんなに苦しむ事は無い。

楽になればいいのだ。

（いや、そもそも我／俺は何でセイバーに加勢したんだ？

あの状況ならば一先ず様子を見て、セイバーが不利になれば離脱すれば良かった。

敵が幾ら強大だろうと、記憶が回復するのを待てば、勝てない相手なんてそうはいない。

なら如何して、こんな不合理な決断をした、なんでだ？

分からない分からない分からない分からない分からない。
出てくる答えは全て不明。

自分の事が理解できなくなったのは初めてだ)

セイバーを見る。

彼の騎士王も自身の攻撃が全く通じない相手では分が悪い。

このままでは、そう長くない。

やがて力尽き死ぬだろう。

—————その考えに至って漸く気付いた。

(そうか、俺／我はもしかと思ったが……………。

ハハハハッハッハハハッハッハハハッハハハ、なんだそれは？

滑稽だ、笑い話だ。そんな下らない理由で俺は命を張っていたのか。

嗚呼、下らない。馬鹿らしい。

どうせ我／俺には手に入らないと理解しているというのに、俺は何をやっている。)

手に再び力が灯る。

王の財宝に手が伸び、やがて一つの瓶を掴んだ。

「だが、まあ。

仕方ない、本当に仕方ない。

男っていうのは昔っから惚れた女は命張って守らなきゃならない。

自分が一番大事なりアリストで居たかったが、どうせ一度死んだ命だ。

こういう熱いのも悪くはない」

瓶に入っていた水を被ると、たちまち傷は癒えていく。

だがまだ足りない。

回復したといえど、これでは勝ち得ない。

「そうだ、俺は逃げていた。

英雄王ギルガメッシュの重圧に、世界を背負うという重みに。覚悟を決めるしかないか、自分が如何なるか自信ないが、悲しい事に俺は男だからな。」

今だからこそ認識出来るが、英雄王ギルガメッシュの記憶は重すぎる。

記憶だけでも人間○○○○を容易く飲み込んでしまう程の毒性があるのだ。

だからこそ、自分で無意識に入ってくる記憶を制限していた。少しずつ安全に記憶を取り込めるように、と。

—————そのリミッターを敢えて外す。

瞬間、流れ込んでくる大量の記憶。

そんな事はどうでもいい。

必要なのは戦う術。

大英雄ヘラクレスを打倒し得る術を検索する。

乖離剣エア使用不可。

天の鎖使用可。

Aランク宝具30%使用可。

ただしヘラクレスを倒しうるかは不明。

足りない、まだ足りない。

欲しいのは確実性だ。

絶対にヘラクレスを倒せる力。

「あった、これなら！」

一度でも失敗すれば命は無い。

そんな隙を見ればヘラクレスの剛剣は今後こそギルガメッシュの肉体をミンチにするだろう。

だが、そんな状況でありながら、心は酷く穏やかだった。

「セイバー、伏せろッ！」

「ッ！」

発した言葉を信じたのか、それとも咄嗟の判断だったのかは分からない。

それでもセイバーは身を屈めてくれた。

これならば、いける！

「開幕といこう！」

天の鎖がヘラクレスに巻き付け、自身の下に引き寄せる。

一瞬の隙すら与えない。

瞬時に取り出した剣を持って叩きつける。

そして次は深紅の魔槍で胴体を突き刺した。

そのまま一撃、更に払い、弾き飛ばす！

「天の鎖よ！」

天の牡牛すら捉えた鎖が、大英雄を完璧に拘束。

身動きをとれなくなったヘラクレスへと最後の審判を下す。

ゲート・オブ・バビロン
「王の財宝————これで終わりだ」

天地波濤す終局の刻

英雄王ギルガメッシュの数少ない対人用攻撃法。

もはやヘラクレスに防ぐ手段などない。

成す術もなくなった大英雄は、暴雨をただ静かに、受けた。

「死んだ、のか？」

完全に動きを停止したヘラクレスを見て、士郎が呟いた。

その声が、漸く全ての人間に脅威が去った事を認識させる。

「はい、バーサーカーは滅びました。

余力を使い果たし後は消えるのみでしょう。」

「然り、だが念には念を入れておこう。

幸いこの状態ならば後一度殺すにしても大した労は必要ない」

もやは動かなくなった大英雄。

その神性さもあって、その姿はまるで一つの芸術のようでもあった。

「それもこれで終わり、か

終わってみれば呆気ないものであったな」

剣を振り下ろそうとして、手を止めた。

「これは、なんだ。

バーサーカーの体にヒビが…？」

「そんな……嘘。」

まさかバーサーカーを触媒に？
でもそんな馬鹿なこと……」

「如何したというんだ、アインツベルンのマスター！
言いたい事があるならば、さっさと————」

言えたのはそこまでだった。

余りの衝撃と悪寒に、直感的にその場を飛び退く。

異常だった。

何時の間にやらバーサーカーの立っていた場所には、見知らぬ誰かが立っている。

簡素な服装に、男とも女とも取れる柔和な風貌。

生前は穏やかであっただろう表情は狂化によって歪められている。

「そんな、馬鹿な————」

その姿を見て反応したのはギルガメッシュであった。

予想外過ぎる者の登場、いや生誕に彼自身が最も恐怖していた。

「見間違える筈がない、我にある記憶で最も鮮明であったのだ。」

そう彼の名は英雄王ギルガメッシュの記憶に最も深く刻まれている。
当然だ、彼は唯一ギルガメッシュと互角であった英雄なのだから。

————エルキドゥ、それが召喚された者の正体であった。

【クラス】バーサーカー

【マスター】間桐桜（間桐臓硯）

【真名】エルキドゥ

【性別】男性

【身長・体重】190cm 81kg

【属性】秩序・狂

【能力】筋力A++ 耐久A++ 敏捷A++ 魔力B 幸運
C 宝具A++

【クラス別能力】

狂化…C

幸運と宝具以外のステータスをワンランク上昇させる。

ただし理性が失われ複雑な思考が不可能になってしまう。

【保有スキル】

獣性…A++

元々は獣のように生きていたが故に自然に身についたスキル。

昆虫や動物、果ては幻想種との意思疎通すら可能とする。

これ程のランクだと野生的な直感による近未来予知が可能。

気配感知…A++

最上級の気配感知スキルを持ち、遠く離れた水源ですら、その存在を察知する事が出来る。

また意図的に気配を断った者だろうと、その存在を見破る事も可能。

神の粘土…A＋＋

創造の女神アルルによって造られた肉体。

幻術や精神干渉を無力化し、宝具はランクB、魔術ならランクA以下のものを無効化する。

また凄まじい自然治癒能力を持ち、大抵の傷は何もしなくても勝手に治る。

ゲイ・ボウ程の治癒不可の呪いでなければ、問答無用で治ってしまう。

【宝具】

『^{フンババ}野牛落とす幸運の斧』

ランク…B

種別…対人宝具

レンジ…1～2

最大補足…1人

エルキドゥが森の怪物フンババを倒す際に使用していた斧。
原典は存在せず、所有者の幸運をワンランク上昇させる。

『^{ギルガメッシュ}朋友がいるからこそ』

ランク…A＋＋

種別…対人宝具

レンジ…0

最大補足…1人

エルキドゥが朋友と認めた者が後ろにいる際、相手のステータスの中でエルキドゥを上回っているものが一つでもあるならば、そのス

テータスだけ相手と全くの互角になる。

つまり魔力ランクがA+のキャスターが相手ならば、エルキドゥもランクA+になるということ。

朋友と二人ならば、どんな困難だろうと打ち破ってきた伝承が形となった宝具。

『天地^{ルガルバンダ}圧縮す怒りの咆哮』

ランク…A+

種別…対城宝具

レンジ…1～99

最大捕捉…1000人

野牛落とす幸運の斧^{フンババ}による空間圧縮。

極限にまで圧縮された空間の塊をエルキドゥの筋力によって打ち出す。

原理的にはシンプルな空気砲に近いが、威力は段違い。

ギルガメッシュの乖離剣エアに威力自体は一步劣るが、これを振るうのは規格外のパワーを持つエルキドゥなので実際には互角。

現在では理性を失っている為に使用不能。

余談だが、乖離剣エアとは違い無限の剣製で複製可能。

とはいってもエミヤの属性はあくまでも”剣”であり、宝具の威力そのものがエルキドゥの規格外の筋力に依存している面もあるので、複製したとしてもエクスカリバー以下の威力にしかならず、それにしては消費する魔力も段違いなので、効率が良いとは言えない。

【詳細】

熱心なFateファン、またはギルファンなら絶対に知っているであろう英霊。

ギルガメッシュ唯一無二の朋友にして、彼と肩を並べる存在。

ちなみに、ステータスなどは作者の想像なのであしからず。

コンセプトは英霊エミヤやランスロットのような相性ではなく、素でギルと互角の存在。

なので王の財宝を耐え切る身体能力、乖離剣エアと互角の出力を持たせた。

宝具である『朋友がいるからこそ（ギルガメッシュ）』のせいで、二人揃えば型月最強になってしまうのはご愛嬌。前衛のエルキドゥ、後衛のギルが揃えば敵無し、文句なしに最強のサーヴァントである。

TURN 17

「逃げろォ！」

ギルガメッシュが叫ぶ。

「一体どうしたのです！」

何故バーサーカーから別のサーヴァントが召喚されたかは分かりませんが、今のバーサーカーは混乱しています。倒すなら今が好機です！」

「そのような問題ではない！」

あれには到底勝てん！召喚された直後だからこそ逃げるべきなのだ！」

普段のギルガメッシュからは想像出来ないほど焦った様子。

流石にただ事じゃないと悟ったセイバーが言う。

「察するに貴方にはアレの正体に心当たりがあるようですが？
もしや真名を知っているのですか？」

「あれはエルキドゥだ！」

「なっ！」

—————エルキドゥ。

その名はセイバーも知っていた。

英雄王ギルガメッシュに唯一並び立つ存在であり、英雄王の唯一無二の朋友。

ならばこそ、その存在は――――。

「な、なによあいつのステータス。
ヘラクレスどころじゃないわ……………」

「そんなに凄いのか、遠坂？」

「凄いなんてものじゃない。
完全に規格外よ、あいつ。」

幸運と魔力以外のステータスが全部A＋以上。
おまけに筋力と耐久はA＋＋＋って如何いう事！？」

「分かったであろう！今は退け！
エルキドゥ相手ともなれば、生半可な攻撃では通用せん！」

「……………分かりました。」

ここは貴方の判断に従いましょう。
しかし、どのように離脱するのです？」

「…これだ。」

王の財宝から絨毯を取り出す。

柳洞寺での戦闘にも使用した空飛ぶ絨毯だ。

ギルガメッシュ、バゼット、セイバー、士郎、凜の五人は絨毯に乗ると、その場を離脱した。

その頃、間桐桜の前には兄である間桐慎二がいた。

「桜……なんだよ、その格好？」

慎二は変わり果てた桜の姿に呆然となる。

全身を覆った黒い影、白く変色した髪の毛。

嘗ての桜の面影はそこにはない。

「カッカッカッ、慎二よ。」

間桐の恥を晒しただけに飽き足らず、ワシに齒向かうか？」

「そ、そんな……その声はお爺様！？
なんで桜が……」

「簡単なことよ。」

桜が余りにも馴染むのでな。

年には念を入れ、心臓だけではなく脳髓に我が蟲を寄生させただけ。
さて、問答はこれまでかの？

慎二、度重なる失態そして反抗。

もはや我が孫とはいえ、些かやり過ぎたの。」

黒い影、アサシンが出現する。

「……なっ！アサシンだって……」。

アサシンのサーヴァントは柳洞寺の侍じゃないのかよ！！」

「カッカッカッ、問答は終わりと云っただろうに。
やれアサシン。」

「おっと、悪いがこんな奴でも俺のマスターなんでね。やられる訳にはいかねえな。」

慎二を庇うようにしてランサーが立つ。

「カッカッカッ、槍兵よ。」

これは丁度良い、聖杯の完成にはまだサーヴァントを器に注ぐ必要があるのだな。

ランサーのサーヴァント、お主にはここで脱落して貰うとしようかのう。」

「ほざけ、妖怪。」

貴様如きにやられるようじゃ、俺は英雄なんて呼ばれてねえよ!」

疾走するランサー。

それを迎え撃つアサシン。

白兵戦においてランサーとアサシンでは比べ物にならない。

アサシンのサーヴァントはあくまで暗殺者。

マスターを討つ者でありサーヴァントを討つ物ではないのだ。

まして、相手は光の御子。

「……私の短剣が効かない？

そうか、流し矢の加護。」

「おうよ、生まれつきでな。」

その距離からの投擲じゃ、余程のモンじゃねえと俺には効かん。」

アサシンは分が悪いと判断したのか、間桐臓硯が救う桜を抱え離脱

する。

勿論、ランサーが見逃す筈が無く追跡した。

しかし白兵戦においてはランサーが勝るが、ことスピードに関して二人は互角。

となれば、決して追いつかれず、追いつく事も無い逃走劇が始まる。

「ちっ、逃げ足の速い野郎だ。」

「おいっ！追うのはいいけど何で僕を抱えてんだよ！」

「あん？仕方ねえだろ。」

お前をあそこに残してたら他の野郎にやられ————」

瞬間、ランサーが飛び退く。

同時に響き渡る爆発音。

ランサーが避けていなければ、あの爆発に巻き込まれていただろう。

「ちっ！まさかテメエがあ妖怪の下にいたとはな。アーチャー！」

「……………」

ランサーから随分と離れた距離に、前回戦った弓兵がいる。

いや、前回戦ったという表現は変かもしれない。

今のアーチャーが纏っているのは赤い外套ではなく黒い外套。

そう、柳洞寺で殿を務めた後、アーチャーも臓硯によって黒化されていたのだ。

「この距離、それにアサシンまでいるとなりや不利だな。

慎二、ここは退くぜ！」

「な、何考えてるんだ！

この僕が退くなんて——————」

その続きを慎二が言う事はなかった。

ランサーが強制的に慎二を黙らせたからだ。

「たっく、一体全体どうなってやがんだ。

アーチャーの野郎は黒化するは、変な金ピカがいるわ。
聞かされていた聖杯戦争とは随分と違うじゃねえか。」

そうこうしているうちに、次弾が飛んでくる。

それにアサシンも、木の陰に潜んでいる、かもしれない。

「先ずは情報を————あん？

なんだ言峰、………あの嬢ちゃん達に協力しろ、だと？
何考えてやがる。………わあったよ。」

慎二ではない本当のマスターからの命令に、嫌気が差しながらもランサーは、命令通り言峰の弟子である遠坂凜の元へと走った。

「それじゃあ、金ピカ。

どうしてエルキドゥが召喚されたか、分かる？」

衛宮邸に帰還した五人はギルガメッシュを問い詰めていた。

「知らぬ、そもそも我にはサーヴァントが蘇っているカラクリすら分からのだ。」

何故、エルキドゥが召喚されたかなど分かる訳がなからう。」

「では貴方は何故今日まで現界してこれたのです？
聖杯がなくなればサーヴァントは座に帰る筈では？」

「それに関してはセイバー。」

お前が聖杯を破壊した時に、我は聖杯の真下にいたのだ。
結果として、破壊された聖杯の中身を浴び我は現界を果たした。」

ギルガメッシュに記録された情報を元にセイバーに応える。

「……そうなのですか。」

しかし、如何してサーヴァントが復活して、」

「それは私が答えるわ。」

「イリヤ！怪我は大丈夫なのか？」

「大丈夫、この程度の傷なら私でも簡単に治せるわ。」

一呼吸置いた後、イリヤが話し出す。

聖杯戦争の真実を————。

聖杯が小聖杯と大聖杯に分けられていること

第三次聖杯戦争にてアインツベルンが召喚したアンリ・マユにより
聖杯が汚染されたこと。

大聖杯を破壊しない限り聖杯戦争は終わらないということ。

間桐桜は間桐臓硯が作った小聖杯であること。

イリヤ自身も聖杯ではあるが、死んだサーヴァント達の全ては桜の聖杯にあること。

臓硯が桜の心臓と脳髓に寄生していること。

「……………はんっ！聖杯戦争の裏側がそんな事であったとはな。」

忌々しそうにギルガメッシュが言う。

なんといったって、その情報さえ知っていれば聖杯戦争開始前かその直前に、大聖杯を破壊していればそれで全て終わった筈だったのだ。

つくづくHFルートをプレイしていなかった事が悔やまれる。

「なら桜を助けに行かないと！」

桜が聖杯だっていうなら、それを—————。」

「で、具体的にどうやって助ける気なの、衛宮君？」

「え、それは—————。」

応えられない。

居ても立ってもいられず、そう言ったが心臓に巣食っているという臓硯を取り除く方法など、士郎は知らない。

そう、桜ごと臓硯を殺すという方法以外は。

「それならば問題ない。」

ギルガメッシュが折れ曲がった歪な剣を取り出す。

「これを貴様が投影し、間桐桜に突き刺せばいい。」

殺傷力は普通のナイフ程度しかない宝具だが、こと対魔術においては最高の宝具だ。
蟲程度ならなんなく殺せる。」

「そうなのか…。」

「ほれ、一時的に貴様に所有権を移してやる。」

「あ、ありがとう。」

短剣を士郎へ渡す。

「……………意外ですね。」

貴方が、人のためになる事をするとは。」

「まあ、そうだな。」

実際、我にとって間桐桜なんぞ、その他大勢の中の一人だ。
別に死のうと生きようと、余り関心はない。」

少しかだけ突き放した言い方だが真実だ。

彼にとって、間桐桜はゲームの中で少し知っているだけの存在。

言ってみれば、TVで報道される殺人事件の被害者のようなものだ。
人々は悲惨な事件の被害者を見ても、同情はするが特に何の行動もしない。

精々、可哀想だという言葉を書いて終わり、特に行動を起こすわけでもない。

彼にとっての間桐桜は正にそれだった。

その境遇には同情する、しかし自分の命を賭けてまで助けるなんて持っただけの他。

良い意味でも悪い意味でも、ギルガメッシュに憑依した人物は普通の日本人でしかないのだ。

「では、何故助けたのです？」

「そんなもの、話がややこしくなるのが面倒だからだ。間桐桜の事はどうでもいいが、それで事態が混乱するのは避けたい。とまあ、そういう事情は置いておこう。

今は聖杯だ、大聖杯を破壊しなければ聖杯戦争が終わらないというならば、直ぐに破壊せねばなるまい。」

聖杯さえ完全破壊すれば、アンリ・マユが復活する可能性は消える。そうすれば、聖杯戦争を生き残れるだろう。

「だけど、そんな事は間桐臓硯も分かっている。ならたぶん、エルキドゥにアサシン……それにアーチャーも敵として立ちふさがるでしょうね。」

凜が苦虫を噛み潰したような顔をする。

「って何時までも引き摺ってても仕方ないわね！」

それでエルキドゥは金ピカが抑えるとして、後はアサシンとアーチャー。

もしかしたらライダーも生きてるかもしれないわね。」

絶望的な状況だ。

セイバーが強力だとはいえ、アーチャー、アサシン、ライダーの三体相手では勝てない。

ギルガメッシュの方はエルキドゥの相手で精一杯。

せめて、あと一人ほどサーヴァントが欲しいのだが……。

「面白そうだな、その話俺も乗らせて貰うぜ！」

「「「「！」「」」」」

一斉に外を見る。

そこには前と変わらぬ、蒼い槍兵が立っていた。

TURN 17 (後書き)

お待たせして申し訳ありません (泣)
いよいよ物語も終盤、あと一二話で完結できそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1337n/>

黄金の魂に導かれし靈魂

2010年10月30日17時50分発行